

成年向け雑誌

二次元 平成25年12月1日発行第10巻第7号通巻86号

2D DREAM MAGAZINE ドリームマガジン

cover illustration by カグユツ

カラーピンナップ
うるし原智志
まるん☆まるん
カグユツ

えっちマンガ&4コママンガ
無望菜志
MISS BLACK
ばふえ / おおたけし
冬扇 / 石野鐘音
嘉納あいら

連載&読み切り小説

期待の新作美少女ゲームが小説化!

未来戦姫スレイブニル

狩野景×はっとりまさき×STAR GAZER

新連載小説・淫々しき女軍人たちの散花!

軍属麗奴ツバキ

淫れ散る三戦華

高岡智空×からすま式

新居佑×sian / 火村龍×牡丹

上田ながの×冬扇 / 山本沙姫×阿部のり

なるかく×ていあな / 酒井仁×一夢

木森山水道×カグユツ

産みたくはないの

やだ...もう

立ち読み版

今号の特集

DIGITAL EDITION
デジタル版

vol.73
2013

12

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

なえ どこ 苗床少女

第1巻
苗床少女
特集

苗床の魔法少女
メロディアス オトハ

き もりやますいどう
小説 / 木森山水道
NOVEL

挿絵 / カグユヅ
ILLUSTRATION

侵略者の卵を孕むだけの苗床へと
成り下がる可憐な魔法少女……!!



膣に圧迫される快感で満ちていく触手が半透明になり、小さな卵がびっしり並ぶ様子が見えた。

「密かにお前から奪った原始卵胞を俺様の体内に取り込んで卵を作り、俺様の精子を受精させて作った卵だ。要はお前とのガキだな。こいつを子宮に詰め込んで、産卵してもらって寸法さ」

触手は猛烈な勢いでピストン運動を始めた。

魔法少女の処女膣ヒダを上へ下へとめぐり上げながら、結合部から粘液を飛び散らせる。

「ふうっ、強力な魔法少女の処女マンコを犯すのは最高だぜ、ああ、チポ触手が濁けそうだし」

息を荒らげるトーンがニタニタ笑う。

「ひぐうっ、い、いやあつ、動かないで、く、苦しい、気持ち悪い、すぐ抜いてよお！」

触手が気持ちよさそうにビクつく一方、性感と無縁だったオトハには嫌悪しかない。

触手粘液のお陰で、ヌルヌルする摩擦感には痛みはないが、化け物と初セックスをしている汚辱感で吐き気がこみ上げてくる。

「くうっ、はああ、ああ、たまんね、もうイキそうだ……イクぞオトハ、卵を出すぞ？ うオオッ、妊娠経験のない乙女の子宮に産みつけてやる！」

魔法少女の処女膣で自由気ままにピストンし、焼けつくような牡快楽の固まりになった触手は、子宮口を抜け、赤子の肉部屋に顔を出した。

「ブビュールウウウウウウッ!!!」

派手に痙攣した熱く硬い肉紐に、処女膣も子宮も揺すぶられた後、子宮にポトリと落とされた感覚。

「い、イヤアアア！ た、卵、卵があああ!!」

見た目は小さいのに、ずっしりと重い。子宮の肉を内側から押ししている確かな感触は、激しく身じろぎしても消えず、居座っている。

（どうしてこんな目に遭うの？ わたしは勝って、戦いは終わったと思ったのに）

半年間ずつと一緒に過ごし、仲良くしてきた友達が豹変したこと、実は自分を利用して来たのだという事実、化け物に初めてを奪われ、しかも自分と血を分けた卵を産みつけられている現実。惨めで辛く、気持ち悪くて仕方がない。

戦い抜いて敵の大幹部も打ち倒した魔法少女の目から、大粒の涙がこぼれ出す。

「おいおい、泣いている場合か？ ほれ、スティックを返してやるから、人間どもを元に戻せよ。人間を救うのも魔法少女メロディアスオトハだろ？」

触手に奪われていたスティックを力なく受け取ったオトハは、マイクを構えた。

（うう……そうだった……わ、わたしが皆を救わないと……こんなことに負けちゃいけないのよ）

「ぐすつ……はあ、はあ、ま、まぶしいあかつきつ、あめありいん、おもいか、ひぐうううう！」

「はっ、ふうっ、どうした、音程外れまくりで歌になつてねえじゃねえか、オラオラッ」

「だ、だつて、トーンが、あぐううっ、しょ、触手とめないから、あ、ああ、ま、また膨らんでるつ、だめ、卵植えつけないでえええ！」

身体の芯から揺すぶられる激しいピストンを続けられているのは、どうしても満足に歌えない。

触手がビクビク雄々しく震え、卵を出そうとしているのがわかると汚辱感と怯懦心に支配され、悲鳴を上げてしまう。

喘いで呻いて、大好きな歌を普段通りに歌えない状況は、犯されて卵を産みつけられている惨劇を思い知らせ、涙が滝のように流れてくる。

「ふううっおおおッ、オラ出すぞ！ 出世のために、もつとお前と俺の卵を詰め込んでやる、俺様のために、一人前の苗床魔法少女になれエ！」

「あつ、はあ、ああああ……ま、また、ポトッ、て、お腹にッ……苗床なんてイヤアアア!!!」

トーンが気持ちよさそうに触手を震わせ、卵を産みつけるのとは反対に、オトハはか細いスティックを抱きしめ泣きじゃくる。

メロディアスオトハは容赦なく卵を射精され、臨月の妊婦のようになっていくのであった。

III

「さあオトハ、終わりを始めようじゃねえか、アヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

裏切り者であり、オトハのお腹の卵の父親でもあるトーンは、本当は戻れる正体ではなく、二頭身の不思議生物の姿のまま下品に哄笑した。

最初に卵を詰められてから一週間が過ぎている。場所は《ハウリング》との戦いの始まる場所でもある駅前で、モニターというモニターに自分の姿が映っている。空には禍々しい雲が隙間なく広がり、底冷えする空気が漂っていた。

周囲の人々は既に、先ほどトーンが歌った絶望の歌の影響下にあり、石化し始めている人もいる。

「あうっ、はあつ、はあつ、う、歌わなきや……み、皆を助けなきや、ひやううん……!!」

変身コスチュームを、敗北感たつぷりに破かれているオトハは、無数の触手に責め立てられていた。卵を仕込まれながら、ずつと陵辱されていたので、コスチュームも若い女体も触手粘液にまみれ、ヌラヌラと淫靡に照り光っている。

「ま、負けずに歌うんだから、ああンンッ!!!」

触手に女の子の初めてを奪われ、子宮に卵を落とされた時は悲しくて気持ち悪くて絶望しかけた。

しかし、半年間の変身ヒロインとしての活動で育まれた、魔法少女として悪に負けたくない気持ちと、音楽や歌を守りたい心は、か細すぎる糸のようではあるが、何とかまだ残っている。

（どうしてこんな目に遭うの？ わたしは勝って、戦いは終わったと思ったのに）

発売を控えた注目の美少女ゲームがオリジナル小説で登場!

未来戦姫 スレイヴニル

slavenil the
war-maiden

かりのけい
小説 / 狩野景

挿絵 / はっとりまさき

原作 / STAR GAZER

血に染まる未来から自分を護るためにやってきた
変身ヒロインが精子を求めて迫ってくる!?



初夏のわずかに熱気を孕んだ風が頬を撫でる日曜日。如月カタナは少し遅い朝飯の仕度をしようと、台所の冷蔵庫をまさぐっていた。

幼い頃から武道の修行をしてきたため、引き締まった体付きをしていて、顔立ちも悪くない。けれど女心に対しての鈍さと、エロへの好奇心を隠そうともしない態度が災いして彼女が出来たことがない。

「トーストと牛乳だけでいいか」

両親は少し前から長期の海外出張。自炊もいい加減面倒になり、手抜きで済ませようとしたそのとき、

バキッ！ メキメキバキッ！！ ドゴアアッ！！
「うわああああっ！ な、なんだっ?!」

玄関を突き破って何かがすごい勢いで突っ込んできた。台所まで廊下を一気に進み来ると、カタナの姿を電子の眼に捉え空中浮遊したまま停止する。

「ああ、これ……ロ、ロボット……?!」

機械剥き出しのボディに幾種類もの武器を装備した姿は、まるでSF映画か何かに出てきそうだが「DNAサンプル一致、目標確認。作戦行動開始」

カタナの身体に光線を照射すると、緑に光っていた電子眼が赤に変わり、銃口の狙いを定める。「ま、まで、本物……? なのか? シャレにならないぞ……、これ!!」

絶体絶命の事態に身体が動いた。
ブオンッ!!

台所から飛び出し居間へと転がり込む、その目

の前に目映い光球が出現した。

「うわっ、今度は何だ?!」

輝きを増すその中から、淡い赤紫の髪を天使の羽根のように広げた、儂げな美貌の少女が舞い降りてきた。

「あなたが……私の主、ですね? 如月、カタナ。そしていまは西暦2013年」

抑揚の欠けた、しかし鈴の音のように澄んだ声を奏でながら、真っ直ぐな眼差しで少年をじっと見詰め、優雅な所作で傍らに降り立つ。

（お、女の……子……?! し、しかも、すごく……可愛いっ!! それにしても、主……って?）

細く腰が括れたスリムな身体に、長手袋とロングブーツに包んだ長い手足がすらりと伸びる。

しかも、露出度の高い可憐な純白ドレスからは、キュッと引き締まった尻と、肉感的に熟れ実った美巨乳がいまにも弾け出しそうに揺れる。

「き、君は……?」

神々しい姿に見とれて、上擦る声で尋ねる。

「私はXDG・01EXE、エクゼ。あなたを護るため未来からやってきた、スレイヴニルです」

「スレイブ……ニル……?」

「敵性スレイヴニル確認! 排除!!」

ドガガガガガガッ!

聞き慣れない名称をオウム返しすると、ロボットの銃口が無数の弾丸を乱射する。

「おわっ!!」

だがエクゼと名乗ったその少女は少年を抱きかかえ、一瞬の跳躍で庭まで移動した。

「わふっ!!」

ギュッと抱きしめられ、圧倒的なボリュウムの乳房に顔が埋まる。

（お、おっぱいっ!! こんな、柔らかいんだ!!）
その感動に浸る間もなく、敵が空中を浮遊してこちらへ向き直る。

「殲滅します。そちらの物陰に退避して下さい」
抱擁が解かれおっぱいの感触に名残惜しさを感じつつも、大急ぎで庭の隅にある物置の陰に隠れる。

「バトルドレス（アウロラ）エンゲージ!!」

カタナの安全を確認すると、戦闘機械に一人で対する少女が呟く。その途端に、彼女のドレスが物々しいプロテクターと化し、機械の羽根にも、強固な盾にも見える長円型の自律攻盾が、身体の周りに浮遊していた。

「フレキシブル・ライフル（グラム）!!」

淡く輝く粒子が収束し、エクゼの左腕が一瞬にして巨大な銃身と化する。

ドガガガガガガッ!!

戦闘機械はなおも激しい銃撃を続けるが、
「無駄です。対人用武装では、私の自律攻盾（スヴェル）を突破することは不可能です」

彼女の周囲を目まぐるしく飛び回る遠隔操作の機体が、すべての弾丸を弾き返していた。

「弾種セレクト、アルトラン粒子砲、出力20パーセント……」

撓な胸を弾ませながら、銃と化した左腕の狙いを敵に定める。

「ファイア!」

ドシュー——ンッ!!

その銃口から発射された目映ゆい輝きの高出力ビームが、一瞬にして敵ロボットを粉砕し、そしてついでにカタナの家を跡形もなく吹っ飛ばした。「殲滅完了いたしました。戦闘モード解除」

その傍らでエクゼは無表情な顔で心なしか得意げに報告しながら、元の長手袋とロングブーツにすらりとした手足を包み、純白を基調としたミニスカートの露出度が高いのに可憐さを窺わせるドレス姿に戻った。

「はがああああっ!? い、家がッ、親父に殴り殺される!! お袋に刺し殺されるっ!」

襲ってきたロボットよりも、瓦礫と化した家を来月帰ってくる親にどう説明するか途方に暮れ、カタナが立ち尽くす。

「敵は殲滅しました。マスター」

それどころじゃないカタナへともう一度戦果を告げる。どうやら褒めてもらいたいらしい。

「確かまだローン残ってるって言ってたよな……」

しかし彼はその声も耳に入っていない様子で頭を抱えていた。

「家、必要なのですか?」

「あ、当たり前だろ! 第一俺、今日からどこに住めばいいんだよ!」

「そうですか、では……:q a s wで f r t g yふじ o p ; @、リワインド!」

家の残骸に手を触れながらエクゼが電子音のよな音を高速で唱えた途端、まるでビデオを逆再生するように、粉々に砕けた家が一瞬で復元された。

「うおおっ! も、元に戻った!? 家、壊れたのに」

「短時間内でしたら、私の電脳内に保存した分析データを元に、時間跳躍機能を応用したリワインド能力で時間軸の巻き戻しが可能です」

「そんなことが……す、すごいな」

「はい、私は高性能ですので。因みに制作費は一年の年間予算並です」

どうやら自慢らしい。表情の変化がほとんどないので分かりづらい。

「そ、そうか……。そういえば命を救ってもらったのに礼がまだだったな。ありがとう、助かったよ」

「いえ、主を護ることが私の使命ですので」

「主……、それなんだけど、き、君は……、確か未来から来たって言ったよな? スレイブ、ニル……? それにさっきのロボットは、何なんだ? どうして俺を襲って……?」

常識外れの展開に頭がついていかない。思い浮かぶ疑問をすべて投げかける俺に、エクゼは儂げな無表情の美貌を息が掛かるほどに寄せてきた。

「おわっ! さっき助けてくれたときもだったけど、随分と無防備に身体寄せてくるんだな。近くで見ると、ますます可愛い……」

仄かに伝わってくる体温と穏やかな息づかいに胸が高鳴った。儂げな表情に心が引き込まれる。

「いまより1024年後、太陽系星間連邦初代大統領を消滅させるため、反大統領派組織が先祖であるあなたの暗殺を目論んでいます。私はその魔の手からあなたを護るためにやってまいりました」

た」

「だ、大統領? 俺が、先祖!? 暗殺……って」
余りのことに頭が混乱する。

「これからマスターには性行為を通じて、DNAサンプルを私の中に取り込み、主従の契りを結ぶと共に、防衛ナノマシンの肉体に投与させていただきます」

「ぶっ!! せ、性行為……って」

「セックスです」

女の子相手に控えた言葉を、あっさりと口にされて面食らう。

「セ、セックスってっ!」

「男女で行う生殖行為の俗称です。具体的には、勃起しカウパー腺液にまみれて節くれ立った赤銅色の極太陰茎を、溢れる愛液でしどに濡れそぼち、ヒクヒクと脈打ちながら綻び開いた私の膈内に深々と挿入する行為です」

「いや、それくらい知ってるからっ!! っていうか、何だよそのやたらと具体的な表現はっ!」

「顔色一つ変えず、すらすらと流暢に語るエクゼに、童貞少年の方が顔を真っ赤に染めた。」

「それにしたって、俺と君が、その……セックスだなんて……、まだ出会ったばかりなのに……、そんなこと……」

こんな美少女とエッチ出来るなんて願ってもないことだけど、さすがに躊躇してしまう。

「これは任務上必要不可欠な行為ですので、強硬手段を執らせていただきます」

「そ、そういう意味じゃ……。うわあっ!」

これ以上は問答無用とばかりにエクゼはカタナ

を抱え上げると、庭から二階の彼の自室へと飛び込んだ。ベッドの上に投げ落とすと、覆い被さってくる。

「心配いりません、痛くないように優しくしますから。慣れると気持ち良くなると言いますし……」

無表情な眼差しで美貌を寄せながら、囁くように告げられると、息苦しいほどに鼓動が速まる。

「そ、それは普通、男のセリフだろ!? つていうか、本当に、するの? セ、セックス……」

「はい、恐くありませんので、安心して私にお任せ下さい」

「べ、別に、恐いわじゃっつ!」
そう言われると、経験のない童貞であることを笑われているような気がした。

（くそっ、夢にみた初セックスのチャンスだぞそれに、その相手がこんな美少女だなんてラッキーじゃないかっ!!）

実際もうペニスは痛いくらいにいきり立って高鳴る鼓動と共に行為を急かしている。覚悟を決めるが、それでもしかし生唾を何度も飲み込み、顔を真っ赤に染めて緊張するカタナの手を取り、エクゼが腕に熟れ実った美巨乳へ導いてきた。

（ああ、お、おっぱいっ! 夢にまでみた、女の子のおっぱいを揉むときがっ!!）

「んんっ!」

触れた瞬間、蕩けるような柔らかさと弾力を兼ね備えた膨らみに指先が埋まり込む。

（ああっ、や、柔らかいッ、これ! これが、女の子の……、エ、エクゼの、おっぱいの感触!!）

「は、ああ……、不思議な刺激、です。自分で、ふ、

触れても、何ともない、のに、さ、触られると……

……、ああ、痺れたようにッ、ふあ〜〜ッ!」

（か、感じてる!? この娘っ、俺に、おっぱい揉まれて……、気持ち良く、なってる!!）

無我夢中で揉むほどに、掌に収まらない房肉はしっとり汗を滲ませ柔らかさを増してきた。それとは対照的に豆粒ほどの突起が、膨らみを申し訳程度に隠している布地にポツンと浮き出す。

（これ……乳首ッ、だよな? ああ、こんな、目立つくらい勃ちちゃって……。さ、触ったら……）

好奇心に生唾で喉を鳴らしながら、指の腹で押しつぶすように捏ねる。

「んううっ!! ふあ、あ、ああっ! お、お、お、ああ……あああっ!!」

硬い感触がぐにやりと拉げ、撓な柔肉にめり込んだ。途端、エクゼの身体がガクガクと激しく打ち震えて、少年にしがみついていた。

（ああっ、乳首、結構硬いッ、充血して……あんな、感触……。そ、それより、こんな感じるんだ。刺激するどっ。本当に、敏感……なんだ……）

抱きついてくる彼女を抱き返し、その腰の細さに胸が弾む。

（細くて……可愛くて……、俺の方が、この娘、護ってやりたい……なる……。ああ、でも、この娘の方が、ずっと強くて……。俺を、護るために……）

身を起こすとカタナは胡座をかけた上にエクゼを抱き上げてグツと身体を密着させる。そうして触れ合った股間に、くちゅ、と湿った音色が響く。

「エクゼ……、こ、これ……」

「はい……、もう私の準備は調いました……。どうぞ、マスターのペニスを、ん……、私のヴァーナ、へと……、そ、挿入して下さい……。ああ……」

淡々とした口調と、擦りつけ合う股間の刺激に喘ぐ声とのギャップに妙な興奮を煽られる。

「ほ、本当に、良いんだな?」

「はい……」

うなずきながら、エクゼがショーツの布地を横にずらし、陰部を露わにした。

（ああっ、女の子の……おま○こッ!!）

愛液の糸を引いて綻んだ薄桃色の粘膜部に興奮が滾る。焦る手で、先走り滲ませたペニスを引っ張り出し、無我夢中で腰を迫り出す。

ぬず、ぬぶぶっ!!

「んくっ!! ふあっ、あ……ふッ、は……んっ!」
「先っぽ、埋まったっ。すごく熱くなってる! エクゼの、ここっ!! それに汁で、ヌルヌルにっ!」

先端が膣口へとはまり込んだだけで、甘美な刺激に猛る肉竿が打ち震えた。ヌメリ綻んだ穴口へさらに埋まるうとするが、微かな抵抗感に遮られる。

「くうっ! んううっ、あぐっ!!」

エクゼが顔を擧め引きつった呻きを上げた。けれども、いきり立った童貞少年の勢いは収まらな

い。

「ああっ!! エクゼええっ!」

何かを突き破った衝撃を亀頭の先に感じた。それでも剛直の勢いは止まらず、ズブズブと肉穴の

ぶちいっ!!

麗しき三輪の花々は
淫ら色に咲き誇る



軍属麗奴の半

淫れ散る三戦華

第1話 才媛の過去

小説
NOVEL
たかおかちから
高岡智空

挿絵
ILLUSTRATION
にしき
からすま式

「——フィオ1より各機。間もなく害虫と遭遇、戦闘に移る。援護は任せた」

「フィオ2、了解ですわ」

「フィオ3、了解」

通信機から響く涼やかな声音、それに対する応答が戦場を駆け回る。同時に一機の戦闘機が、地ではなく空を蹴り、瞬く間に敵の只中を引き裂いた。

「つつつ！ こ、こいつ、いったいどこから……」

それにこの機体のレッドカラー、戦華かつ……」

上擦った声を震わせながらもそれを撃墜せんと狙うのは、機体に搭乗した敵兵だ。十数体の機体が隊列を組み、銃器のトリガーを握り、実剣を抜く。

背面からはずんぐりとした球体を思わせる機体は、生えた機械の四肢に腕と脚を装着し、正面に生身を晒した兵装だ。その姿は壁に四肢を埋め込まれた罪人のようだが、装着した手の先で機器を操作し、重厚なボディは意のままに操ることが出来る。

百年の兵器史に残ると言われ、モデルチェンジを繰り返しながらすでに数十年、この戦闘機は各国の主力武装として配備されていた。

名を『パワーアーム』という。

「畜生つ、撃てつ、撃てえええ——つつ！」

叫んだ敵兵たち——ドリオ軍の部隊が一斉に戦闘機を狙い、銃声を響かせる。巨大な機体が手にする銃器は人の持つ何倍ものサイズだ。響く轟音は、耳を保護しなければ鼓膜をつんざくほどに大きく、それだけで対峙する敵兵を威嚇し、圧倒する。

しかし——狙われた戦闘機に搭乗する、艶やかな黒髪を靡かせる女性兵士は、表情一つ変えなかった。眉根さえ動かさず、切れ長の瞳で眼下の光景を冷静に見据え、指先のレバーで機体を巧みに操る。

「練度が足りない、それでは私に届かない」

不自由なはずの空中で、舞い散る花弁のようにヒラヒラと避け潜る。機体の背には飛行用のパーニアがつけられていた。敵兵の搭乗する陸上用機体とは、

デザインからして異なる新世代パワーアーム、通称『パワーウイング』の試作一号機は、その機動を見てボカんと口を開く敵部隊の背後に舞い降りる。そして彼らが振り返ろうとするより早く、微かに身を屈めて前傾姿勢を取った。

「パワーアームは通常、前面は開き、後面は保護されている。故に、パイロットの注意が前ばかりを警戒するのは必然——だが」

眩かれたひとり言は、先ほどの通信の声と同じく涼やかで、凛々しく引き締まっている。

「背後からであっても、パワーアームはいとも簡単に崩れる。その技術をこれから叩き込んでやる……実践という形でな」

モタモタと振り返ろうとする敵兵の群れを前に、それらと違いスリムな体型を保った機体の腰から、大型のナイフと短銃を引き抜いた。

額まわりに取りつけたヘッドバンド、そして軍服に包んだ身体が密着する背面の電磁シート。それらがパイロットの脳波や脈拍から意思を読み取り、レバー操作とともに機体の動作を補助する。

「——行くぞ」

女兵士が短く叫び、地を蹴る——刹那。

「なっ……うおっ、おあああああつ！」

脚部の継ぎ目、あるいは腰の接続部、はたまたパランスを取っていた両腕の片側を、駆け抜けるパワーウイングのナイフ一閃に断ち切れられ、駆動を失った敵機は次々と倒れてゆく。

「パワーアームは人を模したものの、故にその弱点は人に由来する。どれほど筋肉を鍛えようが、関節とその内側だけは鍛えられない……覚えておけ」

直後にガンツ、ガアンツと轟く二連発の銃声。それが何度も繰り返され、パワーアームに真っ赤な血潮と肉片が散ってゆく。

「——もつとも、活用できるのは来世になるがな」

そう告げる女性兵士の目は怒りにつり上がり、冷たい輝きで敵を見据えていた。仰向けに倒れた機体に搭乗する男は、女の冷酷な瞳を目にし、言葉を聞いて背筋を凍らせ、ゆっくりと向けられる銃口から逃れようと、懸命に足掻く。

「ひつ、や、やめつ、待て——」

震える声で慈悲を懇願するドリオの兵、けれど女兵士は容赦しない。この戦争を仕掛けた理由を考えれば、彼らの助命など百害あって一利なしだ。

「お前たちがこれまで食い物にした多くの女性……彼女らが同じことを言ったとき、お前たちはそれを聞き入れたのか？」

「ま——」

——ガアンツ、ガアンツ！

間髪入れずに引き金を引くと、機体の上に赤い大輪が散る——それが最後。周囲からは人の気配が絶え、抜け殻になったパワーアームが、物寂しげに辺りに転がっていた。念のために簡易センサーを用い、機体の腕内部に仕込んだパネルで確認するが、少なくとも周囲百メートル範囲に、敵の反応はない。

「フィオーレ公国領、国境平原を侵したドリオ部隊の殲滅を確認。任務完了、これより帰還する」

「つ……お待ちなさい、フィオ1……フィオ3が別働隊を発見。五機がそれより北方向二百を、東へ侵攻中ですわ。背後を突けるかしら？」

こちらの報告を受け、耳から頬にかけて宛てがわれる骨伝導通信機から、チームメイトの指示が届く。少し甲高く、オペラ歌手のように響き抜ける堂々とした声は、ただの会話ですら耳に心地よい。

「できる……が、その必要があるのか？」

彼女が敵を殲滅した平原、そこから北へ向かえば、敵国ドリオと自国フィオーレが皆を築いて睨みあう国境だ。国境線は北東へ伸びるため、その東側はフィオーレ公国領である。そちらには、自分と連携し

ていたチームメイトの二人が向かっていたはず。

「念には念を、ということですか。それに、あなたの手を煩わせるにせよ、そうでないにせよ——こちらにきていただければ、三人で凱旋できますもの。問題がありませんかしら、ツバキ？」

コードネームだけでなく、名前で呼ばれた女兵士——ツバキIIエンデュミアは、そこでようやくフツと表情を緩め、柔らかく瞳を閉じると首を振った。

「いや、なにも問題はない、サイネリア。すぐに向かう、リリーにも、よろしく伝えておいてくれ」

「……伝言にしなくても、聞こえてる……」

フィオ2——サイネリアIIパブリシオンに向けて伝えた言葉は、当然同じ通信を受けているフィオ3、リリーIIセルにも届いていた。話すのが苦手な彼女は、少しくぐもった、けれども鈴を転がしたような愛らしい声で、そう短く返す。

「——とのことですか。では、頼みますわよ」

通信を終えた彼女らは、例の五機の迎撃に向かったのだろう。それぞれ得意とする分野は異なるが、兵士として、そしてパワーアームパイロットとしての腕は、三人ともがフィオーレ公国一と言える。

「さて……援軍など無用だろうが、私も急ぐとしようか。遅れると、サイネリアがうるさいからな」
先の戦闘で僅かに浮かんだ額の汗を拭い、リボンで左右に纏めた長い黒髪を翻し、ツバキはパワーウイングのバーニアを稼働させるのだった。

大陸の大半を支配するドリオ王国と、大陸内でそれに次ぐ国力ながら半分にも及ばない、フィオーレ公国。二国が戦争を始めた——フィオーレが無謀な戦争を仕掛けた理由は、商業国家として肥大化したドリオの扱う、商品とは言い難い貿易品にあった。

商業国家とは名ばかりのドリオが扱うのは、モノではなく人。彼らは長らく磨いてきた技術と、様々

な分野の知識を導入して生み出した薬物を用いて、女性を性奴隷として調教し、国内で流通させ、あるいは国外へ輸出して、現在の大国を築いた。

だが、自国の女性をそうしているうちは、まだ国内の人権問題に止まる。問題になったのはドリオが他国の女性を拐かし、おぞましい調教を繰り返して、それらを元の国へ売り渡すという非道を平気で行うようになったことだ。その事実を強く批判するフィオーレは、他の小国が二の足を踏む中で唯一声を上げ、ドリオへの宣戦を布告した。

奴隷戦争と揶揄されるこの戦い、一時はフィオーレの領土が半減するほどの蹂躪を受け、このままドリオの属国となってしまうのではと、公国貴族や軍部だけではなく、民間人までが戦々恐々としていたこともある。それが彼らを元の国境まで押し返すに至ったのは、ひとえに三戦華と呼ばれる麗しき女性兵たちの活躍のおかげであった。

「——今回のように、私が単独で動くのも悪くはない。だがやはり、リリーの広範囲探知と遠距離支援があるのとないのでは、消耗が格段に違うな」

出撃から戻り、報告を済ませたツバキは、ブリリーフィングルームにてその口にする。予定されているドリオへの進攻をどのように行うか、その作戦会議の途中で、先の出撃任務が入ったのだ。もつとも会議といってもチーム内のみのものである。戦略はおろか戦術レベルの会議でもなく、三人がどのような目的で動くかの確認を、念入りに行うのである。それが彼女たち三戦華、チームフィオーの強さだった。

「それが進攻であればなおさらだろう。リリーのセンサー機能の一部でも、こちらに回してもらうことができればよいのだが……」
そう言っかけてかき上げる長い髪は、シャワーを浴びたことできしりと濡り気を帯び、滑らかな光沢を

見せつけて艶めかしく輝く。このフィオーレでは珍しい、東国の血を引く彼女ならではの美しい黒髪は、戦華と呼ばれて賞賛されるほど際立った彼女の容姿に、神秘的な付加価値を与えるものだった。

女性にしては高い身長、それにもかかわらず顔は小さく愛らしく、それ以上に妖艶で美しい。瞳も髪色と同じく漆黒に輝き、鋭さと凛々しさを、そして強さと落ち着きを感じさせ、いかにも兵士らしい気概を滲ませていた。そんな大人びた表情を見せながら、彼女の実年齢は二十に満たないというのだから、いかに彼女が己の軍務を、そして戦争というものを真剣に捉えているのが窺える。

タイトなミニスカートを着用する女性兵の軍服も、彼女の容姿からすればモデルのように似合っているのだが、兵士としての着こなしも問題ない。そこに取まった四肢も腰まわりも、日頃の訓練のおかげでしっかりと引き締まっており、巨大なパワーウイングを手足のように操る女傑にしては細身だと、多くの初対面の相手にはそう告げられる。現に、機体の操縦には筋力がそれほど必要ないため、ビルダーのように目立った筋肉がつくことはなく、彼女自身も一般男性よりは間違いなく非力だ。

しかし、そうであっても先の戦闘で見せたように、彼女の才覚は敵機を狩るには、非凡を遙かに凌駕するもの。その戦闘技術と嗅覚は、生身の戦闘であっても、歴戦の勇士に劣ることはない。彼女の母の故郷である東国に伝わる柔術、そして機体操作でも見せつけたナイフ術、銃撃にて、いかなる敵をも相手取ることができぬ。

「たしかに、ツバキの兵装はナイフと短銃のみでかなり軽装ですし、電子制御にも随分と余裕がありますわ。それがあの速さの秘訣なのですけれど、センサーの一つくらいなら負荷にならないでしょう」
そう答えるのは、同じデスクを囲むチームメイト

で、同じくファイオーレの戦華と称される、サイネリアのバランスをチェックし、長いプロントを弄びながらメモを取る。その仕事にもどこことなく品があるのは、さすが名家の令嬢だろう。

「センサーパネルは現在のものを流用して、簡易センサーとの使い分けをスイッチ一つで行うように：：：装備のスペースは問題ありませんわね。あとは電子頭脳の余裕に、プログラムが入れば……」

ツバキより少し年上らしく、普段は落ち着き払った態度と口調で、機体の整備などにも造詣が深く、これまでも多くのアドバイスをもらっている。そして戦闘においては両手に握るミドルソードで斬り込み役を引き受ける、頼りになる相棒だ。

普段は悪戯っぽく輝く、美しく大きな、サファイアのような瞳は真剣に引き締められ、タブレットと計算メモを往復している。それだけ機体まわりの知識が豊富なのは、彼女の生まれに起因していた。

サイネリアの生家、パブリシオン家は百年ほども続く商家の家系なのだが、目立って大きくなったのは数十年前——当時の当主が、パワーアームの開発を手掛け、量産と販売を成し遂げた頃からだ。

大陸の各地に売り捌かれ、開発の進められた機体のロイヤリティを背景に莫大な財を築いたパブリシオン家は、いまや大陸中に名を響かせる大商家である。そしてもちろん、その資産は新たな武器の開発にも注ぎ込まれ——噂では、ドリオの薬物開発にも多額の出資をしているとされていた。

その辺りは詳しく聞いていないが、現当主の娘であるサイネリアが実家と縁を切り、この敵対する軍に在るといふことは——。

（おそらく、噂は事実……か）

そんな背景を持ちながらも、彼女は常に堂々とし、そして華やかだ。それは人として、そして兵として

尊敬できる在り方だと、ツバキはつい熱っぽく彼女を見つめてしまう。と——。

「……もうっ、さつきからなんですの。作戦相談中に、そんな目で……夜までお待ちなさいな」

気がつくくと彼女は顔を上げ、白い肌をほんのりと桃色に染めてこちらを見つめていた。薔薇の花弁のように真っ赤な、ルージュを引いた肉厚のリップが、艶めかしく吐息をもらして咲き綻ぶ。

「たしかに、わたくしの身体は魅力的だと自負しておりますけれど……節度は大事ですわよ？」

彼女が肩を抱くように身を竦めると、胸元のボタンのいくつか外してようやく収まっている、サイネリアの豊乳がタブンと揺れた。ツバキのバストも軍服を張りつめさせるほどには大きいのだが、それでも遥かに凌駕する、まさしく魔乳——大きさだけでなく形もよく、柔らかさも相当なモノ。腕に持ち上げられるその乳丘を目にし、思わず見惚れかけたところでハッと我に返り、ツバキは叫ぶ。

「なっ——バ、バカな冗談を言うな！ 夜だろうと昼だろうと、そんなつもりはない！」

「あら、そうですの？ なんだか熱っぽく、胸ばかり凝視しているものですか、てつきり——」

「見・て・な・い！ まったくお前は——」

ムキになって叫びながら、耳が熱く火照るのを感じさせられる。こういった冗談が苦手なせい、いつも彼女にからかわれており、なんとか改善したいとは思っているのだが、動揺する自分を見てクスクスと笑っている彼女には、今後勝てる気がしなかった。

「リリーの前でそんな発言をして！ 妙なことを覚えてしまったらどうするつもりだっ！」

隣に座り、黙々とコンピュータと向き合っていた、こちらチームメイト——三戦華の一人であるリリーセルを引き合いにだし、そう説教する。だが件の彼女は、ずれた眼鏡を軽く直してから、眠そう

な半眼で興味なさそうに返した。

「……別に、いまさら……それよりセンサーのことだけど、すぐにいるならここにコピーが……」

軍の中ではかなり年若いツバキよりさらに年下、背丈もその年代の平均に届かず、線の細さが目立つ小柄な、けれど非常に美しい少女。そんな彼女が軍に所属し、しかも二人と並んで戦華と呼ばれるには、もちろんそれに相応しい活躍があるからだ。

規定の教育課程をその半分にも満たない、僅か二年で卒業し、学会では機械工学、薬学において天才と呼ばれた少女、それがリリーセルである。いくつもの研究成果を世に送り、さらに己の実験データを実戦で裏づけるべく軍に所属した彼女は、その広い視野と奇抜な発想によって、戦場を切り抜けてきた。その過程で知り合ったツバキ、サイネリアとチームを組んだのは、一年前のこと。それ以来、彼女は自身の作る新たな兵装と、機体に特化させた遠距離火力によってチームを支えている。

「……少し弄れば、いまツバキが使ってるセンサープログラムと、同じ大きさになる……それでいいなら、ちよつと待って……すぐにするから」

「まあまあまあ！ さすがリリーですわ、頼りになりますこと……ほら、ツバキも感謝なさい」

「なぜお前が偉そうに……いや、もちろん感謝しているぞ、リリー。ありがたく使わせてもらう」

キーボードをカタカタと叩きだした彼女の頭を、二人が手を伸ばして撫でくり回す。くすぐったそうに身を竦めながらも、リリーは嬉しそうに口元を緩め、作業を進める指の動きを軽やかにした。

「これで私のほうは問題ないが……サイネリアの機体にはどうだ、搭載できないか？」

「残念ですけど、ソードとマシンガンが重すぎまして……重量制御にかなり回路を削いでいますから、センサーまではカバーしきれませんわ」

「そうか……残念だが仕方ないな。私が単独で動く分、リリーのことをしつかり守ってやってくれ」

もちろんですわ、と胸を揺らした金髪美女が、眼鏡少女に抱きついて頬に口づける。作業を邪魔されムツとした表情を見せるリリーではあるが、本心では喜んでいて、ただ照れているだけだということを、いまではすぐに察することができた。

とはいえ、当初は彼女の口数が少ないことも手伝い、細かな衝突が絶えなかったものだ。

詳しく聞いてはいないが、過去に一度だけ記録された実験ミスの際、発生した薬品ガスに喉をやられ、彼女はあまり声をだせなくなっている。それを知ってから三人は、会話以上に仕草や態度で、互いへの思いやりを見せるようになった。そうした長きに渡る戦場での付き合いが言葉以上の会話となり、三人の信頼と絆を強くしてきたのだと言える。

「さて、これで私が動きやすくなり、挟撃や陽動は容易になるが……以前から言っているように、今後は砦や基地を攻める機会が増し、チームでの制圧戦が課題になるだろう。そちらの対策も必要だ」

「……あっ……それ、忘れるところだった……」
作業を止めずにその口にするリリーに、ツバキもサイネリアも反応して目を向ける。

「なんですの、なにかいい方法がありませんか？」
「……まあ、そんな感じ……ちよつとしたジャマーだけけど、パワーアームの機動を阻害する——」

そういった会話を続けていると不意に、使用予定のないはずだった、この部屋の扉が開かれる。もちろん、作戦前のブリーフィングはここで行われるが、いまはそのときではない。では誰が——。

「おお、やはりここだったか。やれやれ、探し回らずに済んだわ。三人とも、揃っているな？」

扉の向こうに立っていたのは、頭髮が薄くお腹の突きだした、いかにも中年という恰幅のいい男性だ

った。しかしその肩や四肢にはゴツゴツとした筋肉が残っており、かつては鍛え上げられた肉体を持つ戦士だったことが窺える。それもそのはず、いまでもそ外見、内面ともに丸くなった人の好い中年にしか見えないが、彼は過去に多くの大戦を経験し、フイオーレの軍部を支えてきた一流の軍人だ。

「た、大佐殿っ！ お疲れ様です！」

慌てて起立し、敬礼の仕草を取るツバキと、それに続くサイネリア。作業に没頭すると動かないリリーにもそうさせようとするが、入ってきた人物——この基地の最高司令であり、私生活においてはツバキの叔父でもある、ラデイマスミルター大佐は構わんというように、それを手で制した。

「ああ、かしこまった挨拶はいい。しかしリリーくん、その作業は中断してもらうことになる……少し困ったことになってな。すまんが三人とも、ついてきてもらえるかね」

短くそれだけを告げると、すぐにラデイマスは踵を返して基地の廊下を歩きます。

「どうしたのかしら、大佐……」

「さあな、だがお呼びなら行かねばならん。リリー、作業は中断だ。兵装のこともあとで聞く」

「……ん、了解……ロックだけしとく……」

出撃になるか、本国からの通信で無理難題を突きつけられたか——いずれにせよ、大佐が直接伝えにきたとなると、相当厄介な案件なのだろうとツバキは気を引き締め、彼のあとを追うことにした。

◇
だが——待っていたのは、そんなツバキの予想を遥かに超える一大事だった。

先の敵の行動はあくまで陽動、こちらのエースである三人を北東方面に引きつけておき、逆に基地の南西部にある市街へ、ドリオ軍は電撃作戦を展開したのである。前線に近い街だからと、最低限の労働

力以外の市民は滞在していなかったが、それでも多くの一般人が、捕虜にされてしまったようだ。

「民間人を人質にするとは……外道めっ！」

「落ち着きなさい、ツバキ。問題はそれだけではない、ドリオが突きつけた勧告のこともあるのだ」

「しかし叔父さ——いえ、大佐殿！ こちらが要求を飲んだところで、相手が引くとは思えません。どうか、出撃の許可を！」

都市を制圧した敵が送ってきた通信映像、そこで彼らの国王であるトスカータが直接告げた要求は、いかにも奴隷商国らしい下卑た内容だった。

「平和な大陸に戦争を引き起こしたフイオーレ諸君、そちらから休戦を申し出るのは心苦しかろうと思いきつかけを作ってやったぞ。降伏宣言をし、敗北の証として三輪の戦華を引き渡したまえ。そうすれば市街は解放し、市民の無事も保障してやろう」

（奴隷商国が女を差しだせと言う……その目的など考えるまでもない、誰が責様らなどにつ……）

だがそのためには、市民の安全を確保しつつ、市街を制圧する敵軍を武装解除しなければならぬ。電撃作戦の都合上、相手の数もさほど多くないとはいえ、人質の存在が行動を困難にしていた。

「無論、君らを渡すことなど考えてはいない。そして市民の命も最優先だ……いまは動ける人材で作戦部隊を編成している。明日には動け——」

「……それじゃ、遅い……」

落ち着いた大佐の声を止まらせたのは、リリーのか細い声だった。けれどその声音ははつきりとし、確固たる意志と明瞭な考えを滲ませている。

「……相手が攻めてこないと思っっている、今日中に動かなければ意味はない……だから、わたしたちがすぐに動けば……奇襲になる」

「リリー……そうだな、それが最善だろう」
迷っている時間も惜しい、ともかく動かねばと、

地でも、援軍を差し向けるより早く早く作戦を終えた、そのささやかな慰労会が、翌日に開かれていた。

「ふう……明日が休暇とはいえ、少しハメを外しすぎたか……警戒は怠れないというのに」

あまり酒は嗜まないほうだが、珍しく口当たりのよいワインがあったせいで、思いのほか杯が進んでしまった。コレクシオンから提供したという叔父の言葉に、基地に酒類を置いておくなど——と苦言を呈したものの、赤らんだ頬を見せていては、注意にも説得力がなくなるというものだ。

「まあ、ともかく今日はゆつくり眠るとするか」

フワフワと足取りが軽いのは、作戦成功と市民の無事を確認したことだけが原因ではない。そしてそれは、隣を歩くチームメイトも同様。白い肌を朱に染め、軽くカールされた髪を整えながら、サイネリアもフラフラと廊下を歩いている。

「ですわねえ、昨日の連続出撃は堪えましたもの。今日は後処理に追われましたし……せつかくいたいた休暇、有効に活用させていただきますしよ」

「……二人とも、顔真っ赤……」

一人だけ、年齢の制限から飲酒できなかったリリイが恨みがましくそう呟くのを見て聞きながら、三人は並んだ私室へと戻ってきた。と——。

「……ん、これは……?」

「あら、どうかなさいましたの、リリイ?」

そんな二人の言葉に反応し、ツバキも一部屋隣の隣にある、リリイの部屋のほうを見つめる。しかし勘違いだったのか、リリイはなんでもないと手を振って、そのまま部屋へ戻っていった。

◇

そうして、チームファイオの三人がそれぞれの部屋に戻った、その一時間後のこと——。

「すまなかったね、リリイくん。君も疲れているところを、しかもこんな深夜に」

「……いえ、急務ということでしたので……」

ツバキとサイネリアが、部屋でぐつぐつと寝かしているそのとき。リリイは一人、部屋の入口に挟まれていた手紙に呼びだされ、ラディマス大佐の執務室でもある、国境北西基地の司令室に来ていた。

「あの二人は随分と飲んでいたのでな、酔っていないかった君にご足労願ったわけだが……まあどちらにせよ、これは君への内密の頼みなのだ」

「……お伺いします」

口数が少なく、失礼に当たるとリリイは顔を伏せ気味にし、上目遣いに大佐の様子を窺い見る。けれど彼は気にするどころか、まるで孫か末娘を見つめるように優しい視線で、ニコニコとしていた。

「まあまあ、そう固くならんでくれ。そうだな、茶でも淹れよう……愉快な話ではないが、説明の段階で張りつめていても仕方なからう」

「……お、お構いなく、本当に……」

リリイが止めるにもかかわらず、ラディマスが張りだした腹を揺すりながら立ち上がり、茶を淹れる。しかし、その甘く芳醇な香りが部屋に広まるや、疲労や緊張に強張っていた心が、非常に落ち着いてきたことに、リリイは少し驚いて目を見開いた。

「……いい、香り……すごく好きだ、これ……」

「ははは、驚いたかね。最近では酒ばかりでも身体によくないと、ハーブティーにも凝っていてね。さ、冷めんうちに味わってくれたまえ」

上品な、かつ高級そうなカップに淹れられたお茶から、甘い香りが立ち上る。スノツと鼻をヒクつかせ、そのはしたない行動を恥じ入るように頬を染めるも、リリイは我慢できず茶器に口をつけた。

「つつ……美味しい、です……すごく……」

わざと飲みやすいよう、カップを温めていなかったらしく、適温に冷まされたほんのりと甘いお茶の味が舌に広がる。飲み下すと、トロリと粘り気のある

ような、柔らかな感触が喉を伝う。撫でられた粘膜はスウツと爽やかな感覚を残して冷え、感覚が研ぎ澄まされてゆくようだ。言うなれば、甘い香りのするミントティーのようなものか。

「……さつき、お酒も飲めなかつたし……その代わり、だから……うん、ちよつとくらい……」

クセになる甘味と喉越しに、すぐ飲み干したリリイは凶々しくも、おかわりまで要求してしまふ。

「ああ、構わんども。さて……落ち着いたようなので、そろそろ本題に入らせてもらおうかな」

茶を注ぎ、座り直した大佐が口を開く。

「君たちも気づいているようだが……我が軍の情報の一部が、ドリオに流れている。つまりこの基地を出入りする者に、スパイがいるということだ」

「……はい、もちろん……ズズ……」

夢中になつてお茶を啜りつつ、しつかりと話を聞いて生返事にならないよう、そう答える。

「……不思議な味……いくら飲んでも、飽きるところか……ますます飲みたく、なる……」

すぐさま飲み終えると、今度は大佐の手を煩わせまいと、自分でポットを手にお茶を注ぎ足した。

「昨日よりさまざま、各方面に遣いをやつてね……軍本部か、士官学校の生徒あるいは教官に、それらしい者が混じっていると、報告があった」

「……なるほど、さすがです……ズツ……」

甘く温かいお茶、それが胃臓に流れ込むたびに、リラクセスしすぎてしまっているのか、溜まった疲労と相まって眠気が込み上げる。普段から眠そうな瞳がさらに閉じかけ、視界が歪んで思考が霞んだ。「それでだ、その捜査を……リリイくん……リリイくん? 聞こえているかね?」

「……ん……危ない、寝るとこ……でも、大丈夫……」

……そう、眠気覚ましに、もう一杯だけ……司令の言葉が遠くから頭に響いている、そんなこ

とを思いつつ、頭がフラフラして座っていられなくなる。けれどお茶を飲む手は止まらない。

「はい、ズブ……ええ、ズツ……ズズウ……」

このくらいでやめておこう、そう思うのだが、お茶がなくなると唇が寂しく、つい注いでしまう。味と、そして喉を伝う独特の感触を少しでも長く感じたくて、溺れるようにお茶を吸り続けていた。

(……ああ、やつぱり美味し……あれ、わたし……なにしに、来て……そうだ、話を……でも……)

聞こえる言葉に耳を傾けようとしながらも、口つけたカップの香りに誘われ、平を舐め取るようにしたなく舌まで伸ばしてしまう。

「ズジュッ、ジュルル……んぐっ、こくっ……はあッ、はあッ、んっ、ちゅ……ズズウ……」

「ははは、随分と気に入ったようだな。しかしこちらの話も、無視しないでくれたまえよ？」

冗談めかしながらそう笑う大佐の声に、ハッと目が覚めたように意識が晴れる。うたた寝していて不意に目が覚めたような、いまは意識がはつきりしているけれど、すぐに眠気が襲ってくる——そんな感覚に捕らわれながら、ボンヤリとした眼鏡の向こう側、椅子に腰かける笑顔の上司を見つめる。

(いけ、ない……集中、しな……きゃ……)

「……頭合いか……さて、リリイくん？」

不意に低くなった大佐の声に、頭の奥で警鐘が響いているような錯覚を覚え、返事を躊躇う。けれどその考えは、カップから漂う香りに包まれて有耶無耶になり、トロンと眠そうに蕩かした瞳を声のほうに向け、リリイは口を開いた。

「……は、い……なん、でしょうか……」

「ふむ、そうだな……では、いま頼んだ任務のことだ。年若い容姿を活かし、士官学校への潜入捜査をお願いしたわけだが……目的は特定ではない」

「……とく、てい……では、ない……」

強く口にされた言葉を繰り返すリリイは、いつしかカップを離して茶にも口をつけず、半分眠ったような状態で話を続ける。

「スパイの一人は目星がついている。君は仲間の振りをして彼に接し、他の仲間の有無など、情報を引きだしてもらいたい。そのためには、彼らの望む姿を——つまりは、ドリオで扱われる商品を演じてもらいたいのだ。意味はわかるかね？」

「……どりお……しよう、ひん……はい……」

思考は働かないのだが、その単語と結びつく記憶が脳裏をよぎる。薬で、そしていやらしい技術で牝奴隷にされ、各国へ売り捌かれる女性の姿だ。

(……で、も……それは、わたしたちが……)

それは、自分たちが助けようとしている被害者たちだ。同じ姿を憎むべき相手に、演技とはいえない自らの意思で晒す、そんなことをしてよいのか。

「……たい、さ……それは、やはり——」

「——もう一杯いかがかね、注いであげよう」

「……は、う……あ、りが、と……ござ……」

漂うのは淹れたてのお茶の、甘い香り。目の前に突きだされると、拒みようもなくカップを手にし、口に運んでしまう。飲めば飲むほどお茶が頭に流れ込んででもいるのか、思考が重たくなり、茶色く濁っていった。

「繰り返しになるが、ドリオの商品を演じてもらいたい。これはやむを得ないこと、軍務なのだ……君がやらなければ、他の誰かがやることになる」

「……っ、それ、は……だ、だめ、です……」

濁った思考でも、他の誰かと聞いて思い浮かんだのはやはり、チームの二人のことだ。正義感の強い彼女たちは、自分以上に敵国を憎んでいる。そんな二人にさせるくらいなら、自分がするべきだ。

(……そ、う……わたしは、二人に言っていない……わたしの、責任を……果たさないと……)

ドリオが性奴隷に投与している薬、それが精製された原因は自分にあるのだから。

「はっ、ふっ……んっ、んあ……」

忘れようとしても忘れられない、唇に刻まれた事故の形跡が、そして女性らが奴隷となった姿の想像が、リリイの幼い身体を疼かせ、震わせる。

過去に一度だけ起こしてしまった実験ミス、そのとき浴びた薬物ガスは、彼女の喉や唇を弱らせたのではない。彼女の唇と口腔、喉や鼻腔に絡みつき、染み込んで——その部分を世にも淫らな性感帯へと作り変えてしまったのだ。

飲食や会話、果ては呼吸による空気の感触でさえ、秘部を優しく撫でられているような感覚が走り、触れなくても淫唇が濡れてしまうのが、その日以来リリイの日常となっていた。自身の身体の変化に戸惑う彼女は、その実験結果を非常に恐れ、極秘事項として自分だけが閲覧できる媒体に保存し、誰にも気づかれないよう封印を施しておいた。

だが、その結果は信頼していた一人の助手にままと盗みだされ、それは現在、ドリオの性奴隷調教に活用されていると聞く。多くの娼業、そして被害者を生んだ責任を取るべく、リリイは軍への異動を志願し、ツバキたちとチームを組んだのである。

「んくっ……うっ、あうっ……はあ……」

軍務の最中は見せることもないが、感度の上がつた唇はなにもせずとも身体の奥にじわじわと淫熱を広げ、リリイは常に発情した状態を強制されている。真面目な性格でそれを押し止めてはいるが、どうしても我慢できない夜は、自らの手でひたすら淫部を弄り、唇を舐め、シーツにおもらしのような染みを広げるほどの自慰を行うことも少なくない。

(……だ、めえっ……いまは、だめっ……)

意識してしまうとさらに唇が熱く火照り、ジンジンと疼いてくる。懸命に抑え込もうとすると、擦れ

ないように唇が開き、自然と舌が伸びてしまった。

「なあリイくん、これは君のためなのだよ」

それを渴きのサインと受け取ったのか、新たに茶が注がれてしまう。やむなく口をつけるが、やはりその美味には抗えず、感度の上がった唇をグチョグチョに湿らせながら、お茶を飲み干してゆく。

「薬の原因のことは、ワシのほうでも調べはついている。心のしがらみを解消する、いい機会だと思わんかね？ 実に得難いチャンスなのだよ……」

「——っ！ そ、う、なんだ……だから、大佐も……わたしの、ために……わたしを、指名……」

自分の過去を知られていたことは、驚くほどのことではない。軍に入る際に、経歴を洗われるのは当然のことだからだ。なによりリイが驚いたのは、彼が自分の考えを読み取ったかのようにそう告げ、そのために機会を用意してくれたということ。

しかもそのことを、チームメイトの二人に伏せてくれたということも、非常にありがたかった。そんな上司の氣遣いに応え、自分の思惑も果たせる——その想いから、リイはコクリと頷いて答える。

「……あ、う……ふ、そ……う、です……ね……」

「おお！ ならば、なつてくれるのだね？ ドリオの商品に……薬に侵された、性奴隷に……」

僅かに声が気色ばんだが、あくまで抑えられた理性的な声でそうささやかれる。耳に漕り込む声に、頭に浮かぶ性奴隷の想像が、さらに激しくなる。

（んはうっつ！ あっ、んっ……だ、めえ……）

そう思えば思うほど、身体への反応はいまだかつて経験したことないほどに昂り、盛り上がりを見せる軍服のミニスカートの奥では、幼い無毛の秘唇からジュワァ……とはした蜜をこぼし、腔肉を充血させて蕩けさせ、太ももを擦り合わせていた。

「はあ……い、な……なり、ま……すう……」

込み上げる悦楽と思考の弛緩が、蕩けきった声で

そう返事させる。

「ドリオの商品になるためには、奴隷の技術を磨かねばならん……これから行うのは、その訓練だ。なにもおかしいことはない……ワシの言うこと、命令には逆らってはならんぞ？」

（……ふあ、そ……う、か……くんれん、しないと……っ……本当に、いいの……？ くっ……）

身体への反応、大佐の仕草と言葉、そして思考力の欠如、すべてが異常なはずだった。けれどそのことが引つかかると、いつしか部屋中に広がっていたお茶の香りに思考を奪われ、身体が再び弛緩してゆく。「わかったなら、仰せのままにと答えなさい」

「……は、い……ドリオの、商品になる、訓練を開始します……大佐の、仰せのままに……」

なにかを考えるよりも、命じられる言葉に従ったほうが楽で、遥かに心地よかった。言われるままに言葉を繰り返すと、身体を熱く疼かせる感覚が尻房を這い、尾てい骨を撫で、背筋を震わせながら這い上がってくるのを感じる。

「よしよし、いい子だねえ、リイくん……ならばさつそく、ワシを相手に訓練してもらおうかな」

軍服のネクタイを緩め、大きく足を開いたズボンの股間を開き、大佐は自らの欲望を解放させる。

「おお、いかんいかん……こんな若いコを相手にするなど、想像しただけで滾ってしまうわい」

「——っつ!! はふうっ……んっ、すご……」

ソファに腰かけたまま、それを目にしたリイは動悸が治まらなかつた。これまで、幾度ももの自慰で妄想し、様々なメディアから映像データを入力し、確認していたものの、やはり実物はまるで違う。

（こ、これ……これが、大佐の……んくっ、ほ、本物の……お、お、ん、ん……ペニス……）

「ほれ、いつまで座っておる。早くこっちに來なさい、脚の間に跪いて……むふふふ、まずは奴隷の挨拶から教えてやろうなあ」

なぜ大佐がそんなことを教えられるのか——ふと湧いた疑問が脳裏を掠めるが、軽く呼吸をするとすぐさま考えは吹き飛び、元の濁った思考だけが戻ってくる。ゆつたりと、夢遊病のような仕草でソファから立つと、大佐の脚の間に身を屈め、しなだれかかるように股間に顔を近づけてしまう。

「まずは臭いをたつぷりと嗅ぎなさい……鼻を鳴らして、ヒクつかせてな……それが自分の主人である」と、鼻と唇と脳裏に染み込ませるわけだ……

「……んっ、ふあ、ひい……んすう……」

目にした長大な肉塊、赤黒く濁つてあちこちに恥垢の滓をこびりつかせ、卑猥な臭いをこれでもかと撒き散らす存在に、一瞬だけ眉根がひそめられ、鼻腔と唇が嫌悪に歪んだ。けれど、その後身を包み込んだのは、身体中の発情がその目の前の汚塊を求め、心の底から湧き立つ欲情の炎だった。

（んぐうっ……こ、こなら、くさいのお……く、臭い、の……はあ、あ……）

お茶を求めてそうなつていたように、唇が開いて舌が突き伸び、たつぷりと乗っていた唾液が粘つく糸を引いて、ダラツツと床に垂れ落ちる。それを眺めながら、大佐は嬉しそうに頬を緩めた。

「ふふ、軍の女は堅苦しく、ちよつといやらしい目で見るとすぐに騒ぎおるが、リイくんは従順で立派だのう。日頃は助平心を抑えるのも一苦労だが……今日は存分に、愉しませてもらうとしようか」

もはや隠そうともしない、色欲に染まったいやらしい笑みを顔に張りつけたまま、ラデイマスは武骨な指で少女の頬を撫で、そして頭を撫でる。

「挨拶の基本は、相手を主人と思うことだぞ。そのチポの世話ができることを、心から感謝し、口にするのだ……さ、やってみなさい」



「んすうう……はああ、すうつ、すうう……はあ、はあ……た、大佐のお……ご、ごしゅ、じ……ご主人様、の……お、オ……ン、ポ……お世話、させていだだきます……ふあつ、ああ……」

頬を桃色に染め、暗示状態に陥つて色を失つていた瞳が潤み、年齢にそぐわぬほど淫猥な色香を漂わせる。鼻はヒクンツとわななき、細く愛らしい唇は、汚れきつた肉棒の先端へいまにも口づげんばかりに、いやらしく突き伸ばされて震えていた。

「あふうう……しゅ、ごお、い……に、臭い……うん、匂い……さつきまで、あんなに、臭かつたのに……お、お茶の匂い……してきた……」

部屋中に充滿するお茶の香りに包まれ、獣じみた生臭さを放つていた肉塊は、いつの間にか甘い香りを漂わせている。鼻を鳴らしてそれを吸い上げると、頭の中はますます燃え蕩け、灼け爛れてゆく。

「うむ、よい挨拶だ……おや？ どうしたリリイくん、そんなにやらしい顔をして。それほどに堪え性が無いとは……もしかしてこれまでも、耐えかねて自分を慰めたことがあるのかな？」

「はうつ、んつ……そ、れは、はあん……」

オナニー経験を告白せよ、そう命じられて、心の奥に引つかかる理性が、拒絶の意思を生みだそうとする。だが日頃から内に蓄えられ、葉によって肥大させられた牝欲が、拒絶ではなく強い牡への恭順の感情を引き起こしてしまう。

汗と入り混じる濃厚な牡臭を鼻先に突きつけられ、唾液を滴のようにこぼしたりリイは、空気に擦れるだけで感じる唇を、ゆつくりと開いた。

「……は、はひ……はい、し、してます、いつも……唇が、ひ、ひびれ……痺れ、て……身体が、火照つてしまうと……週に、二回、くらい……」

普段は澄ました態度で口数も少なく、表情もほとんど変えない少女の顔が、自慰告白の羞恥にカアア

ツと赤く染め上げられる。しかしそれで自己嫌悪を感じることもなく、それどころかスカート奥がますます熱く疼き、清潔なショーツに、淫裂の割れ目に沿った染みがジワリと広がっていた。

「ほおお！ それはたしかに大変だ……どうしても我慢できないものなのかね？」

相好を崩した中年男の指先が、半開きの唇を撫でる。くすぐつたさと、その何倍もの痺れた感覚が口元を伝い、まるで口腔が膣にでもなつたように、甘い快感が喉を突き抜け、脳天に響いた。

「んきゅうう……あつ、ひつ……どうしようも、ないんれす……くびる、トロトロで……こ、股間ま切れ……キユウウツて、せ、切なくてえ……」

触れられた快感を呼び水に、いつも我慢しきれず自慰してしまうときの感覚が甦る。そのときは、舌で唇を舐めながら、秘唇を優しく撫で、ショーツの上からやがては直接、というように段階を踏んで大切な部分を刺激していく。

けれどいまは違う。舌を伸ばし、親子ほども年の離れた男の武骨な指を舐め、それだけで淫核を刺激しているのと変わらない、強烈な快感を唇に、そして口の中いっぱい広げ、味わっていた。

「んりゅううう……はみゆつ、あむつ、んじゅう……んくうつ！ あふつ、ふあ……」

快感を求めるように指に唾えつこうとしたが、それを止めるように彼の指が舌を摘み、歯を押し上げてあごを開かせる。だが解放されるわけでは、もちろんない。舌を引かれて体勢を崩しながら前のめりになる、そこには指の代わりに唇に唾え込むためのモノが、相も変わらずそそり立っていた。

「ははは、そうか……ならば仕方ないな。どうしてもしたくなつたなら、奉仕をしながら、自分で弄ることを許可するぞ。ただし……」

「——んはつ、はあつ……きよ、許可……いいんだ、

自分で、しても……う、嬉しい、優しい……」

大佐の優しい言葉と指遣いに胸がキュンツと打ち震え、下着にこぼれる愛液がさらに大きく染みを広げた。その感覚に頬を染めるリイを見下ろしながら、ラディマスは言い含めるように告げる。

「下リオの性奴隷は薬で暗示をかけられ、身体の感度を磨かれ、自らの意思でそれを求めるようにされるそうだ……君が受けたガスと同じ、重ねて摂取すると効果の上がる、少し中毒性を持つ薬をね」

「そういえば——と震んだ頭が僅かに動く。確かにあのガスには、そういう成分が多く含まれていた。」

「そして深い暗示にかかれば、相手の言葉をおかしいとも思えなくなる。万が一にも、行為に夢中になつて気がつかぬうちに薬を盛られたりせぬよう、十分気をつけるのだぞ？」

「……は、い……気を、つけます……んちゅ」

舌をくねらせて指をしゃぶり、蕩けた瞳でそう答える。その言葉といまの状態に、なにか関係があるのかもしれないが、ともかくいまは、訓練に集中しなければならぬ。

（そ……ふ……考え、るのは……また……）

「そう思いながら、考えを端に追いやつて次の訓練課題を待つ。と——」

「よしよし、ではそろそろ、奉仕訓練に入ろうか。先端にキスで挨拶し、丁寧にしゃぶらなさい」

「んくつ……ふあ、ひ……仰せの、ままた……」

膝立ちで床に座ると、タイトミニスカートの軍服は簡単にずり上がり、曝けだされた股間が空気に触れた。ゾクンツと下腹部がわななき、敏感な部分に手を伸ばすと——ショーツにたつぷりと含まれたいやらしい水分がクチュクチュと音立てて、搾られるように指に湿り気を伝える。

「ふああ……ひ、ひふれい、ひまふう……んちゅつ、ちゅば……つつ、んくつ、くふうううつつ！」



Lust Resort!!

ラストリゾート タークフォース

MISS BLACK



...神よ

お赦しを...

うああ

ガクン!

ああ

ああ

キッ

えっ...

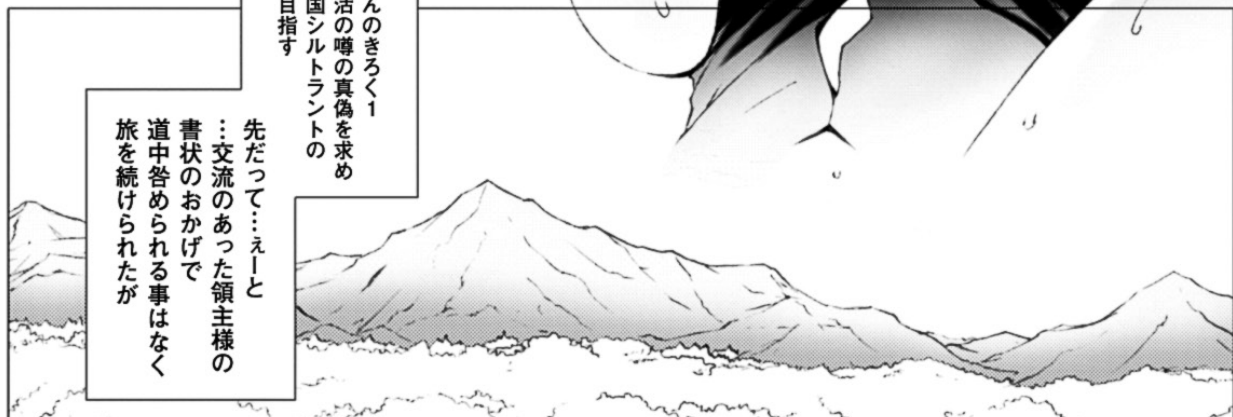


当て馬にされる
っていうのもクライイじゃ
ないんだけどね…

うん

ぼうけんのきろく1
魔王復活の噂の真偽を求め
北の王国シルトラントの
王都を目指す

先だつて…えーと
…交流のあつた領主様の
書状のおかげで
道中咎められる事はなく
旅を続けられたが



途中の山と森を越える際
天候に恵まれず
道に迷つてしまい
水と食料が心許なく
なつてしまった



備蓄が尽きる前に
どこかの町か村に
辿り着ければ—

シエリオ・シェーラ
ゆうしゃ おとこ
Lv26
じょうたい：
しゃせい(7かいめ)

いいかげんに
しなさいっ！

ペルフェ・ベル・ペオル
まほうつかい おんな
Lv99
じょうたい：たいくつ

い……う……う……

ひいひいひい
今そこでしゃべら
ないでええっ

毎日毎日何度も何度も
どれだけし……したら
気が済むんですかっ！

ん……
う……え……

ミランダ・ミンリイ
モンク おんな
Lv26
じょうたい：
オナきん(10にちめ)

く口に物を入れたまま
しゃべらない！

ぶああい



お尻出さない!

国境の町から二日
山越えに四日
森で迷って三日
今日だってなァんにも
なしよお?

だアッてエ
タイクツなんだモン

んなっ

宿で寝たの
十日も……

ガラ

ガラ



あんそっかー
ミランダちゃん十日も
オナニーしてないんだあ

んひえっ!?

んふふ言ってくれば
おクチでも手でも
好きなだけ
シてあげるのにい

ぼっ
そぞぞなごじっ



そんな…



こ…こ…

脳内で
お楽しみのところ
失礼します

ひゃあ!?

スターチス
メイド メスがた
Lv99
じょうたい：
ぼうえんモード

小説 漫画
企画 連動!

魔物に寄生された女魔術師は、
快樂地獄へと墮とされる!

魔術師 リーゼロッテの 受難

小説 NOVEL うえだ 上田ながの
挿絵 ILLUSTRATION とうせん 冬扇



リーゼロッテはリファイラスが弟子であるコール・サイラスと共に古代遺跡「リオンポリス」に赴いたのは、魔術師協会から遺跡の調査を命じられた為である。

現在より五〇〇年以上前、栄華を誇ったリオンポリス。高度な文明を誇り、かつては大陸全土を掌握していた巨大都市だ。だが、その栄華は長くは続かなかった。

「ある時古代都市の人々は急に狂乱し、都市の住民同士で血みどろの殺し合いを行い——遂には自壊してしまった……。詳しい記録は残っていないので、人々が何故おかしくなってしまったのかという原因は不明……。一体何があつたんでしょうね？」

崩壊したリオンポリス——かつては大陸でも最大の都市だったはずなのに、現在は朽ち果てた神殿のような遺跡が僅かに残っている程度である。

そんな廢墟を見つめながら、コールがクリクリとした瞳をキラキラ輝かせつつリーゼロッテを見つめてきた。

リオンポリスが何故滅びたのか？ 一体この地で何が起きたのか？ それが気になって仕方がないらしい。

「リーゼロッテ様はどう思われますか？ リオンポリスに起きた災厄とはどのような出来事だと思います？」

「……私達はそれを調査しに来たんです。何が起きたのか……私を知るはずもありません」

左右おさげに結った黒髪と、大きく

胸元が開いた魔術服の間から覗き見える掌には収まりきりそうにないほどの乳房を揺らしながら、リーゼロッテは切れ長の碧い瞳を閉じると首を左右に振り、弟子に冷たい言葉を返す。

正直リオンポリスが何故滅びたのか？ なんてことに興味はない。ここに来たのはあくまでも仕事だからだ。「それはそうですね。よし！ それじゃあ頑張つて調査しましょう！」

が、コールは冷たくされても落ち込んだ様子を見せはしない。それどころかニコニコ笑顔を浮かべながら、はしやぐ子供みたいに遺跡へと一人走つていった。

（本当に元気ですね。あの体力どこから来ているのでしょうか？）

弟子の後ろ姿を見つめながらはあつとリーゼロッテは肩を落とす。

「何やつてるんですかりーゼロッテ様！ ほら、早く来て下さいよお！」

そんなリーゼロッテに向かって、コールは無邪気にブンブンと手を振つてきた。

「……はいはい」

フウツとため息をつきながら、僅かではあるけれど歩行速度を上げる。

（はあ……私も丸くなったものですねというより……何故かコールには逆らえません。弟子なんかいらな思つていたのに……）

*

一年前——

「弟子……ですか？」

魔術師協会の研究室にて論文を仕上げている最中、室内に二人の魔術師が入ってきた。

一人はロイド・パーキン——魔術師協会東方支部会長である。魔術師としての才ははつきり言つてほとんどない人物だ。研究などの実績もない。けれども権力者に取り入ることが上手く、金と人脈のみで現在の地位を手に入れた。はつきり言つて軽蔑に値する存在である。その上、ロイドは自分に対してイヤらしい視線を向けてきたりもしていた。胸元や首元を舐め回すように見つめてくる。正直顔を見るだけでもおぞましい。噂話だが、ロイドは自身の地位を利用して多数の愛人を困つて

いるという話も聞いたことがある。中には無理矢理金の力で親を買収し、自分のものにした女性もいるようだ。まさに唾棄すべき人間だ。

そんなロイドが連れてきたもう一人の人物はこの親父とは対照的な、まだあどけなさの残る少年だった。年齢は自分と同じくらいだろうか？

「そう……弟子だよ。リーゼロッテ君も協会所属の魔術師となつて十年年若いとはいえ、そろそろ弟子を育ててもいい頃だ」

「それは……」

正直言うと大迷惑だった。

確かに魔術師協会に所属して十年が過ぎていた。普通であれば弟子の一人や二人がいってもおかしくない時期だ。というよりも、普通は協会に所属して

五年も過ぎれば弟子を取らなければならない決まりになっている。しかし、リーゼロッテにはこれまで一人も弟子はいなかった。

何故ならば、協会に所属して十年とはいふけれど、年齢でいえばリーゼロッテは協会所属のどんな魔術師よりも若かつたから。

何しろ協会に所属した時リーゼロッテはまだ十歳にもなつていなかったのだから……

この若さのお陰で、いままで弟子取りは免除されてきていた。お陰で一人の自由気ままな生活を送っていたというのに……

「……嫌です」

誰かと一緒に行動するなどごめんだった。

結局他人なんて自分の脚を引っ張る存在でしかないからだ。他人の面倒を見たところで自分にとってプラスになることなど何もない。

だからこれまで他の魔術師との共同研究なども行つては来ていなかった。自分以上に信頼できる人間などこの世には存在していないのだから……

「残念だが拒否権はない。これは協会からの命令だ。協会に所属している以上、これは受けてもらうぞ」

語りながらロイドはリーゼロッテの胸を見つめてくる。ペロツと唇を舐める仕草に怖気が走つた。

こんな奴の命令など死んでも聞きたくはない——とは思うのだけれど、協

会からの命令と言われてしまえば引き受けざるを得なかった。

好きな研究をすることができるとも、協会の後ろ盾があるからである。

もし魔術師協会に所属していなければ、いかに百年に一度の天才と呼ばれるリーゼロッテでも明日の生活に困ってしまふこと請け合いだ。それくらい魔術研究には金がかかる。

「……分かります……ました……」

「分かってくれたか。では頼むぞ」

ロイドは好色そうな視線をこちらの肢体に向けつつ、少年を残して部屋を出ていった。

「……………」

少年と二人きり——この状況は流石に気まずい。正直何を話せばいいのかさっぱり分からなかった。

「コール・サイラスといます！僕はリーゼロッテ様に憧れて魔術師になろうと決めました。だから……だから本当に嬉しいです。リーゼロッテ様の弟子になることができ、僕は本当に光栄です！」

「……………」

自己紹介に対してもなんと答えればよいのか迷ってしまう。

自分以外の他人なんてどうでもいい存在ではない。他人との付き合いがいかしたくはない——そう思っていてきたのだから無理もなかった。

（無視しよう）

だから結局そう心の中で決断を下した。憧れられたってこれっぽっちも嬉

しくない。ただ邪魔なだけだ。だから徹底的に無視しよう。こいつが憧れなんか捨て去って、もうついていけない。弟子なんかやってられないと出ていくくらいに……。

「よろしくお願ひします！」

ニコニコ笑顔のサイラスと、人形のように無表情のリーゼロッテ。

それが二人の出会いだった。

*

調査開始から三日目。

「ふう……。取り敢えず今日のところはこれくらいにしておきましょうか」

「あ……は、はい」

日も落ちてきたので本日の調査活動を終了する旨を伝えると、コールはどこか冴えない様子で頷いてきた。

「……………」

そんな弟子の様子に小首を傾げる。出会ってから一年——最初リーゼ

ッテは自分で決めた通り、この弟子のことをひたすら無視し続けた。そうすればいつか自分の前から消えてくれるだろうと思つて……。

しかし、彼はそれでも決して腐つたりはしなかった。それどころか常に一生懸命リーゼロッテの跡を追い、遂には「あ、ここはこうした方がいいと思いますよ」などと口を挟んでくるほどになつていった。

いや、それだけじゃない。研究以外にも彼はいつも積極的にリーゼロッテに話しかけてきた。今日何をしたらどうか、昨日はこんなことがあったとか。

そんな日常を過ごしている内に、リーゼロッテは自分が子供だったことを悟つた。

コールは頑張っているのに、自分はそんな彼から逃げている——あまりに恥ずかしくて、情けない。

以来、リーゼロッテはコールと会話を交わすようになった。自分の知識を彼に教えるようになった。会話馴れしていないので、凄くぎこちない言葉遣いだったけれど……。

それでも、彼との会話をいつしか純粋に楽しめるようになっていた。

そのように頑固だった自分を変えてしまふくらい普段元気な彼とは思えないくらいに見える。いや、何もこれは今日に限つたことじゃない。調査開始以来、彼はずつとこんな調子だった。

お陰で調査の進捗状況はあまり芳しいものではない。一体何があつたのだろうか？

「彼……どうかしたんですか？」
現地にて雇つた調査員達もリーゼ

ッテと同じような疑問を抱いたらしく、小首を傾げながら尋ねてくる。

「……さあ、私にも分かりかねます。ですが、このままだとちよつと調査にも支障が出かねませんので、私の方から聞いてみますね」

「分かりました。それよりリーゼロッテ様。今夜のお食事は何がいいですか？リーゼロッテ様の為だったらどんなリクエエストにだつて応えてみせま

すよ」

キザッたらしい微笑みを調査員の一人——確か名前は「アスハス」が向けてくる。初日から妙になれなれしい調査員で、正直苦手なタイプだった。少し前の自分であれば完全に無視しているところである。

とはいえ、リーゼロッテもコールと一年付き合ってきたことでだいぶん人間関係に関して丸くなつており、
「……ありがとうございます。楽しみにしていますね」

一応表面上だけは笑つてみせる。

「……………」
すると何故かコールの表情がより暗くなつていった。

（どうしたのですかコール？）

本当に何を考えているのだろうか？辛そうなコールの姿——あまり見ていたくはない。何故かズキッと胸が痛くなるのを感じた。

「ちよつといいですか？」

だからその晩、キャンプにて夕食を食べ終えた後、しきりに「少しお話しませんか？」となれなれしく話しかけてくるアスハスを無視して、リーゼロッテはコールに声をかけた。

「僕にですか？でも、アスハスさんはいいのですか？」

「構いません」

「……分かりました」
取り敢えず誰にも邪魔されないうようにコールを引つ張つてキャンプから出ると、近くの泉に向かった。

「で、何があったのですか？ ここに来てからというものの、コールの様子……どこがおかしいですよ」

そこで最近コールが冴えないのは何故なのかと理由を問う。

すると弟子は「そんなことありませんよ」と否定してきたが、簡単にハイそうですかと受け入れられるものではなかった。

「嘘を吐いても無駄です。私はコールと一年付き合ってきているんですよ。貴方の言葉の真贋くらい分かります」

「……」

「私では頼りになりませんか？」

重ねて尋ねる。尋ねつつ、リーゼロッテは自分自身に驚いていた。

かつては魔術の研究にしか興味なかったのに、何故かいまはそれ以上にコールのことが気になってしまっている気がした。

この一年。師は自分であるはずなのに、コールから教えられたことは多い人は一人だけで生きていくのではないということ、彼との出会いで知った気がする。

「あ、リーゼロッテ様笑いましたね」

「へ？ 笑う？ 私が？ そ、そのようなことありませんよ」

「な〜んて取り繕っても無駄です。ばかり僕らの網膜に記憶しましたから」

ものでしたから♪」

「か……可愛いって……」

なんていう何気ない会話を交わすことの楽しみや喜びを教えてくれたのも彼だ。

だからこそ、コールには暗い顔をして欲しくない。いつも笑っていて欲しい——それが本心だった。

真っ直ぐコールを見つめる。

しばらくそうしていると、やがて弟子は観念したように「分かりました」と呟いた後、何かを決心するように拳を握り締めながらこちらを見つめ返してきた。

「何があったのですか？」

改めて聞く。

「……実はその……僕は……」

これに対しコールは何度か言い淀むような態度を見せた後「……嫉妬していたのです」と告白してきた。

「嫉妬？ 何に対してですか？」

「……アスハスさんに対してです」

「アスハスさんに？ 何故ですか？ 何を嫉妬するのですか？」

「それは……り……リーゼロッテ様がお話をしていただくことに対してです」

「……どういふことですか？」

言葉の意味が理解できない。

かつてはいるのですが、この気持ちを抑えることができなかったのです。だって……だって僕は……」

「だって？」

問い返しながら、リーゼロッテは自分の身に起きる異変に気がつく。(どういふこと？ これはどうなっているのです？)

何故だろうか？ なんだか胸がドキドキと高鳴る。顔が火照り、全身が熱くなっていくのを感じた。

「僕は……り……リーゼロッテ様のことか……好きだからです！」

「……え？」

まるで考えもしない言葉だった。一瞬間の中が真っ白になる。

(好き？ コールが私のことを？) 聞き間違いだらうか？

いや、そんなことはあり得ない。だって、しっかりと心の奥底にまで彼の言葉が届いてきたから……。

(そう……そうですか……。好き……好きですか……)

何故だろうか？

ただの言葉でしかないというのに、胸の中に温もりが広がっていくのを感じる。

(この気持ち……。そうか……。これって、私も……)

自分に対して「リーゼロッテ様に対して不埒なことを考えてしまい申し訳ありません」とコールは謝ってくるけれど、謝罪などこれっぽっちも必要なかった。

何故ならば……。

「謝罪などしないで下さい」

一言告げると共に、リーゼロッテは一步弟子に近づいた。

「リーゼロッテ様？」

コールが戸惑いの表情を浮かべる。そんな弟子に対して優しく微笑むと、そつと唇にキスをした。

口唇と口唇を重ねるだけの優しい口付け。

伝わってくる唇の柔らかさと温かさが心地よかった。

「……え？」

ポカンッとコールが口を開ける。

「……私だって……コールのことが……す……好き……。好きですよ」

ずつと一人で生きてきた。自分自身しか信じられるものはなかった。そんなこれまでの自分からは考えられないような恥ずかしい台詞だったけれど、嘘偽りない本心だった。

「リーゼロッテ様……」

「コール」

互いの名を呼び合い、もう一度抱き合う。ドキンッドキンツという胸の鼓動が伝わってしまうのではないかと思うくらいに強く強く抱き締め合いながら、二人はどちらからともなくもう一度口付けをした。

*

(とんでもないことをしてしまっただわ……恥ずかしい……)

翌朝、キャンプにて目覚めたリーゼロッテは、昨夜の出来事を思い出して

頬を赤く染めた。

それはコールも同様らしく、朝食の時間に顔を合わせる時、彼は傍から見ても一目で分かるくらい顔を紅潮させはつきりど動揺を露わにした。

キスマでしかしていない。あの後すぐに二人は別れている。けれども、昨日までのようにコールを見るのができなかつた。

彼を見つめているだけでなんだか恥ずかしくなってくる。けれどもそうして覚えてしまう羞恥さえも、なんだか心地よく感じた。

それは多分コールも同様であり、恥ずかしがりつつも彼の動きは昨日までより目に見えてよくなっていた。

お陰でこの日の調査はスムーズに進み、一つの遺跡の最深部にまで到達することができた。

「これはなんでしょうか？」

アスハスが小首を傾げる。彼が向ける視線の先には祭壇のようなものが作られており、その上には一つの壺が置かれていた。壺の上には札のようなものが貼り付けてある。

「……強い魔力を感じます」

壺から溢れ出しているのは禍々しい魔力だ。おいそれと簡単に手を出していいものではないさそうだ。協会の指示を仰いだ方がいいだろうか？

いや、しかし——

今回の調査はあくまでも仕事ではない。そう思ってきたが、実際何日も調査を続けていると、魔術師としての

好奇心もわき始めてきていた。

協会に知らせるよりもまず先に、自分で調べてみたい。そんな欲求がムクムクと鎌首をもたげてる。

「……それじゃあちよつと調べてみますね」

そんなリーゼロッテの心を読んだかのように、コールが壺に近づいていく。「気をつけて下さいね」

「分かつてます」

口元に笑みを浮かべながら頷く姿は、なんだかこれまでよりも頼もしく見えるものだった。

「……何かありましたか？」

「え？ あ……ええ？ べ……別に何もありませんけど」

慌ててアスハスの言葉を否定する。

「え？ あ……うわああああ！」

その瞬間だった——コールの足下の床が音を立てて割れたのは、弟子はバランスを崩して倒れる。その先にあるのは例の壺だった。

「コール!!」

コールが祭壇に当たる。これによって壺がバランスを崩し、落ちた。

ガッシャアアアアアッ!!

音を立てて壺が割れる。

同時に、壺の中から黒い霧のようなものが噴き出してきてきた。

(あ……あれは一体なんなのですか?)

霧の正体はまるで分からない。けれども、とてつもなく嫌な予感がした。まるで悪意の固まりのような霧だ。そんなものがコールに向かっていく。

「危ないっ!!」

瞬間——リーゼロッテは駆け出す。ただ見ていることなどできなかった。自身の身体に魔法をかけ、肉体強化を施し、凄まじい速度でコールに接近すると、いまにも霧に飲まれそうだった彼の身体を突き飛ばす。

「り——リーゼロッテさまあああ！」

自分の身に起きた出来事を悟ったコールが悲鳴を上げた。

そんな愛しい少年に対して「私は大丈夫です」と言うように優しく微笑む。

次の瞬間、肉体は黒い霧に包まれ、リーゼロッテの意識は闇の中に沈んだ。

*

「うつく……つうう……」

ゆつくりとリーゼロッテは瞳を開く。

「リーゼロッテ様！」

すると視界に青い顔をしたコールの姿が映り込んだ。

「コール？」

一体何がどうなっているのか？ 一瞬状況が掴めずきよんとしつ、事態を把握する為に周囲を見回す。場所はリーゼロッテの為に用意されたテントであることは間違いない。

では何故自分はテントにいるのか？ (そうか……：そういえばあの時私はあの壺の中に隠れていた悪意の固まりを思いっきり吸い込んで……)

意識を失う前のことを思い出す。

「あゝらら、悪意の固まりなんて言い方、失礼しちやうの!」

「——え？」

聞き慣れない声が耳元に届いた。可愛らしい声。だというのに、耳にしただけで背筋がゾクゾクとするような悪意が含まれた声だった。

思わず身を起こし、周囲を見回す。「ど……どうかされましたか？」

「どうかって……：コールにはいまの声……聞こえなかつたのですか？」

「こ……声ですか？ それって一体？」

コールは首を傾げる。

(聞こえていない?)

あんなにはつきり聞こえたのに……：

「ふふ、残念だけどソフィーの声は貴女にしか聞こえないのよ、ソフィーは貴女の中にいるんだからね」

疑問を抱いていると再び声が聞こえた。どこから聞こえてきたのかも今度

ははつきりと認識できる。

リーゼロッテは慌ててそちらへと視線を向け——硬直した。

(これは……)

「うふふふくの♡」

そこにいたのはぬいぐるみ程度の大きさをした少女だった。背中には羽虫を思わせるような二枚のエメラルドグリーンらしい羽が生えている。髪の色は金。キラキラ輝く金色の瞳は、まるで猫のようにも見えた。

(……魔力寄生生命体)

リーゼロッテは一瞬でその存在がなんなのかを理解した。

肉体を持たない精神だけの生命体

魔力を持った人間に寄生し、その人間



から魔力を吸うことで生きていく存在である。

魔力寄生生命体は宿主にしか見ることも声を聞くこともできない。どうやらあの壺に封じられていたらしい。コールがまるで存在に気付いていないことから分かるけれど、どうやら寄生されてしまったらしい。

『魔力寄生生命体なんて味気ない呼び名は嫌なの。ソフィーのことはソフィーちゃんと呼んで欲しいの♡』もしくは妖精さんとかがいいの♪』

ニコニコと魔力寄生生命体——ソフィーは笑う。

実に無邪気な顔だ。一見すると無害な子供のようにしか見えない。

(でもそれは間違いですね。この子からは凄まじい悪意を感じます。魔力寄生体の中でも特別質が悪い存在だと考えても間違いないでしょう……)

実際ソフィーの小柄な身体からは、感じているだけで鳥肌が立ちそうになるほどの悪意が滲み出していた。

『質が悪いだなんて酷いの♡』

どこまで正確なのかは分からないが、心まで読むことが可能らしい。

「だ……大丈夫ですか?」

「……問題ありません。それより、コールこそどこか辛かったりはしませんか? 何か異常があるのであれば言ってお下さい」

そう言っただけニココリ笑う。

あまりコールには心配させたくない。だからいまは表面上は何もない風を装

うことに決めた。

『あ! ソフィーのこと無視するつもりなの! そんなのヤダ! ヤダヤダヤなのっ!!』

ソフィーが文句を言ってくるが気にしない。

このような存在は無視することに限る。存在をないものとして扱いつつながら、

被う方法を探らなければ……。

そうリーゼロッテは決めた。

『僕は大丈夫です。それよりリーゼロッテ様。今回は申し訳ありませんでした。僕が不甲斐ないせいで……』

『そんなことはありません。ああいつたことは誰にだって起きえます。ですからあまり気にしないで下さい。私は大丈夫ですから』

微笑みかけながら起き上がる。

「あ、ま……まだ休んでないよ」

「大丈夫ですよ。これくらい問題ありません。調査も遅れ気味で休んでる暇はありませんから」

「ですが……」

「辛くなったら言いますから。私を信じて下さい」

「………はい。分かりました」

リーゼロッテは立ち上がり、テントを出る。

(遺跡を調べれば魔力寄生生命体を祓う術も見つかるかも知れませんが……)

『そんなの捜したって無駄なの♡』

などと語りつつブーンと羽をはためかせながら自分の跡を追ってくるソフィーを無視し、再びリーゼロッテは遺

跡に入った。

が——残念ながらソフィーを祓う術を見つけないことはかなわなかった。

『ほら、言った通りなの♪』

エッヘンと胸を張ってくる。

正直言うと少し可愛らしい姿だ。けれどもリーゼロッテは完全にこれを無視した。

魔力寄生生命体と言葉を交わせば、

それだけ深く自分の精神に入り込まれることになってしまうから……。

だからいな者として振る舞う。

そのお陰で異変を誰かに察知されるなどということはない。

「それじゃありーゼロッテ様。あの……また明日」

「ええ」

夕飯を食べ終えた後、テントの前で

コールと言葉を交わす。

「おやすみなさい」

そう一言声をかけ、テントに入ろうとした。

しかし、そこでリーゼロッテは動き

を止める。

何故ならば、コールがいつまでもその場に立っていたからだ。

「どうかしましたか?」

一体どうしたのだろうか?

「えっと……あの……その……」

何かを言いにくそうにモジモジ始める。時々チラチラと訴えかける

ような視線をこちらへと向けてきた。

「何この子? どうしちやったの?」

同意するのは癪だけれど、確かにど

うしたのだろうか?

「何か言いたいことがあるのですか? だったら遠慮なく言ってお下さい」

言葉を促す。

するとコールはしばらく考えるような素振りを見せた末——。

「あ……あの……き、キスしてもいいですか?」

そう尋ねてきた。

「……えっ?」

思わずリーゼロッテは硬直する。

「あ……その……ごめんさい。いきなり変なこと言っ……」

するとこちらの反応を拒絶と見たのか、コールは謝罪の言葉を向けてきた。

「——変なことって、別にそんなことではありませんよ」

彼の暗い顔など見たくない。だから慌ててフォローするものの、この場で

キスができるかと言われると即答することはできない。

「え? キス? キスするの?」

誰かに見られながらキスなどはつきり言っただけ恥ずかしすぎるから……。

「それじゃあその……き、キスしてもいいですか?」

が、コールはそのことに気付かない

当たりの前だ。彼にはソフィーが見えて

いないのだから……。

「……か、構いませんよ……」

拒絶はできない。

「おおおおお! キタクなの♡」

(気にしては駄目。ソフィーは元々存在してないものだと思えなさい。忘れ

るの……存在自体を忘れる……)

そう必死に自分自身に言い聞かせた。
『存在を忘れるって、酷い言い方なの。でもソフィーは優しいから許してあげて。ふふふ……キスが見れるならそれだけでソフィーは満足なの♪』

(なんとでも言っただけ！)

祓う方法が見つかるまでの辛抱だ。そう自分に言い聞かせながら、リーゼロッテはコールと向き合った。

『好きですリーゼロッテ様』
昨日も聞かされた言葉である。けれどもドキッと昨日よりも強く胸が高鳴るのを感じた。

「……わ……私もですよ」
愛おしさが溢れ出す。

「うほくの!!」
妖精が興奮の声を上げた。

しかし、そんなものは無視し、コールと抱き合う。彼の体温を感じるだけで、愛おしさがわき上がってきた。

「んっ……んんん……」
そのまま二人で唇を重ね合う。

昨日と同じく触れ合うだけの優しい口付けだった。

ほんの僅か触れただけ。すぐに唇は離れていく。なんだか物足りなさのようなものを感じた。

もつとキスしていたい。もつとコールを感じていたい——自然とそう思ってしまう。

「リーゼロッテ様……愛しています」
するとコールも同じようなことを考えていたらしく、再び唇を寄せてきた。

「んっちゅ……」

二度目の口付け。

「はああああ……」
これも触れるだけだ。

けれどすぐに三度目の口付けをする。そのまま——。

「んっふ……んっちゅ……ちゅっちゅっちゅっちゅ……んちゅ……」

三度、四度、五度、六度と啄むように何度も口付けをした。

唇と唇が触れ合うたびに、互いを抱き締める腕に力がこもっていく。コールのことが好きだという気持ち、抑えたいほどに膨れ上がってくるのを感じた。

「んっ!?」
やがてコールが舌を伸ばし、口腔に挿し込んできた。

唐突すぎる出来事に一瞬驚いてしまふ。が、それは本当に瞬きの間でしかなく、リーゼロッテは気がつけば自然とこれを受け入れていた。

「んっちゅ……ちゅくっ……ふっちゅ……むちゅ……んじゅるっ……ふちゅ……」

本能の赴くまま、挿し込まれた舌に自らも舌を絡めていく。舌と舌が触れ合うと、クチュクチュというどこか淫靡さすら感じる音色が響き渡った。

ぐちゅっ……ちゅぐっ……ぐちゅっくちゅっくちゅ……

繋がりがあっているのは唇と唇でしかない。けれども何故だろう？ 身体がコールと一つに溶け合い、混ざり合っ

ているのではと思えるくらいに、心地よかった。

舌と舌を絡ませれば絡ませるほど、なんだか身体が熱くなっていく。ジンジンと胸や下腹部が疼くのを感じた。

(気持ちいい……。キスってこんなによかったのですね……。はあはあ……すごい。いつまでもして欲しい。ずっとこうして欲しい)

欲求が膨れ上がっていく。

「うふふ、すっごく気持ち良さそうなの。ロッテちゃん……とつてもエッチな顔してるの♪」

しかし、幸せな時間は長くは続かなかった。

「あっ！」
耳元に届くソフィーの声が、リーゼロッテを現実に戻した。

慌てて重ねていた唇を離れた。

「……?」
唐突な中断にコールが不可解そうな表情を浮かべる。

「ご……ごめんなさい……。その……明日も早いから早く寝ないと……」
慌てて言い訳するようにそう伝えた。

「……そ、そうですね。すみませんですみなさい」

「ええ……おやすみ……。また明日」
しつこくしすぎたとも思ったのだろうか、慌ててコールは頭を下げてこの場を立ち去っていく。

「あゝらら、いいの？ 帰しちゃっても。もつとキスしたかったんじゃないの？ ソフィーのことなら気にしなくてもいいのに」

後ろ姿を見つめると、なんだか名残惜しさも感じてしまう。するとその想いを読んだかのような言葉をソフィーが向けてきた。

「……」

これに答えずテントに入ると、すぐに簡易ベッドに横になった。

起きていてもソフィーの愚にもつかない言葉を聞かされるだけでしかない。であるならば、さっさと眠るに限る。そう思った。

だが、目を閉じても簡単に眠ることはできない。その理由は簡単だ。瞳を閉じるとどうしてもコールとのキスを思い出してしまふから……。

思い出すとそれだけで身体が熱くなってくる。じんわりと全身から汗が噴き出し、ドキドキと胸が疼いた。何故か下腹部にもどかしさにも似た感覚を覚えてしまう。

「んっふ……んんん」
思わず寝返りを何度も打つ。

(思い出したら駄目です。寝ないと……眠るのです)

同時に何度も自分自身に言い聞かせるのだが、意識すればするほどより全身は火照り、目が冴えてしまう。

「眠れないの？」

その上、ソフィーが声をかけてきた。(五月蠅い)

「ふふ……やつぱり眠れないんだ。だつたらさあ、ちよつとソフィーのお願い

聞いて欲しいの」

「お願い？ 一体なんですか？」
「相手をしてはいけない——理性では理解しているのだけれど、思わず問い返してしまおう。」

「簡単なことなの。ねえ、ソフィーにロッチちゃんのオナニーを見せて欲しいの」

「——なっ!？」

「とんでもない申し出だった。思わずガバツと身を起こしてしまおう。」

「するとこちらを見つめてニヤニヤ笑うソフィーと目が合ってしまった。」

「ねえお願い。ロッチちゃんのオナニーを見せて」

「見せて……何をワケが分からないことを言っているのです?」

「ワケが分からない? 嘘を言っちゃいけないの。ロッチちゃん……これまでも何度かオナニーしてるでしょ?」

「そのようなことしていません!」

「否定してもムダなの。ソフィーはロッチちゃんに取り憑いてるから、ロッチちゃんが三日に一度は自分でしてることくらい全部分かっているんだから」

「——そ……そんなこと……」

「とはいうものの、否定することはできない。」

「確かにリーゼロッテは三日に一度のペースで自慰をしてしまっていた。天才と呼ばれ、周りの皆から常に結果を求められてしまう反動からか、どうしても夜になると身体が火照ってしまうのである。それは否定しようがない紛れもない事実だった。」

「しかし……だからってなんで貴女にそ……そのような行為を見せなければならぬのですか?」

「何故って簡単なことなの。それがソフィーにとつての食事なんだから」

「食事?」

「そうなの。ソフィーはね、取り憑いた人間の『病み』と『快楽』を食べて生きてるの。だから……ソフィーにロッチちゃんの快楽を食わせて欲しいの。ふふ……もちろん、無理矢理オナニーさせられちゃう病みもね」

「どうやら思った通りこいつは邪悪な存在らしい。」

「なるほど。よく分かりました。ですが、そのようなことするつもりはありません。貴女に食事を与える義理は私にはないのですから」

「なるほどなるほどなの。だけど、そうは言うけど本当はオナニーしたいんですよ? スッキリしたいでしょ?」

「だつたらスッキリするべきなの。ロッチちゃんは気持ちよくなれて、ソフィーは食事ができる。まさにウィンウィンの関係なの」

「……だ……だから……私は自慰などしたくはありません!」

「ふ……ん。拒絶するんだ。だけど、それは許さないの。ソフィーの言うことには絶対服従してもらおうの。してくれないと……」

「しないとうとうするとうのです?」

「死んでもらうの」

「だが、その笑みは笑顔ではあるけれどとても冷たいものであり——。」

「あつ! あがつ! あがああああああああああ!」

「瞬間、頭が割れてしまいそうなほど激烈な苦痛が襲ってきた。」

「思わず悲鳴を上げ、この場に転がってしまおう。頭を押さえながら、リーゼロッテはゴロゴロとのたうち回った。」

「どう? 死んじやいそうでしょ?」

「ほら、辛かったらするの。オナニーをソフィーに見せるの。大丈夫。ソフィーを満足させてくれれば、この身体から出ていってあげるから」

「わ……分かった。分かりました。す……あがああああ! し、しま……す、から……この……この痛みを止めてえええ!」

「天才魔術師ではあるけれど、これまでともな戦闘経験もないリーゼロッテにとつて、この痛みはとも耐えられるものではなかった。」

「だから救いを求めてしまおう。」

「素直ないい子なの。分かったの。それじゃ助けてあげるの」

「そのお陰で、痛みは引いた。」

「はああああ……く……や、やれば……お……おな……オナニー……すれば……本当に……出ていってくれるの?」

「もちろんなの。ソフィーを満足させてくれればそれでいいの」

「ニッコリとソフィーは笑う。」

「(いまは……この笑顔を信じるしか……あ、ありません……)」

「素直なのはいいことなの」

「無邪気にソフィーは笑った。」

「それじゃあいつも通りにオナニーして見せて」

「ソフィーが命令を下してくる。」

「(こんなことしたくない……でも、あんな痛み耐えられない……少し……ほんの少しだけ恥ずかしさを我慢するだけです……)」

「屈辱に身を震わせギリッと奥歯を噛みながら簡易ベッドに横になると、自らの胸に手を伸ばした。」

「どうすればソフィーを喜ばせることができるのか分からない。であるのなら、恥ずかしいけれどもいつも通りにする以外なかった。」

「寝間着の上からそつと乳房に指を這わせると、グニグニツと柔肉を揉む。同年代の少女達と比べても明らかに大きな胸。ほんの少し指に力を入れるだけで、乳房はあつさり」と形を変えた。」

「わあ♥ 凄くおっきいの。そんなおっきなおっぱい羨ましいの」

「大きいとか面と向かって言われると正直恥ずかしい。」

「カアツと頬が赤くなつていくのをリーゼロッテは感じた。」

「(恥ずかしいです。でも……ソフィーを満足させないと……)」

「これは一時の恥でしかない——そう

自分自身に言い聞かせながら、中断することなくこねくり回すように自身の胸を揉み続けた。

「んつく……んつく……んぶんつく」

しばらくそうして行為を続けていると、なんだか胸元にじんわりと甘く痺れるような感覚が広がり始める。自然口からは鼻にかかったような吐息が漏れ始めた。

「感じて始めてきたの」

「……そ……そんなこと……んつく……んつく……」

ないと答えたけれど、何故だろうか？ このような状況だというのに、どうしてか肉体は普段以上に敏感になつてしまっている。

指を食い込ませるように乳房に対する愛撫を続けていると、すぐに乳頭が勃起を始めた。ポチッとまるでポタンのように、寝間着に乳首が突き出るこの乳首を指先で摘んで転がすように愛撫すると――。

「あつふつ！ あつあつあつ」

これまで以上の声が続いてしまった。（何これ？ どうなっているのですか？ 何故……どうしてこんなに気持ちがいいの？ こんな……こんなに私つて敏感だったの？）

などという疑問を覚えてしまうくらい、何故か肉体は激しく愛撫に反応してしまふ。

（駄目……。こんな……誰かに聞かれたい……。声を抑えないと……）
リーゼロッテは必死に唇を引き結ば

うとする。

「んつく……くひつ！ あひつ！ あつあつあつ」

けれども胸を刺激すればするほど、肢体に走る快楽は大きくなる。まだ胸しか刺激していないのに、まるで全身を愛撫しているかのような性感を覚えてしまつている自分がいた。

そんな快楽の増幅に比例するように、下腹部がジンジンとより熱く疼き始める。太股同士を擦り合わせながら、自然と腰を左右にクイッククイックと振つてしまつてさえた。

「はあはあはあ……どうして？ なんてこんなに……んつく……あつ」

自然と下腹部に手を伸ばしてしまふ。寝間着を捲り、黒いショーツを露わにすると、そのクロッチ部分に指を這わせた。

くちゅう……

「んひつ！ あつ……これ……嘘……もうこんなに濡れる……」

指先に湿った感触が伝わってくる。指を這わせた股間部は、既にぐっしょりと濡れをばつていた。生温かくネットとした液体が絡みついてくる。まだ胸を揉んでいただけでしかない。だというのにまるでお漏らしでもしてしまつたのではないかと思うほど下着が濡れてしまつているという事態――これは本当に現実なのかとさえ思つてしまふ。

だが、伝わってくる感触は本物であり、陰部に触れているだけで増幅して

くる性感も現実だった。

（駄目です……。こんなこといけないことです。なのに……どうして？ なんてこんなに反応してしまつているのですか？）

「あつく……んつく……くふつ……んつく……んぶんつく」

くちゅうつ……。ぐちゅうつぐちゅうつぐちゅうつうう……

自然と指が動いてしまふ。ショーツの上から愛液に塗れた秘裂を自ら何度も何度も繰り返し擦つてしまつた。

指と下着生地が擦れるたびに、グチュグチュという淫靡な音色が響く。このような音を自分が奏でているのだと考えると、死んでしまいたくなるくらいに恥ずかしくなつた。

だからといつて指を止めることはできない。

「こんな……こんなこといけないのに……だつめ……声……出してしまふ……あつあつ……んつく……んぶんつく」

自分で自分を責めてしまふ。指先が肉花弁に押しつけられるたび、甘い悲鳴がテントの中に奏でられた。

「はあはあ……ロッチちゃん凄くエツチなの。でも、それだけじゃまだ駄目だからロッチちゃん……そろそろおまんこを見せて。直接グチュグチュ弄つてみせて欲しいの」

「そ……そんなこと……」

「できないなんて言っちゃ駄目なの」
拒絶は許されなかつた。
（仕方ありません……。逆らうことは

できないのですから……）

自分自身に言い聞かせながら、濡れをばつたショーツに手をかけると、これを横にずらした。

途端に愛液に塗れた肉裂が剥き出しになる。何度も擦つた為か、既に秘裂は左右に開き、ピンク色の花弁が剥き出しになつていた。

「ロッチちゃんのお……んこ……凄く綺麗な。うふふ……それじゃあ自分でいつもみたいに弄くり回して」

「う……ううう……。んつく……くひつ！ あつ……んつく……んぶんつく……んつく……んつく……」

ぬつちゅう……。ぐちゅうつ。ぬつちゅうぬつちゅうぬつちゅうぬつちゅう……

命じられるがままに直接濡れた肉裂に指を這わせると、淫靡な音を奏でながら秘部を擦り上げる。襷の一枚一枚をなぞるように指を蠢かせると、ぐさまりーゼロッテの口からはこれまで以上に愉悦に蕩けた嬌声が漏れだし始めた。

（ああ……。か、感じる……。感じてしまいます。どうして？ んつく……あつあつあつ……。こんな……こんなに感じたことなんていまま一度もなかったのに……。んつく……あひんつく！ なんて？ ああ……どうしてこんなに気持ちいいの？）

自分の身体が自分のものでなくなつてしまつているかのようにだつた。

指を動かせば動かすほど、全身を蕩かすような性感が大きくなつていく。指で肉裂をなぞり、クリトリスを抜く

ように刺激すると、それだけでどちらかという細身の肢体はまるで電流でも流されたかのようにビクンッビクンッと激しく震えた。

「あつあつあつあつあつ」

指の蠢きに合わせて漏れる嬌声も大きくなつていく。

「凄い……あはああ……。ロッチちゃん最高に気持ちよさそうなの。ねえもしかしてもう絶頂きそうなんじゃない？　そうでしょ？」

「そ……そんなこと……んっんっんっ……ない。絶頂きそうになんかなつて……あつあつ……な、ない」

慌てて首を左右に振って否定する。

「意地を張る必要はないのロッチちゃん。ロッチちゃんが感じまくつてるとはソフィー分かっているから。だから素直になるの」

「私は……んんん……す、素直で……すつ……あつふ……はあつはあつはあつ」

首を左右に振って否定するのだが、愉悦に蕩けた声を漏らしながらではなんの説得力もない。

「意外に頑固なの。だけど、本当に我慢する必要はないの。だって、ロッチちゃんの身体は普段より凄く感じやすくなつてゐるんだから。だから恥ずかしがる必要はないの」

「かんっじ……あつあつ……や、やすく？　ど……どういふことですか？」

「そのまの意味なの。ソフィーが取り憑いてるとね、それだけで女の子の

身体は敏感になつちゃうの。だから……感じちゃうのは仕方がないことなの。溺れちゃうのもいいんだよ」

「溺れても……いい……いい？」

ソフィーの言葉に嘘はないだろう。実際リーゼロッテの肉体は普段以上に敏感になつてしまつてゐる。であるのなら、無理に耐える必要などないのではないか？

だつてそうではないか。敏感になつてしまつてゐるのだから……。無理に我慢したつて仕方がないではないか。まるで言い訳するようなことを考え

てしまう。

それと共に――。

ぬっちゃ！　ぬちゃつぬちゃつぬちゃつぬちゃつ、ぬちゃあああ！

秘部を刺激する指の動きもより早く、激しいものに変つていった。

「ああ……。だつめ。んっんっんんんん！　こつれ……絶頂く……。ああ……わつたし……わたいい……絶頂く！　絶頂きます……あつあつあつ、絶頂つて……絶頂つてしまひます」

絶頂感が抑えたいほどに膨れ上がつてくる。

仕方ない。敏感にされてしまつたのだから仕方がない――そんな言い訳が肉悦を膨張させる。

そして――。

「んっく！　あつあつ――絶頂くつ！　絶頂くうつ!!」

性感が弾けた。ブリッジするように背中を弓形に反

らしながら、腰を突き出しつつ、片手で乳房を、もう片方の手で秘部を刺激しながら肢体をビクビク震わせる。

「あつふ……はふああああ……」

頭の中が真っ白になりそうなほどの性感が広がつていくのを感じながら、熱い吐息をリーゼロッテはテント内に響かせた。

「はあつはあつはあつ……」

津波のように押し寄せた絶頂感。その余韻に震えながら、熱い吐息を漏らしつつ肩を息をする。

「凄い絶頂ッぶりだったの。とつてもロッチちゃん可愛かったの♡」

そんなリーゼロッテに頬を紅潮させながらソフィーが語りかけてきた。

「これで……ふうふう……これでもいいんですよね？　私からで……出て……はああ……くれ……るんですよね？」

潤んだ瞳で妖精を覗む。

「え？　出てく？　そんなことないの。これくらいでソフィーは出ていったりしないの♪」

「……なつ！　それでは約束が……」

「……元々約束はソフィーが満足したら出ていくつてもなの。で、ソフィーはまだ満足してない。だから、もう少し頑張つてね♡」

無邪気にソフィーは笑う。

子供のよう純粋無垢な笑みだ。けれどその顔がリーゼロッテにはなんだか悪魔のもののように見えた。

*

「……こんな格好で仕事をしろというのですか？」

「その通りなの♪　ソフィーが魔法で用意した服なんだから、しつかりこれを着てお仕事頑張つて欲しいの♡」

翌朝――リーゼロッテの前には一組の服が用意されていた。

大きく開いた胸元に、ヒラヒラスカート。黒と白のコントラストが眩しいわゆるメイド服である。ご丁寧に黒いニーソックスまで用意されていた。いや、それだけじゃない。紫色のレース製ショーツとブラまである。

（現実世界に干渉するほどの魔法……私の魔力を利用したのですね……）

自分自身の力を自分自身を辱める為に使われる――これほど屈辱的なことはなかった。

当然「はい、分かりました」と簡単に命令を聞くことはできず、躊躇してしまふ。

「早く着るの。それとも死にたいの？」

しかし、選択肢は最初から存在してはいなかった。

（少し……ほんの少し我慢するだけです。満足すればソフィーは出ていく。そうでなくとも、遺跡を調べれば祓う方法はあるかも知れない）

「その通りなの♪　だから頑張つて♡」

向けられるニコニコ笑顔にギリッと奥歯を噛み締めながら、リーゼロッテは命じられるがままにメイド服を身に着け、テントを出た。

「おはようございますリーゼロッテさ



「……ま……?」

「?????」

いつものようにコール達と合流する。コールやアスハス、それに他の調査員達はリーゼロッテの姿を見た途端完全に硬直した。

皆の視線が自分の全身に注がれる。穴があったら埋まりたくなるほどの羞恥を覚えた。恥ずかしすぎる。

しかし、この反応は予想通りのものでもあり、一応心構えもできていた。

「……おはようございます」

だから冷静に挨拶をする。服装こそ異常ではあるものの、それ以外は普段となら変わらないという態度をとった。そうすることで皆の氣勢を削ぐ。

「ど……どうしたんですか?」

しかし、コールだけは誤魔化せない。「……こ、これは新しいタイプの魔術服です。その……協会が性能を試せと昨日送って寄こしたんですよ」

我ながら無茶すぎる言い訳だった。

「では……今日も調査を開始します」

だから何かを問う暇も与えない。

呆然とする調査員達やコールに命じると、さつさと一人で今日調査する遺跡へと向かった。

(ちよつと服装が違うくらいなんでもありません……)

何度も自分自身に言い聞かせる。

だが、心でなんと思おうと、実際はそう簡単な話ではなかった。

「一体どうしたんだ?」

「いくらなんでもあの格好は……」

「マジおっぱいでけえな」

「太股ムチムチだぞ。絶対領域最高!」

調査員達が先頭に立って遺跡の奥へと進む自分の後ろ姿をジロジロ見つめながら、露骨な言葉を吐いてくる。

もちろん彼らの言葉はボソボソとしたものであり、本来ならばリーゼロッテの耳に届くものではないのだが――

「みんながロッテちゃんのことを褒めてるのよ、よかつたね♥」

ソフィーの力によるものなのか、聴覚が増幅されており、彼らの言葉をすべて拾ってしまっていた。

「こんな言葉聞かせないで……」

視線や言葉で穢されていくような気がする。彼らの言葉が耳に届くたび、頬が紅潮していくのを感じた。

「だめだめ! みんなからの感想はしつかり聞かないとね!」

リーゼロッテの訴えを聞き入れてくれるつもりなどさらさらならぬらしい。「いいよなあコールくんは。あんなお師匠様がいて羨ましいよ」

「え? あ……そ……そうですか?」

遂にはコールの言葉まで耳に届いてしまう。

愛しい弟子の声――それを耳にするだけで、ビクンツとリーゼロッテの身体は硬直してしまつた。

「あんなエロい師匠……羨ましいよ」

「え……エロいって……リーゼロッテ様をそんな目で見ないで下さい!」

恋人は調査員に鋭い言葉を向ける。

(コール)

彼の気持が嬉しかった。

「そんな目で……まあそりや確かにそうかも知れないけど……だけど仕方ないだろ? あの格好だよ。キミだつてエッチだつて思つてるんだろ?」

「そ……そんなことは……」

「男同士なんだから嘘はなしだよ」

「……それは……まあその……す、少しは……」

しつこく絡む調査員の言葉に、少し悩んだ末コールは頷いた。

(そ……そんな……)

思われている。

コールにエッチだと思われている。正直ショックだつた。

露出の多いメイド服――コールも他の調査員と同じくイヤらしい目で見ているのだろうか?

そう考えるとなんだかこれまで以上に羞恥が増幅し、ドキドキと胸が脈打つを感じた。

「彼氏もエッチな目で見てるつて言つてるのよ、それじゃあ……もつとサービスしてあげないとね♥」

(サービス? 何を?)

「簡単なことなの。もつとエッチな姿を見せてあげればいいのよ」

「……なっ!? そ、そんなの無理に決まっています!」

「だいたいぶだいたいぶ! ソフィーに任せて……なのよ」

パチッと妖精少女は可愛らしくウインクをしてきた。

次の瞬間――

ヴィイイイイインツ!

「んひっ! あっ! な……んんん! なに? なっに、これ!? あっあっ――んひっ! んんんんん」

唐突にショーツ自体が秘部を刺激するように振動し始める。

刺激されてしまつた下腹部。途端に全身に痺れるような性感が走り、思わず甘い悲鳴を漏らしてしまつた。

「……リーゼロッテ様? どうかされましたか?」

思わず足も止めてしまつた為、皆に不審を抱かせることになつてしまう。

「え? あ……んんん……な、なんでもありません。さ、さあ……奥に進みますよ」

もちろん下着が振動して感じてしまいましたがなどと答えることはできない。だから何も無い風を装い、更に遺跡の奥へと歩を進めていくのだが、そんなリーゼロッテを嘲笑うかのように、ショーツの振動は前進に合わせてより大きく、激しいものに変つていった。

「んひっ! んっく……あつ……くふうううう」

花卉全体が刺激される。まるで一個の生物のように蠢くショーツが陰核に絡みつき、上下に抜くように愛撫を加えてきたりもしてきた。

「ふううう……あつふ……はあつはあつはあつはあ……」

ソフィーによつて敏感にされてしまつている肉体は、簡単に性感を覚えてしまう。

こんなところに
まだ用があるんですか？
散々調べ尽くしたから
もう何も無いはず…

もー

口答えするん
じゃないの

言うこと
聞かないなら
また痛くするの

ぐっ…

わわかった…
わかりましたからっ…

ツインツ
ソフイーの更なる陵辱で
女魔術師が魔物の苗床に…!?

あそれなの
その石拾ってー☆

これ…
壺にはめ込まれていた
石かしら…?

そうそう
ソフイーと一緒に
封印されてた子

えっ!?

解放してあげるの
すっっかり忘れてたの



く空間が裂け…



まさか
また寄生体が…

オオオオオ!!



なんたて
おぞましい化け物…

なっ!?

この子は
ソフィーの
下僕なの

女の子を襲って
孕ませちゃう
すこい奴なの☆

一緒になって
よく遊んでたのよ

こいつに犯された
女の子の味はねー

絶望に塗れて
とても美味しいの

久々のご馳走なの

たっぷり墮ちていってね!!

!!

あなたに抵抗なんて
許されないのよ

あ〜ダメダメ

あ



私の魔法で
爆発四散
させてやります!!

こんな化け物っ





こののま、
終わってんわがば...

くっ...でも
催淫毒なり
耐えられます...



こんな化け物に
犯されるなんて...

なんて
屈辱...



さすがは魔術師

魔力の障壁で
毒が効きにくいの

そんな邪魔なものは
とっぴらってやるの



ほらあとは好きなだけ
感じまくっていいのよ♡

しよ 障壁がなくても
このぐらいいっ…

あああ♡
あああ♡



我慢しないで
いいの♡

ロツちゃんのお
おんこが喜ぶで
わかるのー☆

だから…

遠慮しないで
イっちゃって
いいの♡

んんん♡
しっおお♡

アキ♡

困った村人を助けるのが侍の役目！

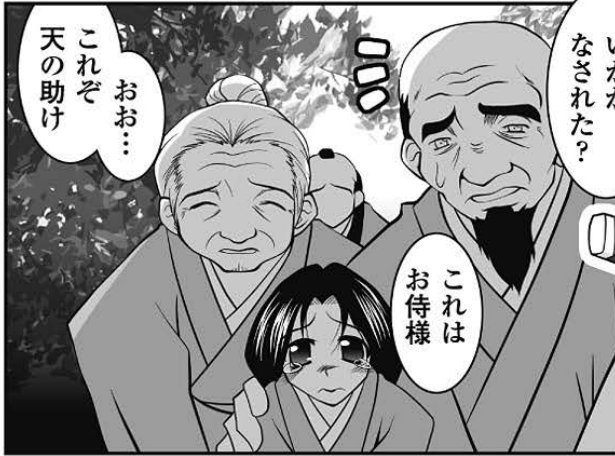


おおお
不憫じゃ
不憫じゃ

おっ母
泣くな...

オオ...

オオオ...



おお...
これぞ
天の助け

これは
お侍様

おや
村の衆
いかが
なされた？



妖...とな

実は



妖怪退治も
武道家の務め

この頼光が
蜘蛛の妖怪
とやらを
退治て
くれようぞ!!

おお!

さて、随分と
寂れた村だが



女侍 斬妖剣

~艶絶蜘蛛系子み地獄~

漫画
COMIC

ぱふえ



姿を現せ
化け蜘蛛!!

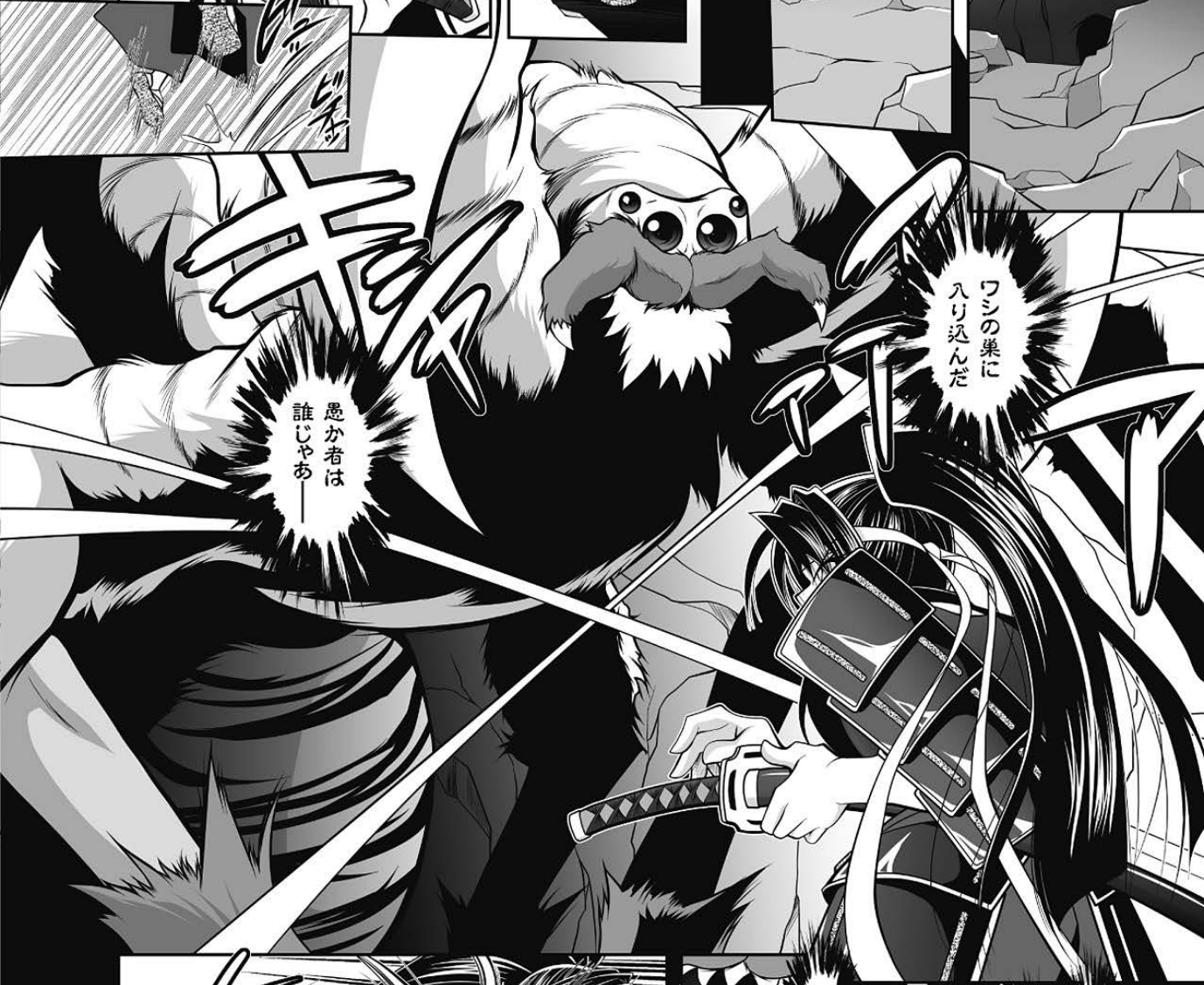
この
ようだな



む!



お
お



愚か者は
誰じゃあ

ワシの巢に
入り込んだ



ちよこさい
猪口才な

侍があ!
我を退治
してきたか





な...ッ!!

ぬ...ッ

ククク
小虫が一匹
かかりよった

もう一体
いたのか!?

よくも僕の
子を殺して
くれたな?

いつの間に
巣が!?
くそっ
放せ!

その罪
万死に値する





煮て食うか
生で食うか
どろしよら
かのう!!

く...



ああっ

ほほう
お主女
であったか

うるさい!
見るな!!

わた...っ
拙者は
侍だぞ!
無礼は
許さん!!

これは
重畳!
ならば
喰うよりも



なん...だ
こ...れ...

はっ
は...

ぐっ
う
う



しゅる
しゅる



か...は
胸...ええ
キツ...イイ

い!!



何...体が
おかし...い
ひやうツ

あ♡
毒...を
盛った...な



あ...!!

あ...!!

卑怯…者お
正々堂々…
勝負…しろ

勝負？
よしよし
なら準備
するので
待たれよ

ぐ…う
胸が…
あついい

ぎ…ん

あああああ





さて、では
正々堂々の
勝負といくか

く...ああ
こん...な
ほど...けえ

ホレホレ
どうした?
かかって
こぬのか



や...
やあああ

あああ!!



ひ...ばる
なあああ

いたああ
ああああ

たぽん

はっ
放せ...え



やめろお

ひあああつ
キツ...いい

真剣勝負に
敗れたのだ
いさぎよく
観念せい

人のくせに
けしからん
ウシ乳じゃ
懲らしめて
くれよう



あぁ

恨むなら
この淫らな
乳を恨みな



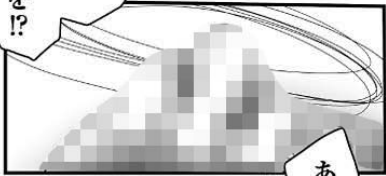
は...ああ
くそ...お



うる...さい
毒のせい...
なのにいっ



まさか
そんな!
そこ…を!?





うそは
いかなあ

は...うああ
だめええ

気持ち
良からう？
産識が飛んで
行きそうに
なるであらう

あ...あ
ひ...うう
あ...あ

ホレホレ
女体三味線
じゃ
良い音色を
奏だよ

許してっ
こんなの
耐えられ
ないいい

バ...カああ
こんなのっ

あ...ああ
口惜しい...

武士の子が
許してとな

ひやめええ
ひっぱら
ないでえ
えええっ

これは
愉快愉快



さあ！
トドメだ

なっひゃ…
うっうっ♡

乳首がっ
お豆が♡
おかひ…く

やめ♡
ひっ

まっ♡うっ

ああ
ああ
ああ

たためたため♡
んえ♡

中東・ペルシア湾の
地下回廊——

紀元前
一万年

歴史の影で暗躍する者たち——

数千年の
争いの末に
自滅していく
様を……

私は
見た……

やがて
お前たち
人間の
世界が

私の
召喚に応じて
集まった
者たちへ
これを託そう

人間の歴史を
変えうる
各時代から

これは知恵と
生命の樹から創りし
世界のほころび

うけとれ
魔術師
たちよ

運命は
神だけの
ものでは
なくなった

さあ

エデンを
破れ！

人間の
世界を
創りかえろ！

おのおの
各々の
時代でな!

1917年
ポルトガル・ファティマ
—聖母の奇蹟まであと2週間—

霊圧は順調に
高まっている
……

よろこびたまえ
君は選ばれたの
だよ

このアレイスター!
グロウリー
によって
世界初の
人造聖母と
なる事にね!

間もなく
この地に出現する
聖母の力をお前に
注ぎ込んでやる!!

壇の奥の 悪魔

おおたたくし

漫画
COMIC

くふふ

「世界のほころびで強化された魔術のためさせてもらおうか」

や...
やめて

おうちに
帰して下さい

いやああ
あ——っ!!

あっ!!

ひゃああっ





あ…

どうかね？

あっ

あっ

ずいぶん立派に
なったではないか

うーん

三日三晩
クリトリスを
磨き通された
気分は

まあ、
そろそろ
人間をやめて
もらう時が
来たようだ



ひっ!!

あう

ぐろ

さあ
もっと狂うが
いっ!

剥きたての
チポみたいに
苦しがるう

あ



ずいぶん
苗床として
こなれてきた
様だな...

よし...
よし...

ヒュー...
ヒュー...



だがそろそろ
時間が無くなつて
きているのでな

処女を
破るワケには
いかず...

尻穴は
楽しんでると
なれば...だ

これで一気に
仕上げてやるぞ

最初が
ツラいだけだ
からな!

ひゅ...
やだ...っ!
やめてええ
...っ!!

あっ!!

退魔少女 御剣あやな

小説
NOVEL

さかいひとし
酒井仁

挿絵
ILLUSTRATION

かずむ
一夢

孤高の退魔剣士をいざなう
出産アクメの悦楽地獄！



「お待ちしてました、御剣あやな様」

懇懃に頭を下げる男を、少女は軽くスルーする。相手はただの連絡員、彼女の「仕事」にとつて重要な人物ではない。

「で、いちばん怪しいのはこの学園というわけね」
凜と着こなした白と紺の制服、動きやすさを優先したミニスカートからすらりと伸びた太ももは、黒のタイツに包まれている。

真紅のネクタイと黒のブラウスと露出は少ないものの、ふつくと盛り上がった胸元が、隠しきれない色香を感じさせる。だがそれは清らかなる乙女の清楚な色気だ。

腰まで伸びた黒髪は緩やかなウェーブを描き、少女の美貌にさらなる彩りを添える。髪と同じく漆黒の瞳に、意志的な光が宿っている。

だが、制服よりもさらに特徴的なのは、少女が手にした細長いもの。鞆袋に収まったそれは、一振りの日本刀である。

「制服のサイズはぴったりのようですね。よく似合ってますよ」

とつてつけたような男の世辞に、少女——御剣あやなは無言で応える。

ここは、とある地方都市。連絡員は極めて事務的に市内の地図とワンルームの鍵、そして件の学園の校舎見取り図を広げてみせる。

「既に転校手続きは済ませてあります。週明けの月曜日から探索を開始して下さい」

古来より、人の集まる場所に引かれ、現出する邪悪……それが「妖魔」と呼ばれる少女の敵。

異界の門、妖魔の依代となるのは齢を経た古物などが多く、地方の古い学校などは妖魔にとつて格好の「狩場」となるのだ。

「旧校舎……ここなら依代になりそうなものはいくらもありそうね。週明けを待つまでもない、今夜から活動を開始するわ」

見取り図をざっと見てあたりをつけると、少女——退魔剣士、御剣あやなは得物の入った鞆袋を手にくるりと踵を返す。

「こ、今夜からですか？ 待つて下さい、万一の際のバックアップ要員はまだ」

驚き慌てる連絡員に、少女は氷のように冷たい目を向ける。そして、ふんと馬鹿にしたように失笑を漏らす。

「妖魔相手の狩りに、人間がなんの役に？」
傲慢とさえいえる少女の言葉に男は沈黙する。

少女に向けられる男の視線は、決して温かなものではない。同じ退魔組織に属しているとはいえ、彼はただの連絡員、妖魔を討滅する退魔剣士は特別な存在だからだ。

「今夜中に方をつけるわ——」
ただ一言言い残し、あやなは部屋を出ていく。

ずばつ、ぎやういんつ。
稲妻のような剣光が影を切り裂く。

たおやかな少女の手に握られているのは抜き身の日本刀。少女には似つかわしくない物騒な得物だが、冷やかな美貌にはよく似合っている。

ざしゅつ、びしゃあああんつ。
右手に握る魔剣を振るうたび、影は分断され、塵となつて闇の中に消えうせていく。

古びた学園の旧校舎。カビ臭い校舎内の薄暗がりから現れるのは、巨大な肉虫。

(ひとつ……ふたつ……みつ……)

赤黒い肉色の表皮を持つ、三〇センチ以上はあるうかという巨大な芋虫。まるまると太ったそれは、明らかにこの世界に生息する生き物ではない。これが——これこそが「妖魔」。

妖魔に通常の攻撃は通用しない。銃で撃とうが、

普通の刃物で切りつけようが、すぐに回復してしまふ。そんな不死身の化け物を唯一、浄化することができるのが浄霊刀——その名は「翹天」。

(よつ……いつ……)

頭の中で数を数えながら、少女は冷静に翹天を振り続ける。そう、魔と戦うことこそが彼女の才能であり、使命。

浄霊刀は誰にでも使えるというものではない。生まれつき退魔の資質に恵まれたものを組織が見つけ出し、退魔剣士として厳しい訓練を受けた者がけが浄霊刀を与えられるのだ。

(数が増えてきている。依代が近い……)

醜い魔虫を無限に吐き出す依代を破壊しない限り、魔物の跋扈は収まらない。あやなは校内見取り図を頭の中で広げてみる。この先は二階に続く階段のはずだ。

ざしゅつ……ざしゅつ……床を軋ませながら廊下をゆく間にも、そこかしこから芋虫型の妖魔が飛びかかってくる。

「はあ——つっ！」
ふつと身を沈めると同時に浄霊刀を走らせる。真つ二つにされた芋虫は「ぎぎい」という断末魔と共に身体が崩れ灰となる。

既に数十匹は倒したはずだが、その数は減るどころか増している。警戒しながらなおも進み、階段に足をかけた。

みし……みし、みし……板張りの階段が嫌な音を立てる。視界が開け、踊り場を見渡せるところまで登ると、あやなはぎくりと身をこわばらせた。

「——鏡か——」

踊り場の正面に設置されていたのは、壁一面の巨大鏡。そこに映っているのは反対側の窓と手すり、そして階段を上ってきた少女自身。

浄霊刀を手にした己自身の姿から目を逸らし、さ

らに進もうとした、その時だった。

強烈な違和感。首の後ろの毛が逆立ち、ぞわりと氷柱を押しつけられたような寒気が走り抜けた。

「ツツツツ……!?」

振り返った視線の先には、鏡に映った自分。

否——それはあやなであるはずがない。違和感と同時にあやなは翅天を構えた。なのに、鏡の中のあやなはだらりと両手を下げていたのだ。

「ツツ！ 依代はこの鏡か！」

異界と繋がり、怪魔を生み出し続ける依代。

これを浄霊刀で撃ち碎けば任務は完遂される。だが、振り下ろされようとした刃がピタリと止まる。

「なっ……こ、これは」

にやり……鏡の中で少女が悪意に満ちた笑みを浮かべるや、手足がぴくりとも動けなくなる。

「おかえりなさい、我が同胞——」

その言葉を聞き終える前に、あやなの意識は闇に飲み込まれた。

ぬちゃ……ぬちゃよ、ずるつ、ずるる……。

闇に濡れた音が一つ、二つ、いや大小合わせて数十の「何か」が粘液にのたうっていた。

「キイツ、キイイキイツ！」

ガラスをひつかくような不快な鳴き声を漏らし、巨大な芋虫がぬるぬるした体液まみれの身体を擦りつけてくる。

何匹、いや何十匹という不気味な肉虫が少女の身体に取りつき、ほんのわずかな衣服の隙間に身をねじ込ませようとしていた。

ぶよぶよとした感触はおぞましいの一言で、生き物の生温かさを持っているのがひとときわ生々しく不愉快だ。

（なに——これは、なに……？）
ぼんやりと浮上した意識で、少女は闇の中に蠢く

奇怪な生物を見るときもなく眺める。

（怪魔……これは、敵……私の、敵、それはわかつてるのに）

依代……巨大な鏡……と、手に馴染んだ感触がないことに気づく。

（翅天!? 私の刀はどこ?）

微かに身じろぎすると、巨大芋虫がきいきいと鳴いて身をよじる。太った身体が手や足に巻きついて、振りほどこうにも力が入らない。

あやなはこれまで怪魔に敗北したことはない。

相手の力量が予想以上で窮地に陥ったことなら何度かあるものの、こんな目に遭わされたことなど初めてのことだ。

だが、少女が退魔剣士である以上、やるべきことは決まっている。

（翅天さえこの手に戻れば、こんな虫とき……つ）

その時、芋虫どもの動きが変わった。

「キユイツ、キユイツ、キユキイイイイツ」

「ひうらうつ? な、なんだ、これは……ツ」

太ももに絡みついていた虫の感触が、明らかに変わった。

黒のタイツ越しに感じていた虫のぶよぶよが、いきなりダイレクトに伝わってきたのだ。

ねとねとの体液はさつきよりも熱く、下賤な虫は乙女の肌とタイツのわずかな隙間に頭部をねじ込もうとのたうち回る。

「まさか、布地を溶かしているの?」

ぶちぶちん、と胸元のボタンが弾け飛ぶ。

魔虫の体液がボタンを留めていた糸を溶かし、乳房の内圧に耐えられなくなったのだ。露わになった乳房の谷間めがけ、おぞましい虫が直接あやなの肌に身を擦りつけてくる。

「キュウウウ、キュキイイイ」

「こいつ……やめ、ろお……ツ」

これは捕食活動なのか、それとも別の意図を持っているのか、少女にはわからない。

体液は布地だけを溶かしているようで、あやな自身の肉体に傷がついている様子はない。

（だが、私を解放する気はなさそうだ。はやく……翅天を取り返して反撃しないと!）

体液の影響なのか、手足にまだ力が戻らない。

（負けはしない……私は誇り高き退魔剣士!）

たとえ下等な虫けらに裸に剥かれようと、その誇りまでは奪うことはできない。この胸にそれがある限り、希望が潰えることはないのだ。

「……ツ?」

つきんつ、と針で刺したような痛みが胸に走る。胸元に潜り込んだ魔虫が、ブラの上から乙女の突起物に軽く牙を立てたのだ。

「キツ、キツ」

虫はもぞもぞとブラウスの内側を這いずつて、反対側のニップルにもちくりと牙を突き立てる。

「くそつ、離れる、この……うあつ?」

突如、乳首に走った痛み、いやそれは痛みというよりも鋭く突き刺さるような快感。

桃色の突起物がブラと擦れ、背筋が痺れるほどの快感が少女の身体の内側に波紋のように広がっていたのだ。

（毒……? 神経が異常に敏感になっている!）

ぶち、ぶちんつ。

またも別のボタンがはじけ、胸の露出が広がる。

淫虫はフロントホック部分に器用に頭を突っ込ませると、もぞもぞと身をよじり、少女の胸を覆い隠していた下着をまくり上げてしまう。

遮蔽物を失った乙女の乳房の突起物は、あやな自身が目を見詰めるほどに充血し、硬くこっつしている。するとそこに別の虫が取りついて、今度は牙ではなく内側の粘膜部分をニップルに擦りつけてくるのだ。

高き気妖狐は

悦獄に随ふ

あら い ゆ う
新居佑
sian

小説
NOVEL

挿絵
ILLUSTRATION

発情した妖狐は
卑しい格下妖魔の前で痴態を晒す!!



登場人物紹介



綾辻藤香

最強の妖狐として君臨していた妖狐が転生した姿。現世では綾辻家の当主となり、前世と同様に圧倒的な力を持つ。

村里章伯

綾辻家当主だった綾辻章伯が現代に転生した少年。現世では藤香のお側付き兼恋人として支える。

法限

妖魔側についた陰陽師。前世の頃から藤香に邪な思いを抱いており、いまだにつけ狙う。

前号までのあらすじ

卑劣な退魔師・法限の罠にかかり、巨大触手に陵辱され、媚薬効果のある白濁液を大量に注がれた藤香。そんな彼女のピンチを救ったのは、前世の力を取り戻した章伯だった。

「どうしてあなたはいつもそんなの?! 自分だけ犠牲にして……章伯っ」
 朝露を含ませた若草に、豊満な身体を沈ませながら、藤香は悲しげに嘆いた。
 この山の洞窟内で、千年前の都で悪名高い陰陽師

市街地から遠く離れた深い山中に、眩しい朝日の光が差し込んでくる。
 手入れなどされていない自然の草木が茂る獣道で、当代最強の女退魔師・綾辻藤香は、ひどい悲しみに胸を締め付けられていた。
 「章伯……。くっ、章伯……。っ」
 藤香の姿は千年の昔、都を恐怖の底に陥れ、妖魔の頂点に君臨していた妖狐の能力を解放したままだ。藤香の魅惑的な肢体を華麗に彩るセクシーな退魔スーツ。だがそれは、つい数分前まで、不気味な巨大触手妖魔に罵られていたために、ところどころ破け散っている。
 スーツの切れ間からのぞく、透き通るような白い柔肌や、媚肉のたつぷり詰まったボディライン。それら、普通の人間などとは比べ物にならないほど、妖しくも艶めかしい魅惑的な女体が、暖かい日の出の輝きに痛々しくも美しく照らされている。

「あ、ううっ。身体が……はんっつ。た、立つただけでこんな……気持ち……。っ。くうっ!」
 人に転生してから、これほどまでに身体が快楽を求め啼いたことなど一度もない。
 洞窟で捕らわれている間、並みの女を狂わす媚薬の十倍濃度、それを百倍近い量だけ、身体に直接注ぎ込まれたのだ。
 正気を保っているだけで、藤香の驚異的な精神力

「くっ、ふうっ……。んっ、はあ、ううっ」
 立ち上がろうと膝に力を込めると、ただそれだけで、ピッチリとした退魔スーツを着こなしした全身がゾクゾクとした熱い淫靡な炎に包まれてしまう。
 洞窟内で触手妖魔に、散々媚薬責めにされた身体が、たまらない快楽に疼く。きめ細かい肌がいやらしくわななき、股間がキュンキュンときつく震えている。

「助きたい……。章伯を助けなきゃ……。私は章伯のことを……。ずっと……。」
 人間と妖狐という禁断の壁を破るために、千年の時を超えてまで、ようやく結ばれたというのに、章伯だけを見捨てるわけには決していかない。
 「目覚めたばかりで、そう何度も強力な術が使えるわけがないわ……。っ」
 藤香を助けることで、せっかくの霊力を使い果たした章伯を、藤香と章伯の命を使って、強力な魔石……。殺生石を作ることに執念を燃やす法限が無事でおくわけがない。
 藤香を助けたばかりで、そう何度も強力な術が使えるわけがないわ……。っ」
 藤香を助けることで、せっかくの霊力を使い果たした章伯を、藤香と章伯の命を使って、強力な魔石……。殺生石を作ることに執念を燃やす法限が無事でおくわけがない。

「すげえ、臭いだな。こいつはとんでもねえ淫乱に違いないぜ!」
 生い茂る木々の間から響いてきた、しゃがれた汚い言葉に、藤香の獣耳がピンッと反応する。
 太い木々の幹や枝をミシミシといわせながら、邪悪な気配が近づいてくる。
 「げははっ。ようやく見つけたぜ、九尾の藤香さん

「必ず助けるわ、章伯! それまで死なずに待ってなさい!」
 再び章伯と離れて、より強く感じる胸の高鳴りを、強気な言葉に隠しつつ、藤香は山道を、先ほどの洞窟目指して進もうと、美しい脚をあげたそのときだ。
 「ぐふふ、臭うぞ。発情した牝狐の臭いだ」
 「すげえ、臭いだな。こいつはとんでもねえ淫乱に違いないぜ!」
 生い茂る木々の間から響いてきた、しゃがれた汚い言葉に、藤香の獣耳がピンッと反応する。
 太い木々の幹や枝をミシミシといわせながら、邪悪な気配が近づいてくる。
 「げははっ。ようやく見つけたぜ、九尾の藤香さん

を称えることはできるが、立つて歩くだけならまだしも、敵の陰陽師に再び戦いを挑むことなど、できるはずもない。
 「こんなところに私だけ飛ばして……。私に逃げろっていう意味よね、章伯。まったく……。下人のくせに主人を馬鹿にしすぎなのよ!」
 藤香は握った愛刀を杖代わりにして、疼く身体に歯を食いしばって、獣道を法限が……。章伯が待つ洞窟へと歩き出した。
 「ふざけるんじゃない、わよっ。はあうっ。私は綾辻藤香様よ? 最強の女退魔師! 家に仕える下人ひとり助けられないような、やわな女じゃないのよ!」
 「あのバカっ。私があなただを置いて逃げるわけじゃないじゃない?! 助けてあげるわよ、章伯。私はあなたがいけないと、どうしようもないくらい……。あなたのことを!」
 身体が熱く、気を抜けば今にも自ら快楽を食ってしまうほどに、牝の欲求が全身で高まっている。しかし歩みを止めるわけにはいかない。愛する人を見捨てることなど、できるはずがない。
 「必ず助けるわ、章伯! それまで死なずに待ってなさい!」
 再び章伯と離れて、より強く感じる胸の高鳴りを、強気な言葉に隠しつつ、藤香は山道を、先ほどの洞窟目指して進もうと、美しい脚をあげたそのときだ。
 「ぐふふ、臭うぞ。発情した牝狐の臭いだ」
 「すげえ、臭いだな。こいつはとんでもねえ淫乱に違いないぜ!」
 生い茂る木々の間から響いてきた、しゃがれた汚い言葉に、藤香の獣耳がピンッと反応する。
 太い木々の幹や枝をミシミシといわせながら、邪悪な気配が近づいてくる。
 「げははっ。ようやく見つけたぜ、九尾の藤香さん

「よおっ！」

「……くっ」

下卑た声を響かせながら、気配の主である妖魔たちが姿を現す。

妖魔・狒々……。体長三メートルほどもある巨軀と、小狡い性格を生かして、集団で弱い相手をいたぶる、戦闘能力は中級程度の妖魔だ。その数は全部で十四あまり。

（見つけた……？ こいつら、法限の指示で私を追ってきたの!? どこまでもイラつく男ねっ）

自分と章伯の命を執拗に狙う陰陽師の顔を思い浮かべ、苦々しい表情を浮かべる藤香。しかし同時に、周りを逃げ場なく囲まれた藤香の背筋に、普段は見せない冷たい緊張が走る。

藤香は生まれた不安を、狒々たちに悟られないよう、可能な限り平静を装い、高飛車な物言いの言葉をつき出す。

「ふんっ、体力だけが取り柄の小狡い狒々どもが今さらどうしたの？ 千年前、私の前にひれ伏して足の指を舐めていたのはどの猿どもだったかしらねえ？」

全身を侵している魔性の媚薬の影響をみじも感ぜさせない凛とした声は、藤香のゆるぎない強靭な精神力を現していた。

しかし、かつて藤香の前にひれ伏していた狒々たちは、そんな女退魔師をあざ笑うかのように言葉を変してくる。

「はははっ、あれは屈辱だったぜえ。小生意気なくそ女狐に俺たちが、顎で扱われるなんざ、あっちゃならねえことだった」

「だがもう俺たちはお前の手下なんかじゃねえ。近々、この国の支配者になられる法限様のご命令だ。九尾の藤香、お前を捕えりや、俺たちの将来は大変泰つてもんよ！」

言った狒々たちは、藤香の小ぶりの頭など軽く握り潰せるほど巨大な拳に力を込め、あからさまな戦闘態勢をとる。

先ほどからの余裕めいた口ぶりといい、媚薬に侵されている藤香の現状を法限から聞かされているのだろう。

畏怖ではなく、弱った獲物を嬲るような目つきで、狒々たちが藤香を見下ろし、じりじりとにじりよってくる。

（いい気になって……たかが猿のくせにっ！）

圧倒的妖力を持つ九尾の妖狐であった藤香と、強いのものに巻かれる処世術しかもたない狒々たちとは、実力差はまさに天と地ほどの開きがある。

しかし洞窟で受けた媚薬の効果は、絶対無比の女退魔師である藤香の肉体を、妖力を使おうとすれば、強力な劣情に悶えてしまう淫らなものへと改造してしまっている。

（くっ。でも、負けるわけにはいかないのよ！）
現在の藤香の戦闘能力では、狒々たちをまともに相手できるレベルではない。しかしここで諦めてしまつては、章伯を救いにはいけない。

藤香は内側から疼く快感を、強い意志できつく抑えつけ、わずかに細腕を震わせながらも、腰の愛刀に手をかける。

「こ、こいつ……。まだ動けるのか!？」

「は、話が違っちゃねえか?! 九尾の藤香は媚薬でとるどろだつていうから、俺たちは……」

決して悪意に屈しようとしないうちに藤香が放つ、ビリビリとした威圧感、余裕ぶついていた狒々たちを及び腰にしてしまふ。

（ふん、やはり所詮は山猿ね。今のうちにこいつらを一気に片付けて……!）

握った愛刀に力を込める。万全の状態には程遠いが、藤香が放つ威圧感に怯えすくんている狒々ども

ならば、なんとか倒せるはずだ。

「……くっく、だから俺たちは法限様からこいつを預かってきたのさ!」

そう言った一際大きい一匹の狒々が持ち出したのは、人型に切り抜かれた一枚の白い薄紙だった。それを赤く大きな掌で、ギョウツときつく握り潰す。

それは陰陽師が使う形代かたしろと呼ばれるものだった。念を込めると対象の身体感覚を自在に操ることができる魔性の道具だ。

「ふん、そんなものが私に通用するわけないわ。死になさい、猿ども!」

媚薬を受けているといつても、殺生石を体内に持つ藤香に、形代などという低俗な術が効くはずはない。逆にその程度の術で勝てると思つていた狒々たちと法限への怒りが湧いただけだ。しかし……。

「う、嘘……こんな……っ?! こん、なあああっつ?!」

想像していたものとは、まるでかけ離れた現実、藤香は思わず悔しげな声を漏らした。

狒々たちを斬り殺すはずだった愛刀は、カランと音を立て、力なく地面に転がっている。

自由にできるのは屈辱に歪ませた美貌くらいで、あとの身体は指先にいたるまで、自らの意思でピクリとも動かせない。

「げははっ、なんだその無様な格好はあ?」

「今じゃ人間たちに、女王様とか呼ばれてるんだろ? その女王様が中級妖魔の面前で、なあにガニ股姿を披露してくれてんだよ、ぎやははっ」

「くっ、うううっ! どう、して……? この、私……がああ……!？」

（媚薬改造がこんなに妖力を弱めるなんて……。絶対にゆるさないわよ、この猿どもつつつ!! ああ……）

口惜しうに歯噛みをして、笑う狒々たちを睨

みつけることしかできない。
藤香がとらされた姿勢は、卑猥と恥辱極まるガニ股ポーキングだ。ムチツとした九尾の退魔師の脚線美が、その媚肉を惜しげもなく披露するように、ぐいぐいと深く沈み込んでいく。
その美脚は、さらに左右に大きく開かれ、魅惑的な白いショーツが、女の茂みにきつく食い込んでいる様を、かつて下僕以下の存在だった猿どもに見せつけてしまっている。
「こ、こんなの私は望んでないわよっ！ こんなポーズ、私はとりたくないのにいっ！」
身体を自由に動かすことができないため、余計に全身の性欲が昂るのを感じさせられる。
白いショーツがギリギリと食い込んだ女芯は、これまでの我慢がたつたせいとか、すでに完全に満開の状態だった。
大陰唇は、いやらしいほどぷっくりと膨れ、きつい充血で痛いくらい刺激を求めている。そしてそこに開いた膣道の奥では、媚薬によつて完全に牝へと覚醒させられた子宮がキュンキュンと、恥知らずな官能を求め啼きつばなしの状態だ。
「こいつはすげえ！ 完璧に発情中の牝マコじゃねえかよ！」
「さつきまでの生意気なセリフは嘘だったのかあ？ ほらほらあ、指で弄るともうグチヨグチヨだせえ？」
「なっ……!! やめなさ……く、ううっ。は、ああっ」
ぐちゅっ……じゅにいいっつ。
漏れ出てしまう艶めかしい声を、必死の思いで押しとどめようとする。
両膝が四十五度に曲がったガニ股姿勢だけでも、たまらない悔しさが募っている。なのに、理性から解き放たれた両手は、藤香の濡れた股間へとまっすぐ下りてきてしまう。

狒々たちも、藤香が強靱な精神力で、欲情する身体を抑えてきたことを重々知りながら、あえてそれを煽って、女退魔師のプライドを踏みつぶそうとする。
（違う、違う……こんなの私の意思じゃないわよっ！ あうっ、指が勝手にいいっつ！）
生まれてからその絶大な実力によつて、他の妖魔に後れをとつたことなど一度もなかった。千年前も今も、妖魔は見下すべき存在であり、自分はその妖魔たちから畏怖される存在でなければならぬ。なのに……。
昂る淫らな牡本能だけに支配された自分の左手が、陰唇に食い込んだパンツを横にずらす。すると股間から立ち込めたムワツとした牝の淫らな湯気が、その手に触れ、恥辱感がぐんと深まる。
しかも右手は人差し指と中指を、大きく膨れた肉唇を左右に触れさせ、文字通り、くばあつと、藤香の最も恥ずべき女穴を自ら見せつけてしまう。
「なんだ、まだきれいなピンク色じゃねえか。てつきりやりまくりのグロマンが見れるかと思つたが……意外と純情なんだなあ、藤香様よお？」
「くく、高慢な女王様は、憐れな猿の俺たちに、尊いオナニーショーを披露してくれるようだぜ？ ぎやははっ！」
「この、屑どもがあつ！ 黙れええっつ！ あ、ああううっ、ふあああっつ!!」
歯牙にもかけない羞恥が湧き上がってくる。
洞窟内での戦いで半分破れかけの退魔スーツが、湧き出てくる濃密な汗で、美しい肌をびっちり張り付けてしまう。
スーツ内はきつく蒸れ、強制ガニ股姿勢をとらされている藤香の羞恥心を、一層強烈なものにさせる。

「安心しな。法限様に出会つてから、この術の扱いにはなれてんだ。もちろん、養生意気な女の扱いにもなあ！」
形代を持った狒々が、自らの邪なイメージを藤香の身体に送りつけてくる。
すると中指と人差し指がぐちゅっ！ と、膣の中に突き込まれ、なんのためらいもなくズチヨズチヨと藤香の肉ヒダの入り口を擦りあげ始めた。
「んああっつ!! ふ、くうっ。は、ああっ」
どうにか声を抑えようとしたが、性感だけでなく性欲までも強化させられた肉體は、まるで何日もお預けをくらつたかのような食欲さと過敏さで、藤香の全身にズンツン！ とした熱い快楽を流し込んでくる。
二本の指が第一関節付近まで挿入され、膣口の上側を軽く撫で上げた瞬間、痺れるような甘い電流が下半身に突き刺さり、ガニ股状態の藤香の腰がグツツ！ と淫靡に浮き上がる。
同時に、ムチリとした太腿がビクビクとわなないて、十数匹もの狒々たちに、藤香が強制自慰によつて感じてしまっていることを、隠すこともできずに見せつけてしまう。
（な、なによこれ!! 指が……すごく熱いつつ！ 私の膣内って、こんなにいやらしかったの!!）
突き入れられた自らの二本の指に、ねっとり絡みつく藤香自身の膣肉の感触が、はつきりと伝わってくる。
「こ、んな……っつ。うくっ、私のアソコが……ふううっつ!!」
自らの指で直接感じる、己の膣……。つい数時間前に処女を失ったばかりの女芯は、ひどく敏感で、怖いくらいの性欲をみなぎらせていた。
忌まわしい陰陽師の肉體改造による、いやらしすぎる膣の反応に、藤香はたまらない悔しさを感じて

しまう。

「おっ、すげえな。本気汁がドブドブ溢れてくるぜ！」

「太腿がプルプルしてらあ。こいつ、オナニー見られてるのに、感じまくってやがる！」

強い屈辱感を受ける心とは裏腹に、細く長い二本の指を、肉壁がウネウネとした卑猥な動きでギチギチと締め付けてくる。

さらに染み出してくる愛蜜は、ムンツとした淫らな熱氣にまみれている。それは、指の先から付け根までべっとり覆い尽くし、この破廉恥極まる状況の中、身体が恐ろしく発情しきつていくことを、まざまざと突きつけてくる。

「はあうう、笑うな……あつ。お前たち、猿に私が……あ、ふっ。くうんっ」

強い口調も、膣肉から迸る甘い痺れに、その鋭さを徐々に失っていく。

自分の意志とはかけ離れた、牡たちの下卑た妄想によって動かされる二本の指は、媚薬で燃え盛り続ける藤香の牝の媚肉を抉る。

「こんな……わざと焦らされてる!! はあう、くっ、いっそもう一思いに……ああ、私はなにを考えて……っ」

指先に、まだ初心なピンク色の膣の粘膜が、食欲に絡みついてくる。膣壁の表面の粒粒としたヒダの食いつきを、直接指で感じさせられることが、藤香の羞恥心をさらに煽りたてていく。

おまけにガニ股姿勢のために、滲みだした愛液がとろりと、地面へと粘ついた糸を引いてしまっている。その無様すぎる光景を、ただ上から見下ろしながら耐えることしかできない藤香の、身体が快樂と屈辱でプルプルと震え啼く。

「どうだ、俺様の手マンのテクニクは？ しかし指もマコもいい反応だな。お前、本当は自分でも、

こうされるのを望んでるんじゃないのかあ？」

「ふ、んっ。言っただけ……っ。この程度の術なんて、すぐに……あくうっ！ んはああつ！」

暴走した欲求が膣の深くではなく、入り口付近を丹念に弄る。それだけで、かろうじて吐き出した気丈な言葉が、甘い淫声に変えられてしまう。

（遠うわ、私は章伯を助けるために……っ。ふああああつ！）

童貞であつた章伯とのセックスでは、感じることもなどなかった。焦らされる、という感覚が鮮明になつてくるにつれ、章伯に対するひどい罪悪感が湧く。そしてそんな欲求を、狒々たちに見せつけていることがたまらなく悔しい。

「口でどういっても身体が物欲しそうに震えてやがる。じゃあこいつに耐えてみるよ、くそ狐が！」

「な、なにを……あふっ!! んんっ、は、くっうううっ！」

瞬時にこれまでとは違う、深く悩ましい鳴き声に変わる。

ズチュンツツツ！ ジュブブブツツツ!!

先ほどまで、ただ膣口を弄り、撫でるだけだった自身の指先が、警告もなく一気に膣の最奥にまで突き込まれた。

（んな……なにこれ……っ!! 急に、気持ち……よすぎ……あああつっ！）

それまで震えながらも、およそ四十五度の角度を守ってきた藤香の両膝が、激しいエロティックな肉の痙攣を見せながら、ガクンと九十度近くまで崩れ落ちた。

急降下した腰の動きとは反対に、気の強さを残していた美貌が、長い獣耳とスラッとした背筋とともに、クンツッ！ と大きく上向きに仰け反る。

（く、ひいいいっつ！ こんな感じ……指でなんて……おおおんっつ！）

感じやすい膣口を焦らされ続けたあとに、膣奥に打ちこまれた強烈な指マンの一撃は、藤香の高慢な姿勢を一瞬にして瓦解させるほどの、たまらない快樂刺激を爆発させた。

ジュブジュブツツ！ ズチュツツ！ ジュジュジュツツ!!

「ひいぐうっつ！ あつあああつ！ くうっ、あ、んんっつ!!」

狒々に操られている藤香の指が、焦らし責めから一変して、昇天へと突き上げるものへと変貌する。子宮口までジュンツツと突き上げた返す指の腹で、極度に敏感な膣口付近のGスポットを抉り抜く。スタイルはエロティックこの上ないが、まだ性的な知識も経験も足りない藤香に対し、性欲旺盛な狒々たちは過去、何人も人間の女をさららい、調教し、牝奴隷としてきた。

そんな狒々が操る未知ともいえる指マンの快感に、藤香のどんなに気高い精神も、濁流にのみれるかのように、快樂の渦へと沈められていく。

「あ、あああつつ！ ふざけない、ことね！ ふひいっ、んんっつつ!!」

「おお、まだ耐えるのか？ じゃあ、そのでか胸の刺激はどうだろうなあ!!」

股間からの熱い快樂波動に、なおも歯を食いしばってどうにか耐えようとする藤香に、狒々たちはサディスティックな笑みを浮かべる。

形代の能力によって、藤香の左手を操ると、退魔スートの胸の部分を藤香自らの手でビリリッ！ と破り捨てさせた。

露わになった美巨乳がぶるんつと、狒々たちの眼前に剥き出しにされる。しかもその大きく熟した胸を、藤香の操られた左手が思い切り採みしだく。

「は……あああつ!! 胸なん……お前たち、これ以上は……っ、んあああああつつ!!」

左手の五つの指が、遠慮なく自分の胸の牝脂肪を

握った瞬間、弾けるような快感が、胸はおろか、恥知らずにピンッと勃起した乳首の先端にまで響き渡った。

ブルブルと震えていた内腿が、大きく上下し始める。

堪えたくても堪えられない牝の快楽マグマに、藤香のグラマラスな肢体が、ピンピンッ！と激しくわななきだし、低俗と見下しきつていた大勢の狒々たちの前で、屈辱の快感に打ち震えてしまう。

「む、胸まで……ああっつ、気持ち……いいっ！我慢しなきゃ……我慢……んっつ、くはああっつ！」

かつて狒々たちを顎で扱っていた自尊心から、せめて凛とした表情だけは崩すまいと、表情筋に必死の力を込めて堪える。

「ぎやははっつ、その顔で我慢してるつもりかあ、この女狐様はよお!!」

「くっ、んんっつ。はあはああつ。あ、んっ……ふああつ！」

しかし身体は、退魔師のプライドよりも、熱い快楽の方に与ってしまう。カチカチと細かく歯を鳴らす唇の端からは、気の強い女退魔師とは思えない、甘く弱々しい悩ましげな声が漏れてしまう。

がくんと崩れ落ちた太腿は、ビクンビクンッ！とエロティックな上下動と前後運動を繰り返し、見ている狒々たちの性欲を刺激する。

「やべえ。やっぱりエロいな、この女。こっちのチポの方が限界だぜ」

「くく、だったらこいつにぶっかけてやりやいいんじゃねえか？ どうせ術がかかっている間は、なんでもできやしねえんだからよお！」

藤香の力が完全に無力化されていることに、煩悩を際限なく膨らませ続ける猿たちは、自らのいきり立つた肉棒を露わにした。

そして亀頭をガニ股姿の藤香に向けたまま、自ら

の指で剛直を抜き始める。

「あ、ふうんっ！ お、お前たち……なにをつ!! 早くその汚いモノをしまいなさいっ！」

狒々たちの男根は、彼らの巨体に相応しい、人間の腕ほどもある巨大な逸物だった。

「しまえつつたつてなあ？ 九尾の退魔師様がそんな乳首ピンピンつに勃起させてちゃ、牝の俺たちが我慢できるわけないだろうが？ くくく」

「太腿も気持ちよさそうにガクガク震えさせやがって。ピシヨピシヨの濡れ牝マコから、発情したお狐様の臭いがブンブンしているぜえ？」

「くうっ、だま、りなさいいっつ！ 狒々ごときが……私の身体で……んはうっ！」

身体を操られるだけにとどまらず、卑猥なポーズで自慰を強要され、その痴態を……章伯にすら見せたことのないオナニーで感じている姿を、こんな底辺妖魔の猿たちのオカズにされている悔しさに、藤香は打ち震える。

（殺、す……こいつら全員、今すぐ喉元掻っ切つて……! どう、して？ 見られているのに身体が……はあはあつ、熱くなるなんてえっ!）

千年前も、そして今も見下す以外に存在価値などないと思っていた狒々たちの前だというのに、身体の疼きがどんどん鋭くなつていく。

十数本もの猿ペニス、藤香に向けて、先走り汁を垂らし、狒々たちの指が先から根元までを激しく擦りあげる。

そのたびに、藤香の鋭敏な鼻孔は、発情した牝の昂った獣臭にくんくんと勝手に反応し、耳と尻尾の先まで甘い発情快感が生まれてしまう。

「はあ、ああっつ！ んああっつ、んっ、はうっ！ 狒々たちが、前かがみになって男根を抜く前で、自分は惨めで淫らなガニ股自慰を強要され、感じてくひいっつ！」

いる。

そんな情けない感覚が、藤香の女王としてのプライドに、被虐的なマゾの快感を知らず知らず刷り込んでいく。

「くく、九尾の藤香も媚薬漬けにしちまえば、ただの牝だな」

「いや、一級品のマゾ牝だあ。散々偉ぶってたくせに、とんでもねえ変態女狐だぜ、ぎやははっつ！」

藤香の、我知らず快楽に染まっていく心を見透かしたように、狒々に操られた十本の指が、藤香の胸と股間を責め抜いていく。

「マ……ゾ……? 私が……ふざけ、ふっひいっつ！ んくううっ!!」

ピンつと立った両方のつま先だけで、ムチつと肉のついた太腿や丸みを帯びた桃尻を支えさせられている藤香。

（こ……んな、オナニーっ。章伯にも見せたことなのに……。だめっ、狒々たちの前で感じるっ! もう……くるううっ!!）

屈辱的なガニ股自慰快楽だというのに、股間で熱い快感が沸騰してたまらない。

昂つていく女の快感に合わせ、指のいやらしい動きが明確に感じられていく。

膣奥とGスポットをジュボジュボと擦りあげるたびに、脳内に甘々なスパークが連続して弾け飛ぶ。

「おっ、膣がブルブル震えてきやがったぜ!! イクのか、藤香!!」

「げはは、俺たちみたいな屑妖魔に見られながら、オナニーでイッチまうつてのかがあつ!!」

「誰がイク、もの……んあああつ!! ココすこいっつ、クリトリスの裏あつ!! 奥の方も……オナニーってこんなにいいっつ!!」

徐々に理性が快楽の昂りに吞まれていくのが、悔しいほどにわかる。最強の女退魔師のプライドより

も、牝の欲求の方が勝っていく。

「くく、どおれ……愛しのカレシにも、まだ見せたことのないオナニーアクメをたっぷり拝ませてもらうか？」

「俺たちの方も、もう限界だぜ！ おら、さつさとイキやがれ！」

狒々の邪な意志を乗せた指の動きがさらに早くなる。

ズチュズチュツ！ と膣穴を高速で突き崩し、もう片方は、敏感な勃起乳首を、火がつくのではないかとというくらい、強烈に扱き、摘みあげてくる。

（コレ、オナニー気持ち……いいっ！ 章伯じやない……猿どもの前で私……っ！）

あえて章伯を意識させる狒々たちの言葉に、藤香の背筋にゾクゾクとした感覚がざわめいていく。

契りを誓った大切な少年を助けるどころか、こうして公開自慰の快楽に呑まれそうになっている自分に、背徳的な快感を抱いてしまう。

（ち、違うわっ！ 私には章伯を愛している！ これは薬と術のせい……私は絶対に章伯を……んああっ、助け……んふああっ!!）

そう強く理性に言い聞かせた瞬間、膣に指を突き込んでいた右手が、掌で思い切り藤香のクリトリスを押しつぶした。

すでに剥き身になり、熱く勃起している牝淫核へ非情な快楽刺激が送り込まれる。

瞬間、藤香の強い覚悟は、一瞬にして粉々に砕かれ、同時に擦りあげられたGスポットと勃起乳首からの悦楽電撃が、憐れな妖狐のグラマラスな女体を激しく痙攣させる。

「この猿が……あ！ おほおほおっ！ だめ、私……章伯……あああっつ!!」

「げへへ、見てろ。もうイクぞイクぞっ！」

「たっぷりとぶっかけてやるぜ、そらああっつ!!」

愛する男以外に……しかも低俗な妖魔の前での自慰絶頂。

羞恥と屈辱にまみれた藤香が、快楽と後悔の念の混ざった艶っぽい嬌声を叫んだと同時に、狒々たちも一斉に勃起した男根から、濃い白濁液を噴き出させてた。

ドビュオオオツツ！ ベチャベチャツツ!! ドブアアアアツツ!!

まるで消火器から噴射したような大量の猿ザーメンが、愛情と官能に揺れる女退魔師の全身に容赦なくぶちまけられる。

「そんな……あ、熱いいいっつ!! おおおおっつ、イク……もうイクううっ！ 私、公開オナニーでアクメしちゃうううっつ!!」

どろっとした白い牡粘液が藤香の柔肌を焼いた瞬間、かろうじて繋いできた理性のリミッターが切断され、藤香の身体がビビクンツツツ！ と壊れたように跳ね上がる。

上半身だけがグンツツ！ と急角度で後ろに折れ曲がり、ぶるんつとした爆乳が、勃起乳首を携えたまま、空を向く。

対して、限界までのガニ股を強いられた下半身は、ググツツ！ と腰を突き出して、肉厚の太腿がビビンツツツ！ と何度も、強烈に震え上がる。

「おおおっつ！ イグイグツツ、イツグウウウウウツツ!! オナニーアクメえっつ！ んはあっ、気持ちいいわよおおおっ!!」

形のよい細頸が、折れんばかりに仰け反り返り、ふわりとした獣耳をそえた美貌から、まさに淫欲に溺れた牝獣同然の太い声が、吐き出される。

ブシャアアツツ！ と股間から恥辱の潮を大量に噴きながら、昇り詰める。

粘ついた大量のザーメンが退魔スーツや肌に食いつき、ネチネチネチとした牡の情欲を、直に感じてしま

まう。

きつい臭いやムンツツとした熱気が、絶頂に震える五感を刺激する。

「はあ、はああっ……んあ、あはあっつ」

初めての自慰エクスタシーの余韻に、藤香は大きく肩で息をした。その姿勢は、いまだ不格好なガニ股姿勢で、太腿がブルブルといやらしく痙攣し続けている。

ピッチリとした退魔スーツは、噴出した汗と精液にまみれ、艶々とした淫らな輝きを放っている。

（く、悔しい……っ！ 身体さえ動けば……媚薬漬けてなければ、こんなやつらなんかにいっ！）

脳内が一瞬にして蒸発してしまうかのような、自慰絶頂快楽を受けても、藤香はまだ理性を保っていた。しかし身体は形代の術に捕らわれたままで、媚薬の効力は、なお一層強い牝発情を求めてくる。

「くく、いいイキっぷりだったぜえ」

「さて、術の効果が切れる前に、今度は俺たちの相手をしてもらおうか？」

今にも倒れ込んでしまいたいほどに、深い絶頂の余韻に浸っている身体が、一匹の狒々によって脇から抱きかかえられる。

藤香の下の地面では、大柄な狒々が仰向けの姿勢で寝転がっている。剥き出しになっているその腕のような逸物は、先ほど藤香に射精したばかりだというのに、もうギンギンに隆起している。

それは藤香を抱えた狒々も一緒で、ダラダラと先端から垂れる先走り汁が、藤香の敏感な嗅覚を、なぜだか甘くくすぐってしま

「な……まさか……っ?! そんな、やめなさい……お前たちっ！ これ以上、私に逆らえばどうなるか……!!」

藤香の指摘に、彼女を扶んだ二匹の狒々はニタリと笑った。周りで見ている猿妖魔たちも似たような





命尽きようと
この魔窟かりや
必ず救…

こっけん!!



そなたらけは…

だ…が…
美夜…



とうに…
終わっていりゆ…

あなたの
言う…とおりッ
巫女たる
私は…



ままた…ッ

あ…あ…

あッ
やあ…ッ



待望の再登場!!

じゅっ

じゅっじゅっじゅっ!!

孕み雌
ハラミメ

漫画
COMIC

無望菜志



うふふふ
その身の末路を
受け入れながら

なお私を
救おうとする
気高き魂



らま…れツ
化生風情が…ツ

美夜の口で
そんな戯言を…

あ…



妹の目の前で
いき顔を晒して

出産アクメに
震えながらの
言葉とあれば

愛おしさも
ひとしおですわ
姉さま



にやああうツ!?



ほら
わかります？

子宮のおくまで
簡単に入っちゃい
ますよ？



子宮口も
やわらかくて
ガバガバで



わあ
すごいです

姉さまのお■んこ
もう肘まで
飲み込んでいますよ



中は火傷しそうに
熱くてトロトロで

あは
姉さまったら
卵管の近く触れるの
気持ちいいんですね

触るたびに
ぶるぶるしてるのが
よくわかります

もう両腕どころか
頭まで入りそうなくらい
ガバガバなのに

一生懸命
締め付けようとする
姉さまの子宮

とても綺麗…

こんなの
見たら私も

もう限界…

ほんとにはもう少し
我慢しなきゃ
いけなかったんですけど…

…やっぱり
もうダメ…

ああ…



んや...

あ...

びびり



んや...

ひよんな...

びびり

びびり



美...夜...ッ

びびり

うふふ
驚きましたか？



はあ
はあ

普通ここまで
魔に蝕まれたら
もうおしまい

私を救おうという
姉さまの思いは
無駄という事
ですものね

けどそもそも
それが間違い

私そのもの
なのですから

ク
ン
ン
ン



これは
その為の力

姉さまを
想い慕う



ガナめろ
美夜

目も
覚ませ

姉さまが私を
救うんじゃない

ク
ン
ン
ン

私が姉さまを
救うの

ク
ン
ン
ン
ク
ン
ン
ン

ああ
やっぱりまだ
キツ…い…

あんなに
柔らかかった
子宮口で
引っかかって
進まない…

でも…

んぶっ！





ああアツ
ああ...

繋がる...
繋がる...

姉さま

ひどい
なごころ



しゅん
しゅんおにい

おなかが
えぐれていくのが
しょんない
気持ちいいね

ああ姉さま

姉さまの
苦しみが
消えていくのが
わかるッ

うん

わかるわ
全部伝わって
くるッ

オーガの子種汁が姫騎士の子宮を狙う！

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説！

姫騎士 **ズン**

魔城の受胎散華

小説 **山本沙姫** 挿絵 **あべ阿部いのり**

ご注意

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~5の番号がふられているので、シーンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。

シーン1

それはまだ、人々を脅かす異形の怪物が大地を闊歩していた、遠い昔の出来事。

カキン！ カキン！ カキーンツ！
大理石造りの大広間に、固い金属同士が激しくぶつかりあう、甲高い衝撃音が鳴り響く。

ザシュツ！ グシュツ！
鋭い刃が肉を深く貫く、粘り気のある鈍い破壊音も。

「ぎやあああー！ーっ！」
さらに続けて、踏み潰されるカエルのうめき声に似た、重苦しい断末魔の叫びまでもが、立て続けに響き渡った。城の外まで飛び出しそうな勢いで。四方を森に囲まれた、小さいながらも肥沃な土地に恵まれる豊かな国、アルメディア王国。

その王城が今、おびただしい数のモンスターによって占拠されていた。予てから国土を荒らし、民に襲いかかり、時としてその命までも奪ってきた凶悪な魔物は、ついに徒党を組んで国土の支配に乗り出してきたのである。「まだ邪魔をする気か!? ならばその命、今日を限りになくなるものと思え！」

城を守っていた近衛兵団は壊滅し、もはや王国の運命は風前のともし火と思われた一大事のさなか、救世主があらわれる。

魔物の巣窟と化した城にたった一人で飛び込んだ、勇猛果敢な騎士が。

「それとも、すぐここから出ていくか!? 運がよければ、まだしばらくは生き延びられるかもしれんぞ！」

並み居る醜悪なケダモノへ飛ばされる怒号は、刃物の如く鋭い口調で敵の心を斬りつける。

しかし声質は、まるでカナリアの囀りのように可愛らしい。
なぜならば、手にした細身の剣を差し向け敵を威圧しているのは、身の丈一七〇センチに届くかどうかの可憐な少女なのだから。

「さあ、どうする!? 早く決めるがいい！」

純白の戦闘服を纏い、金色に輝く籠手と胸当てという最低限の装甲で身を固めた身軽な姿の騎士。

低めの鼻と、鋭角的に引き締まっただいながらも、わずかに柔らかそうな曲線を描く頬のラインが、勇ましい言動に不釣り合いなほど可愛らしい。

背中まで届く、長くしなやかな金髪を束ねる赤いリボンが、まるで羽根を広げて休む蝶のよう。

その優雅な姿がアクセントとなって、勇敢な騎士の中に潜むあどけなさを存分に引き立たせている。

だが、敵を睨みつけるサファイアブルーの瞳には、戦う者が持つにふさわしい気迫に満ち満ちていた。
(もう三〇匹は倒しているのに……こ

れじヤキリがない。早く、ここを突破しなくては……)

緩やかな曲線を描いて飛び出す双乳を覆う鎧は、動きの邪魔にならないよう身体のラインに合わせて作られている。

そのため装甲板越しにでも、やや上向きの美しい釣鐘型に張り出しているのが見て取れた。

サイズはかろうじて八〇センチに届くかどうかという程度だが、ほどよく引き締まったウエストのおかげで見た目は大きく感じられる。

だが、腰の細さは同時に逆さにしたハートマークを髻髻とさせる、左右に張り出した桃尻の艶めかしさも強調してしまふ。

大きすぎると、内心気にしている溜らかなでん部の姿を。

少女らしい初々しさと、大人の色香を併せ持った、力強さとはほど遠い体躯ながらも強大な魔物と渡り合う少女騎士。

名を、ユリン・アルメディアという。アルメディア王家の姫でありながら国で一、二を争う剣の達人。

そして、民を苦しめる怪物を倒すため、みずから進んで屈強な騎士たちを率いて最前線で戦う、すぐれた指揮官でもある。

「ぐううっ……」
激しい怒号と稲妻を髻髻とさせる鋭い眼光を浴びて、魔物たちはたじろぎ、凍りついたように動けなくなる。

ついさつきまで、容赦なく襲いかかっていたのがまるでウソのように。

(おじけづいているようね。このままおとなしく逃げてくれれば、少しは楽に先へ行けるだろうけど……)

だが、凶暴なモンスターを圧倒する勇ましさととは裏腹に、戦況は決して優位とはいえない。

なぜなら城へ戻る前に、北部の森で怪物の大軍勢と一戦交えていたのだから。
(あんな畏に、かからなければ……)

王城が乗っ取られたのは、彼女が率いる騎士団が、魔物の大軍団を討伐に出いたため、城を守る戦力が不足していたのが原因であった。

国中のモンスターを束ねるキングオークと呼ばれる策士は、わざと王国軍の偵察隊に目立つよう、大群を率いて城に迫る。

そして、迎撃に王国軍の主力騎士団が出たのを見計らい、軍団を二つに分けてみずから守りの薄くなった城を強襲したのであった。

(もつと、力が残っていればこんな連中片手ででも殲滅させられるのに……)

陽動作戦に引っかけかり、大勢の部下を失ったばかりか自身も万全とは言えない状態ながら、果敢に攻め込む姫騎士ユリン。

肉体的にも精神的にも苦しいのを表に出さず、ひたすら敵と睨みあう。両者動けないまま、重苦しい時間が

静かに刻々と過ぎ去っていく。

「……グッ、ガアアアアア……ッッッ！ もう我慢できねえ！ 食い殺してやるうっ！」

だが、痺れをきらせたケルベロスが一匹、鋭い牙を剥き出し、雄叫びを上げて白衣の姫騎士に飛びかかる。

「くっ……くらえええっ！ 仲間の仇いつ！」

静寂を壊されると同時に、両手で長い槍を握ったゴブリンが後に続いた。

「おっ、おっおおおしっ！ 俺も、俺もやってやるぜえっ！」

「そうよ！ 相手は小娘たった一人ビビるんじゃないわよおっ！」

すると彼らに釣られて、大広間を埋め尽くさんばかりに集まっていたモンスターが次々とユリンに襲いかかる。

手に二メートル近い長剣と盾を持ったスケルトン。

足の爪を伸ばし、天井から飛びかかるハーピー。

その他諸々の、種族の垣根を越えた絆で結ばれた怪物たちが徒党を組んで迫り来る。

（……あれを、やるしかないか……）

だが、この危機的な状況にあってもまだ、ユリンには一っだけ反撃の手段が残されていた。

「……そうか、ならば逝くがいい……」

冷めた視線を向けてそっと呟くと、彼女は手にしたレイピアを真横に構え、周囲を取り囲む怪物たちの輪が間近に迫るまで待つ。

ダダダダ……。

「ぐおりやああああ……」

「覚悟しろおっ！」

けたたましい足音を響かせ迫る軍勢が、すぐにでも掴みかかれそうなるころまで来た。

「ハアッ！」

ザッ！

その瞬間、ユリンはレイピアを伸ばしたまま左足を軸に、素早く一回転してみせる。

剣先で、大きな真円を描くように。シユンッ！

「ん？ な、なん……どうあつ！」

「かびびいいいっつっ！」

すると、微かな風切音が響くとともに、周囲を取り巻くモンスターが次々と、血飛沫を上げて引き千切られていく。

（なんとか……できたよう、ね……）
手練れの姫騎士の必殺剣技、真空円陣斬。

素早く振り回した剣先で真空の刃を作り、相手を触れずして切り裂くいわゆるかまいたちである。

王国軍の騎士の中でも数名しかできる者はいないと言われる大技であるが、彼女ほど使いこなせる者は他にいない。

連戦で体力が衰えていながらも、大広間を怪物の斬殺体で埋め尽くしたことが、その威力の凄さを無言で語っている。

「ふう……やっつと、終わったか……」

手荒く出迎えてくれた怪物たちをす

べて打ち倒すと、ユリンは深くため息をついて一歩前へ踏み出す。

ドカッ！

ドスッドスン……。

「ええーいっ！ どいつもこいつもだらしねえ！ やはりこは俺たちの出番だなあ〜」

「おうよ兄貴！ ここから先には行かせねえぞおっ！」

だが、彼女の行く手を遮るかのようになり、巨大なモンスターが二匹、地響きの如き足音を立ててあらわれた。

深緑色の肌を持つ、身の丈四メートルはある豚顔の怪物、オークである。

一匹は片手で棘だらけの太い金棒を担ぎ、もう一匹は、刃の分厚い斧を両手でしっかりと握っている。

「行かせない、ですって！」

再び訪れた危機に怯みもせず、ユリンは鞘に収めかけたレイピアを抜き、先端を目の前の兄弟モンスターに差し向ける。

弟の一言が逆鱗に触れたのだ。

「そつちが勝手に乗り込んできたくせにまるで自分の住み処みたいなこと言ってくれて……気に入らないわっ！」

眉間に皺を寄せた威圧的な表情で睨みつけると、勇敢な姫騎士は大理石の壁を震らすほどの大声で叫ぶ。

「うるせえっ！ ここはもうとつくに、俺たちの城なんだよおっ！」

勇敢な少女の罵声に怯むこともなく、大柄な体躯からは想像もつかない猛スピードで弟オークが突っ込んでくる。

「くらえいっ！」

ブオンッ！

そして目の前まで迫り、頭上に掲げた金棒を縦一文字に振り下ろした。

「ハアッ！」

だが、白衣の騎士は棘が前髪に触れる寸前でポニーテールを靡かせつつ、華麗なバックステップで攻撃を避ける。

重装甲と大きめの剣で身を固める一般的な騎士と違い、わずかな鎧とレイピアだけという身軽な姿だからこそ成し得る技だ。

ガギンッ！

「ぐっ！ し、しまった……」

かわされた必殺の一撃は固い床を打ちつけ、稲妻の如きひび割れを無数に刻み込む。

おまけに数本の棘が割れ目に食い込んでしまい、筋骨隆々としたオークの怪力をもつてもビックともしない。

「覚悟おっ！」

金棒が抜けず焦る怪物めがけ、着地の瞬間ブーツの踵で床を蹴る反動を利用して神速の騎士は一直線に飛びかかる。

「たあああつ！」

グジャッ！

目にも止まらぬ速さで飛び出したユリンは、手にした剣でオークの喉笛を刺し貫く。

「ぐぶううっ！ ばっ、ばか……」

……そんなこと、が……

その瞬間、巨獣は口から緑色の鮮血

を吐き、その場に崩れ落ちた。

「よつ、よくも弟をおおーっ！」
だが、巨大な敵を難なく打ち倒しても安堵する暇はない。

素早く背後に回り込んだ兄オークが鼻息を荒らげつつ、鈍く光る斧で斬りかかってくる。

「！」

素早く振り向き、迫り来る敵を鋭く睨みつけるものにした剣が抜けない。

「こ、これは……」

先端が後頭部から飛び出したレイピアは、刀身の半分近くまでが固い筋肉の中にめり込んでいた。

しかも、死後硬直で傷口が縮まり、いくら引いてもピクともしない。
「くっ……」

微かに震える柔らかな頬を、一滴の汗が流れ落ちる。

「死ねえええーっ！っつ！」
反撃の手段を持たぬ弟の仇めがけて、大きく見開いた目を血走らせ、鋭い牙を剥き出した豚顔の怪物が鋼鉄の斧を斜めに振り下ろす。

「やらせないっ！」
ガツ！

しかし彼女は咄嗟に剣を掴んだまま床を蹴って飛び上がり、続けて両足で硬直した死骸の両肩を蹴る。

その反動でレイピアを引き抜きつつ、高々と宙に舞い上がった。

「何いっ！」
戦闘服のスカートをためかせ、白

くスラリと伸びた脚をチラつかせながら天井スレスレまで飛び上がると、彼女は空中で身を振り、剣先を真下に向けて一直線に頭から落ちてくる。

「もらったあつ！」

カグジュウツ！

「がはっ！」

獲物の思わぬ行動に、呆然と天を見上げて立ち尽くすオークの額を、鋭い刃が刺し貫いた。

「ば、化け物か……お前……」

虫の息で吹きつつ倒れる怪物を無言で睨むと、ユリンはレイピアを額から引き抜く。

そしてヒュンヒュンと軽く振り回して刀身についた血を払い、腰に下げた鞘に収めた。

「……行かなくちゃ……」
動くものいなくなつた大広間に、

水を打つたような静寂が広がると、ユリンは解けかかったリボンをキュッと締め直す。

「アルフォンスお兄さまを、お助けに……」
そして乱れた前髪を指先で整えながら、そつと呟いた。

そもそも、乗っ取られた城を奪い返す場合には、戦える兵を集め戦力を整えてから攻め込むのが常識。

無論、騎士団を率いる指揮官である彼女にも十分わかっているが、単身乗り込んだのはわけがあった。

彼女の両親、すなわち国王と妃を脱

出させるために、囮となつた兄、アルフォンス・アルメディアが囚われの身となつているのである。

陽動戦で傷ついた部下たちが、復帰できるのを待つ時間はない。

「なんとしても、助けなきゃ……」
不意に頭の中を、幼き日の光景がよぎる。

未だに肌身離さずつけているリボンを、兄から贈られた時のことが。

「お兄ちゃま〜似合う？ ねえ、似合う〜？」

「うん、よく似合ってる。可愛いよ、ユリン……」

麗らかな日差しが降り注ぐ広い庭で、まだよちよち歩きの幼子だつた自分を抱き抱えて微笑みかけてくれたのは、親子と見まがうほど歳のはなれた青年である兄。

物心ついた時からいつも傍にいて、優しくしてくれる彼が、彼女にとつてこの世で最も愛おしい存在であつた。

「わーい。じゃあね、お兄ちゃま。ユリンこのリボン、ずーっ！っつと、つけてるからね〜」

可愛いと褒められた嬉しさのあまり、思わず彼の首筋に手を回し、頬に初めての口づけをしたのは、忘れえぬ大切な思い出。

「……お兄さま、今、助けに参ります。どうか……無事でいてください……」
真紅のリボンを軽く撫でて、勇敢な

姫騎士はそつと呟いた。

（さて、ここから先は……）

たった一人で乗り込んできた以上、あちこちを探し回っている余裕はない。

（人質を囚えておくのには、脱出困難な地下牢が一番適しているはずだ……）

だが、何も考えず突っ込んできたわけでもなかった。

一騎士団を任せられる指揮官だけに、人質を取って籠城する敵の行動パターンぐらいはちゃんと把握している。

（万が一、攻め込まれた時に備えていたら、盾にするために手元に置いておくかもしれない……）

ゆつくりと大広間の出口へ向かいつつ、様々な状況を想定してユリンは兄の居場所を推理する。

（キングオークがお兄さまと一緒にいるなら、おそらく王の間ね。今頃あそこで、支配者気取りでふんぞり返っているに違いない……）

状況を分析し、二つの結論を導き出した姫騎士ユリン。

果たして彼女の行くべき道は――。

◆地下牢へ向かう↓シーン2へ
◆王の間に向かう↓シーン3へ

シーン 2

(……やけに静かね。警備に何匹かいると思っただけ……)

兄の居場所を地下牢だと推測したユリンは、石造りの長い階段をレイピア片手に注意深く降りていく。

少し蒸し暑い地下室には、壁際に並んだ燭台にぼんやりと灯るロウソク以外に明かりはなく、視界が今一つはつきりとしなない。

(わたしが侵入したのを知って、全員で探し回っているのかも……)

だが彼女ほどの手練れの騎士ともなれば、目や耳以外にも頼れるものがある。

敵が出す殺気を肌で感じ取り、視界にいない相手でも、居場所を察知できるのだ。

(このまま、敵に見つからずお兄さまを探し出せばいいけど……)

幅三メートルほどの石畳を敷き詰めた薄暗い通路の左右に、ズラリと並ぶ鉄格子の部屋。

本来は罪人や、他国と戦争になった時の捕虜を一時的に収容するための場所である。

害獣扱いのため、戦場で確実に抹殺することになっているモンスターが、ここへ収監されることはない。

(でも……いったい、どの檻に……)

わずかな明かりしかない牢獄の中を一つ一つ確認しながら、ユリンは前へ前へと進んでいく。

ここ数日、収監された者はいないと聞いていたため、もしアルフォンスが囚われているならすぐにわかるはず。

「! あ、あれは……」

すると二〇メートルほど先に、一つだけ鉄格子の扉が開いている監獄があるのに気づいた。

「まさか! あそこに……」

カッカッカッカッ!

思わず上擦つた声で叫ぶと、ユリンはブーツの踵で石畳を蹴る固い足音を響かせて一目散に駆け出す。

「お兄さま! 〇〇無事です……か……」

だが、目指す牢屋にたどり着いた彼女は、身の毛もよだつ光景を目の当たりにしてしまう。

中には誰もおらず、壁一面が赤黒く染め上げられていた。

明らかに、人間の血で。

(捕虜も、罪人もいなかったはずなのに……いったい、誰が……)

怪物が人を襲うのは、大半が食料とするため。

そして、死体はおろか肉の欠片すら残っていない部屋の壁が、血飛沫で塗り固められている。

導き出される答えは一つしかない。

誰かがここで、魔物の餌食になったのだ、と。

「くっ……」

嫌な予感が脳裏を駆け抜け、端正な顔がサッと青ざめると、貧血をおこしたようにフラフラとおぼつかない足取りで後ずさる。

「い、いや……あのキングオークという奴は、我が騎士団を畏にかけけるほどの策士……」

か細い肩を震わせながら、ユリンは最悪の状況になっていない理由を必死に探し、気を落ち着かせようとする。

「となれば、一国の王子を人質にする価値があるのはわかってはいるはず……」

ピチャッ……。

「ん!!」

ところがその時、今度は柔らかな頬に一滴の生暖かい粘液が垂れ落ちた。

(雨漏り? いや、こんな深いところまで水が染み込むなんてことは……) 片手で頬の滴を払いつつ、彼女は何気なく天を仰ぐ。

ピジュルルルル!

すると突然、天井から五センチほどの太さの赤紫色をした、ミミズに似た長い軟体が大量に降ってきた。

「なっ、何! これは……」

避ける暇もなく柔肉の群れに搦め捕られた姫騎士は、操り人形のように高々と吊り下げられてしまう。

「くっ!!」

顔を歪め、全身を揺らして纏わりつく軟体を振り払おうとしても、相手はピクともしない。

「殺気が……まるで感じられなかったのに、いったい何が潜んでいたの!!!」

「ケケケケ、残念だったなあ。俺は他の連中と違って、獲物が間近に来るま

で寝てるんでな! 殺気なんて出るわけねえんだゲロ〜」

薄暗い天井から、からかうような口調の不気味な野太い笑い声が響く。

「誰だっ!!」

見上げて目を凝らすと、真っ赤に光る巨大な目と視線が合う。

そこには背中から無数の触手を伸ばした、巨大なヒキガエル型の怪物が貼りついてた。

「だーからー、人間にはまーず見つけられねえってワケ。ゲへへへへへ〜」(カエル? 見たことのない奴だわ……)

思わぬ奇襲を受け、顔を引きつらせる美貌の騎士を嘲笑うのは、ワームフロッグと呼ばれる粘液体質の怪物。

他のモンスターと同じく人間を襲う習性はあるものの、不思議と戦場で見かけることはめったにない。

そのため姿を見た者は少なく、生体は謎に包まれていた。

「ね、寝ていた、だど……そんなふざけた……」

ジュッ!

頭上の敵を睨みつけた瞬間、胸当てから焦げ臭い臭いととも、白い湯気がゆらゆらと立ち込める。

「あうっ! なっ、何……」

胸元に打ち身に似た痛みを感じて目を向ければ、身につけた鎧が高熱を放って溶けはじめていた。

「そ、そんな……この粘液のせい?」

に、触手を伝って全身に流れ落ちる怪物の体液は、身につけたものを次々に溶かしていく。

「ビチャッ、ブチャッ……」

「ひいっ！ こつ、このおっ！」

戦闘服のスカートが無残に溶け破れ、剥き出しになった白い脚をバタつかせて、懸命に触手の束を振り払おうと目がく。

「ペチュッ！」

「きゃあっ！」

するとムチムチと張りのある太腿に、腫えた腐臭を放つ粘液を纏う触手が直に巻きついた。

だが、金属を溶かすほどの酸性でありながら、一瞬熱いと感ずるものの柔肌に火傷の跡はない。

ただ白い珠の肌が、ほんのりと赤く染まるだけ。

「心配するなゲロ。このすーべすべした肌までは溶かさねえからよお」

厭らしく細めた目つきで見下ろしながら、下品に笑うカエルの化け物はユリンの戦闘服に開いた穴の中へ、次々と軟体を送り込んでくる。

シュッ、シュッ、又チュッ……

「うっ！」

ピクピクと脈打つ粘り気のある物体が、粘液の熱と恥ずかしさでほんのりと薄桜色に染まる凜々しい姫騎士の柔肌の上を這いまわる。

柔らかなでん部が、引き締まったウエストが、切れ上がった内股が、醜悪な触手に蹂躪されていく。

「そう、敵に氣を使ってくるとはなかなか紳士的ね、怪物のくせに……」

皮肉まじりの口調で言い放ちつつ、ユリンはわずかに動かせる手首を器用に捻る。

掴んでいるレイピアを、我が身に絡みつく軟体に突き立てようとしていた。

「ゲーローロ、そうはさせんよー」

しかし、真上から行動を見通していたワームフロッグに死角はない。素早く四本の触手を伸ばす。

「あうっ！」

「あうっ！」

「あうっ！」

手首と足首にきつく巻きついた赤紫色の醜悪な物体が、柔らかな肉体を引き裂かんばかりに大の字に広げる。

「しまった！」

いきなり手足の自由を奪われたユリンは、焦りのあまりレイピアを手放す。

「ウー……」

床に落ちた愛剣が、甲高い衝撃音を虚しく響かせ、追い打ちをかけるように床に溜まった粘液で跡形もなく溶けた。

「くっ！ このまま……邪魔な鎧と服だけ溶かして丸飲みにもする気か！」

武器を奪われたあげく、徐々に肌を晒しはじめの危機的状況にあつてなお、ユリンは強気な態度を崩さない。

「反撃の隙がないか探りつつ、頭上の敵を激しく怒鳴りつける。」

「おっと、勘違いしてもらっちゃ困る。俺たちワームフロッグは人間を食うような、野蛮なモンスターじゃねえゲロ」

妙に威張り腐った態度で言い放つと、カエルの化け物は他とはやや違う形の触手を、股の間に滑り込ませてきた。

「あぐらっ！ なっ、何！」

先端に縦一文字の割れ目が走り、大きくエラの張ったその形には見覚えがある。

いつか嫁ぐ日のために、夫婦の営みを勉強させられる時に読む書物に描かれた、興奮状態の男性器そのもの。

「まっ、まさか……こいつ……」

咄嗟に太腿を開きそうとするものの、足首に絡まる軟体が引つ張る力はあまりに強く、膝を曲げることすらままならない。

「シユッ、プシユッ！」

しかもスカートが溶け、剥き出しになった下腹部にまで怪物の体液が流れ落ちてきた。

「そ、そんな……」

姫騎士の最も神聖な部位を覆う最後の砦、薄手のシルクのショーツが白い湯気上げて溶けていく。

「さーて、そろそろ邪魔なモンもなくなるし、はじめるとするゲロ」

ペロリと禍々しく舌なめずりをする

と、ワームフロッグはすでに糸くず同然の姿にまで溶けてポロポロになった

下着で微かに隠された乙女の丘へ、肉棒の先端を押しつける。

「ピシユッ！」

「かはあっ！」

薄く黄金色の若芝で覆われた乙女のクレヴァスから産道の奥底まで、肉壁を震わせてジンワリとした熱さが駆け抜けた。

「まさか……きさまあつ！ バケモノのくせに、にっ、人間の……女に……」

女性体の最も敏感な部位を責められ、思わず仰け反るユリンは、あいかわらず厭らしい目つきで見下ろす魔物を睨みつけて激しく罵倒する。

「ぐへへ、察しがいいなあ。ハアッ、その通りだ、ハアッ、ゲロッ！」

興奮気味の荒い口調で答えると、ワームフロッグは少女の秘園に貼りつけた亀頭の先端を押し出す。

「グリッ！ グリグリリリリッ！」

「ひっ！ ひぎいひぎいっ！」

股の間から脳天へ向けて、身を裂かれるかと思うほどの激痛が突き抜けた。

「（こ、こんな奴に……取られるなんて……）」

脈打つ醜肉の捻じ込まれた女唇から滴り落ちる、真っ赤な処女の証を目の当たりにして、さすがに気丈な姫騎士も心が砕ける思いがした。

いつの日か出会うはずの、できれば愛しい兄に似た伴侶に捧げるはずだった乙女の宝は、もう股間の花園にはない。

「グジャッグジュッグジュッ……」

「ゲロオ、んっんっ！ まっ、まっ、まっ……んっ、おめえの腹に、たっ、卵

を産みつけて、やる、ぜえっ！」

挫ける哀れな姫騎士を気にも留めず、ワームフロッグはドスの利いたガラガラ声で粘つく呼びかけてくる。

極太の男根で未熟な肉のトンネルを押し広げ、左右に揺さぶると、汗と粘液にまみれたなだらかな下腹部が、棒状にポッコリと膨らんだ。

「たっ、卵……だっ！」

「驚いたゲロ？ 俺たちワームフロッグはなあ、おめえら人間と違って、オスとメスの区別つてのがねえのさ」

「そっ、それが……くっ、それがどうした！」

大粒の涙を飛ばし、長い金髪を振り乱しながらユリンは金切り声を上げる。「だからよお、仲間を増やすにはまず、人間のメスの腹に卵を産みつけなきゃならねえのさ。ケロロロ」

「さ……産卵？ わたしの中にっ！」

「ブグリュッ……」

カエル型の怪物が嬉々として繁殖方法を語ったその時、下腹部の奥底に何かが産みつけられる感触が走る。

子宮壁に当たる感触から、ウズラの卵状の物体。

（これが……ワームフロッグの卵……）

異形の生き物の卵を胎内に植えつけられたのを実感して、火照って朱に染まる肉体に悪寒が走った。

「おめえには、こいつを解してもらうぜ。借り腹ってやつだゲロ」

勇敢な姫騎士が絶望していく様子を

楽しむように、雌雄同体の怪物は、次々に囚えた獲物の胎内へ卵を産みつける。

ゴポツゴポツゴポツ……

「あっ、あうっ！ あああっ！」

子宮の中を埋め尽くす勢いで産み落とされる卵は、子宮壁はおろか腹膜まで押し広げ、みるみるうちに下腹部が膨らんでいく。

ガブウッ！

「かはあっ！」

我が身の変わりように戸惑うユリンに、さらなる追い打ちがかけられる。

先端を開いた触手が二本、固く起立した紅色の乳首を啜え込んだ。

「なっ、何を……あうんっ！」

グリユッグニユッグニッ……

小さな肉粒を飲み込む触手の動きは、まるで母の乳を吸う赤子のよう。

唇に似た触手の先端を強く締め、割れ目の縁に並んだ歯で根元を軽く擦る。

ピシユユユュー……

「ああっ！ なっ、何か出てる……わたし、胸から……」

「俺たちはなあ、子種を作るのにおめえら人間の母乳を飲まなきゃならんのだゲロ。こんな風にねえ」

乳首の先から、何やら液体が噴出するのを感じ取って混乱するユリンをよそに、ワームフロッグは触手を捻り、

啜え込んだ紅色の肉粒を揉み抜く。

「ぼ、母乳!? そんなもの出るはずがないっ！」

「人間のメスはなあ、俺たちの卵を宿したらすぐに母乳を出せるように胸

が発達するんだよお。よく見てみるゲロ」

「胸……あっ、ああっ！」

言われて胸元に目を落としたユリンは、すっかり溶け落ちた胸アーマーから飛び出した乳房の形が、明らかに変わっているのに愕然となった。

一目で普段の倍近くまで膨らんだ双曲は、まるで熟れたメロンのよう。

「さて、さつき孕ませた逃げ遅れた侍女どもは無理だったけど、お前ならもつと産ませても大丈夫そうだなあ」

妙に弾んだ口調で告げると、カエルの魔物はただでさえきつい腔口へ、二本目の触手を捻じ込んでくる。

グリユッググリユッグリリリッ……

「かはあっ！ こんな無理……」

「苦しいケロ？ なーに、すぐ楽になる」意味深な言葉を投げかけながら、二本の肉棒から次々と卵を産み落とす。

ポッコポッコポッココッツツツ！

「うっ、うあっ……何この、感じ……」

みるみるうちに、臨月を迎えた妊婦なみに膨らんでいくお腹の中で、卵同士がぶつかりあう音が鳴り響く。

するとそれは、強烈な膨満感とともに自分でも理解しがたい妙な感覚を生み出していった。

「あひいっ！ お、お腹が……へんになりそう……あうんっ！」

滑らかな卵の表面が子宮の内壁を擦り、優しく撫でられているかと思いきや、うな心地いむず痒さを胎内に広げていく。

グッチャグッチャグッチャ……

「やあっ！ そ、そこ……かき回すの……だめえっ！」

さらに、股間の敏感な肉髪を擦りながら蠢く触手からも、身も心も溶けそうな熱い刺激が湧き上がる。

（わたし……どうしてこんなのに……）

「さて、子種もできたようだしそろそろ仕上げといくか。ゲロロロ」

己が肉体の変化に戸惑うユリンを尻目に、ワームフロッグは二本目の触手を、秘肉のクレヴァスへ滑り込ませた。

ズリユッ！

「ひいっ！ あっ、熱い……」

三本の触手が絡まりそうなほどの勢いで乙女の肉壺の中を掻き、強烈な摩擦熱を発しつつ絶頂の瞬間を迎える。

「あっ、ああっ！ もっ、もうっただだめえええ……」

ドビュルルッ！ ドクドクドク……

（あ、わたし……産んじやうんだ……カエルの子を……）

下腹部の奥底に、スペルマが放つジンワリとした熱さを感じつつ、ユリンは意識が遠のいていく。

やがてくる出産の時、胎内をどんな刺激が駆け巡るのかを想像しながら。

BADEND



超お久しぶりです



後悔先にたたず



イレーネ
勇者のお供をする女戦士
勇者の幼馴染み。



でも絶対クリアできるって
いうから
来てみたけど……

もやもや

謎の洞窟のお宝レベル50……
かなりボスが高いとかで
クリアもできにくいとか
アイツ言っていたけど……



勇者
イレーネに振り回される少年。
あまり役に立たない勇者。



なんか道中
どっかのオッサンが……

この村の北奥にある洞窟には
恐ろしい怪物があると
昔から言われておると
倒しに行った戦士たちはみんな
帰ってこなかった……

回復アイテム0



やっとここまで
来たわ……

ボスまであと
100m!!



ズルズル……

ここまで来る間
ザコ倒すのに回復ゼロで
死ぬかと思ったわ……

ついうっかり
コイツ殺しちゃったから



すごい!
このクエストクリアしたら
レアお宝ゲットだよ!!

あーっ!
いっしょ!

でもなんか
相当クリア
難しいって……

ようし!
攻略よ!!



しかし
なんだろう……

この違和感……



もう少しちゃんと
アイツの話
聞いとけばよかったわ……



やけに丁寧な順路ね
……

1m
間隔……
あと5m!!

ツンツン女剣士は 淫乱触手にエロ め

小説 / ナルカク
NOVEL

挿絵 / ていやなか
ILLUSTRATION

ツンツン女剣士のハートとムッチリボディを
淫乱触手が搦め捕り、デレ蕩けさせていく!!

夕暮れが終わり、夜を迎えようとす
る薄暗い森の中の一木道。そこを通る
一台の馬車があった。

他に通行人の居ない道を行く馬車の
前に、突如飛び出してくる一人の影。

「うおッ！ バカ野郎危ねえだろ！」

居眠り気味の女商人は慌てて馬の手
綱を引く。商品を輸送中の馬車を急停
止させ、前方を睨み付けた。

そこには木の陰から飛び出してきた
汚いローブを着た二十代手前の少年ラ
ルが両手を広げて道を塞いでいる。

「突然すまない。ちよつと食料を買い
たいんだ……金ならある」

ラルは顔を隠しながらローブの裾か
ら手を出し、コインを数枚見せた。

「だったら街に行け！ 森の中で商売
なんて出来るか阿呆うが！」

森に潜む夜行性の怪物を警戒してい
るのか、商人は相手にしてくれない。

異常繁殖し続ける怪物の恐ろしさは
誰もが知っているし、夜の森は特に危
険なのだが、街に行けない理由がここ
らにはあった。

「そうか……でも今買いたいんだ」

少年はどうしても商品を手に入れた
かった為、最後の手段であるソレを齎
かせ、腕に這わせてローブから出す。

「!! な、お、お前まさか……ッ」

女は真つ青な顔で驚愕する。

そう、ラルは触手人間だったのだ。

腕に絡む無数の触手は一本いっぽんが
赤、紫、桃色で彩られて蛇の様にうね
り、どんどん伸びていく。

ミミズを太くした外見で表面がつる
つとしていて、擦れ合う度にしゅるし
ゅると妖しく音を出す。

「見ての通り、街に行けない体なんだ。
大丈夫だ何もしない、だから——」

「お、犯されるうらうッ！」

落ち着いてくれと言う前に、女商人
は悲鳴を上げて馬と荷台を急いで切り
離すと、瞬く間に逃げ去っていく。

（だから、別にエロい事なんてしねえ
って言おうとしたのに……）

少年はある事が原因で数日前から胸
に触手が寄生し、触手人間になってし
まい今は森で生活している。

時々道の馬車と物資の交渉もするの
だが、触手で脅したのは初めてだ。他
にいい方法は無かったかと考えつつ、

「えつと食べ物は……あつたあつた」

残された荷台の中身を確認すると、
ほぼ食料や生活物資で一杯だった。

全部あれば一ヶ月は生活出来る量だが、
自由に動かせる触手を伸ばし果実や必
要な物を数個取ると、代わりにコイン
を置いて代金を払う。

化物物になった今でも人間の心をち
やんと有している以上、身勝手な行い
は慎まないとけない。

「と、このままにしておけないよな」
一晩が過ぎた頃には、荷台は森の怪
物に荒らされているだろう。どうしよ
うかと普段使わない頭で悩む。

「馬車を襲うなんて、随分ねラル」

その時背後から高くて、清たい笛
の音色の様な美声がした。振り返り姿

を確認すれば、思わず息を呑む。
吊り目勝ちで強い意志を感じる赤い
瞳。砂金の様な黄金色のロングヘア。

大きく膨らんだ柔らかそうな豊乳は
布服でピッチリと覆われ、更にな上から
胸当てで締め付けられて窮屈そう。

無駄な肉が一切付いていない括れた
細い腰。そして腹の筋肉は少し鍛えら
れていて、緩やかに膨らんでいる。

ミニスカートを張る肉々しい尻、更
に太股はニーソでびちつと締め付けら
れてより柔感に富んでいた。

足を保護する防具や、腰に携えた剣
など全体的に黒調で、赤み掛かった肌
を艶やかに強調させている。

少年は目の前に立つ、二十代に差し
掛かった程の美し過ぎる女剣士に無意
識の内に見惚れてしまう。

「この半怪物ッ！ アンタはホントに
面倒ばっかり起こすわね！」

だが芯の強そうな少女は怒鳴り、吊
り目勝ちな瞳を更に吊り上げ、首を回
して髪を振り整えた。

絶世の美少女が顔馴染みの剣士、エ
レアだと解り、ラルは胸の高鳴りを抑
える。彼女とは昔、ギルドで一緒に依
頼を遂行していた同い年の仲間だ。

ギルドとは、怪物退治や怪物に関連
する任務を傭兵に依頼する組織で、依
頼の代わりに報酬を出している。

ラルもそこで働き、エレアともギル
ドで知り合った。

「別にわざとじゃねえよ……つてお前
こそ、なんでここに居るんだ？」

首を傾げ尋ねる。今まで生活してい
る物求めて馬車と交渉する度に強情剣
士と出会う事が何度もあった。

いつもギルドの依頼を受けていたと
言っているが、毎回唐突に現れてはビ
ックリさせられる。

「そ、それは……ギルドの依頼の関
係で、偶然通り掛かっただけよ！」

黄金髪の少女はお馴染みの理由を口
にし、急に目を丸くして動揺する。

「以前も物陰に隠れていた雰囲気だっ
たが、今回は木の陰にでも隠れていた
のだろうか？」

一体何の依頼だと聞こうとしたが、
「そ、それより早く、その気持ち悪い
触手仕舞いなさいよ下変態！」

質問の暇も与えてくれない。そして
言われて気付いたが、自分でも知らな
い内に無数の触手をエレアに伸ばそう
としていた。

「あ、アタシが触手嫌いな知ってて、
わざとしてるでしょアンタ!!」

後ずさる度に胸当ての下で柔軟に揺
れる胸や、舞うスカートの中が見えそ
うで童貞男の胸が高鳴る。

（女の……エレアの、体を——）
己の意思とは関係無く、耳元で囁か
れる感覚で別の思考が巡る。

これが初めてでは無い。先程の女商
人の時もそうだったが、今は更に強烈
な欲望が煮え滾り始めていた。

触手に寄生されてから、頻繁に昂る
性欲に悩まされてしまう。

「ん？ おお悪いな。それじゃ、お前

のアソコにでも仕舞おうかな？」

昔から触手嫌いだっただ少女にいやらしく囁きながら肉鞭を伸ばし続けた。

「ッ……あ、アンタみたいなど等怪物なんて、アタシの剣で返り討ちよ！」

強く反発して言うもののエレアは腰の武器を抜こうとせず、顔を赤く染めて両手を胸の前で組みソッポを向く。

「なーんてな、誰も襲わねえよ」

もう少しで美味しそうな体に淫紐が届く所で、笑いながら引つ込める。

人間として感情が残っているのが不幸中の幸い。牡欲を抑制している為、彼女や他の女性も襲う意思は無い。

それに自分が冗談好きなのは赤眼の剣士も知っているので、下品な下ネタでも真に受ける事は有り得ない。

「ッ……………」

顔馴染みの少女は横目でこちらを窺いつつ、少し不満そうな顔をした。

「じゃ、オレはこの辺で」

だが手に入れた果実をかじりながら去ろうとする触手少年は気付かない。

「ちよつと待ちなさいラル！」

まだ何か言いたいのかと振り返ると、包み袋を強引に差し出してきた。

一体何だと首を傾げると、彼女は口をもごもごと開閉させ言い淀む。

「ま、また馬車を襲われたら、ギルドの依頼も増えるし、色々と迷惑だから特別にアタシが恵んであげるわ」

視線を泳がせながらも、緊張した雰囲気で上目遣いな顔を向けられる。鉢合わせになる度に怪物のラルを討

伐するでもなく、昔のよしみで逃がしてくれていたが、差し入れは今回が初めてで動揺した。

（な、なんだよおい。素直になつて）

ツンツン娘が見せたちよつとぶり素直な態度で胸が強く脈打つ。それは未だ童貞男としての高鳴りだけでなく、怪物の欲望が鼓動した音でもあった。

「そ、そうか、悪いな。それじゃ」

このまま一緒にいては我慢出来ずに襲つてしまおうで、伸ばした触手で包みを受け取り、急ぎ足で逃げる様に木の茂みに足を進める。

「あ……！ も、もつとちゃんとお礼言いなさいよッ」

エレアは一瞬寂しそうな顔を向けていたが、森の木々に消えるラルの背中

は知る由も無い。

「今日も謝れなかつたなあ……。う、うらん明日、明日こそはッ」

残された剣士は気を取り直し馬車の荷台の対処に悩むが、中に何やら紙束らしき物を見つけ、手に取った。

「……!!!」

それは大量のギルドの手配書だった。触手人間が森の小屋に住み、大金を掛けられ討伐対象になっていた。

「あー……やべ」

森の奥深くにある古びた捨て小屋。割れた窓からの月明かりとランタン

の光が灯る暗い部屋に戻ったラルは、埃っぽい床に倒れて呻いた。

別にエレアから貰った味の濃いオム

レツに苦しんでいる訳では無い。（やつぱエレアを見ると、犯したくて……やりたくて堪らない！）

信じられない考えが頭に浮かぶ。女剣士を見て、恐ろしい位に怪物の種付け欲求に染まっていた。

彼女に思いを寄せてはいるが、自分と釣り合わないという切り、隠していた事が原因なのだろうか。

「し、仕方ない……」

ラルはローブを脱ぎ、下着も着けて無い己の裸を見た。触つてもいいのにペニス

が最大まで硬直し、慰めを欲してビクビクと脈動している。

そして胸元には禍々しい寄生触手胸から背中にかけて突き抜けた肉鞭の塊は心臓の鼓動の如く脈打つ。

止めようの無い疼きの中、まず淫紐から自慰を始めようかと思つた瞬間、

「キヤアア！」

小屋の外から悲鳴がした。一瞬自分の姿を見られたかと思つたが、どうやら違う。

「今のは……まさか！」

体の興奮が一気に冷め切り、脱ぎ捨てたローブを被ると外に出た。声が出た場所を目指し森中を一目散に走る。

「ぎえへへえ、やつとツカまえた」

怪物と思われる濁った声を頼りに足を進めると、比較的木々の茂りが薄い場所

に影を見つけ、そこを凝視する。木の隙間から吹き抜けた月明かりが降り注ぎ、照らされる一人と四体。

「くうッこ、このお！」

悔しそうな声を漏らし、地面にうつ伏せで倒れているのはエレア。そしてその背中を太い腕で押さえ付ける、巨大な猿に似た毛深い怪物。

彼女の唯一の武器である剣は遠くの地面に転がり落ちていた。

「はあ、はあ、おいハヤクシロ」

「サキにシちまうぞッ」

そして女剣士と一匹を取り囲む猿系怪物も、両手両足を地面につけ、交尾欲塗れで激しく吼えている。

「それじゃあサツソク……」

「べろお。」

「ひいッ！」

脅える少女はのし掛かる大猿に長い舌で頬を一舐めされ気持ち悪そうに顔を歪めて激しく身を揺する。

だが化け物は胸当てを背中越しに碎くんじやないかと思う程強く押さえ付けている為、地面に体を擦るだけで逃げられない様だ。

「キヒ、ヒサしぶりのメスだぜえ」

身動きが取れないのを良い事に、怪物は美しい肌を次々舐めていく。

「んうッあ、こ、この下等生物！」

猿の唾液で肌が濡れる度にビクビクと震える中、強気な剣士は赤い目をキツと尖らせ強い意志を見せ付ける。

「それじゃあオレにタネツケされるおマエもイッショだなあ」

だが怪物は汚声で笑い、毛深い股間部分を隆起させると、中から真っ赤に充血した反り返る一物が顔を出した。

「ッ！ くうッ」

不清潔に汚れ、薪の如く太くて長い汚肉を目の当たりにし、顔を青ざめさせたエレアはより激しく身を揺する。「キヒヒイそうそう、イヤがるホウがタネツケのヤリガイがあ——」

「ッ……？」
怪物が突如言葉を止めた為、絶望の剣士はゆつくりと振り返る。すると先程まで犯すと豪語していた猿怪物が、頭を吹き飛ばされ絶命していた。

「大丈夫か、エレア！」
首を仕留めた触手剣を再び構え直しながら叫び、その場に飛び出すラル。

「あ……ラル！」
彼女から名前を呼ばれる間も、少年は残り三体の怪物を鋭利に研ぎ澄ました触手刃で切り裂き倒していく。

これでもギルドで腕前を認められた元傭兵。変幻自在の触手を使える今、この森に敵は居ない。

全ての怪物を倒し終えて触手を仕舞い、少女の上に倒れた怪物をどけて抱き起こす。

「つたく何でこんな夜中に……森は危険だつて何度も——」

散々ギルド時代にした注意をもう一度口にしようとしたが、
「ラル……ひッラルうッ！」

怪物の唾液と土で汚れたエレアが今まで見た事の無い号泣をしつつ、胸に顔を埋めてきた為叱るのを止める。

「そっか、ギルドでオレがねえ」
小屋に戻った少年は、彼女が危険を

承知で森に入った理由を知る。
ランタンを挟んで向かいに座る沈んだ剣士は布拭きで肌を拭いていた。

「……うん」
「まあ仕様が無いさ、いつかこうなると覚悟はしていたし」

「……うん」
普段から聞く声と違い、全く力の無い相槌。怪物に襲われた恐怖は直ぐに拭い切れない様だ。

「アタシつて、ホントバカよね。弱い癖に、一人で森になんか入つて」
薄暗い小屋の中に、悲しい声が吸い込まれる。強気娘が今までに自虐をした事は無く、掛ける言葉に迷う。

「そもそもアタシがあの時ハマしなれば、アンタもこんな事には……」
唇を噛み締め、膝の上で布拭きを握り、過去の過ちを悔い始めた。

（やっぱりに気になっているのか……）
昔、初めてエレアと会ったのは、ラルがギルドで剣の腕前を認められ、若くして信用率トップになった時の事。

初めてなのに危険な任務をさせると言う新米の彼女が居た。ギルドの誰からも相手にされなくても突っ張る姿に引かれて声を掛け、それから一緒に行動する様に。

（気の強いエレアが好きだったな）
少女の戦いにはまだまだ隙があったが負けず嫌いで、訓練や依頼に励んで剣士として確実に成長し続けた。

そして力試しとして、二人で未確認の怪物の調査という依頼を受けたのだが、

大丈夫だと思っていたその依頼で事件は起こる。
（ヤツを思い出してもゾツとする）

相手は触手怪物で、目視だけでもかなり危険な相手と判断し、詳しい調査は諦めたが見つかってしまった。

戦う以外道は無く、必死に抵抗し何とか怪物に致命傷を負わせる事に成功したがエレアが隙を突かれ、絶命寸前の怪物に襲われそうに。

咄嗟に我が身を犠牲にして庇ったが、触手怪物は最後の足掻きとして少年の心臓を貫き、胸に寄生した。

体を支配する目的だった様だが元々虫の息故に支配力も弱く、時々頭が性欲塗れになる程度。結果として心臓代わりの触手塊で命拾いした事になる。

（でも、怪物になった自分は、もう人間の暮らしに戻れなくなつた）
人々から恐れられて命を狙われる触手人間になつてしまひ、それから森の小屋に住み着き、必要な物を日々手に入れる生活をしている。

「アタシのせいよ全部……アタシの」
目をキツク閉じ、震えて今にも泣き出しそうな女剣士。

「弱音吐いてんじやねえよ。代わりに触手ザーメン吐くまで飲ませるぞ」
重い空気の中、場違いな下ネタを口にしてげへへと笑う。

「弱音はつかのエレアなんて、オレの知ってるエレアと違うぜ」
一緒にギルドで活動していたのも、彼女の弱音を吐かない所に引かれたか

らだ。それに己の意識がある中生きているのだから、何も咎める事は無い。

自分の一番の長所でもある前向きな部分は、こういう時に役に立つ。
「……ラル」

潤む瞳で見詰めていた少女も、垂れさせた目をキリッと戻す。
「ら、ラルの癖に……変態触手人間の癖に生意気よッ」
頬を少し赤くして上からの物言いで汚れた布拭きをぶつけられる。

（お前が無事なら、それでいいよ）
まるで恋人みたいな発言だなど飲み込み、大した怪我也無く無事だった片思いの相手に微笑む。

「ギルドの連中も直ぐには来ないだろう……今日はもう遅いし、ここに泊まれよ。よッと」
体に力を込め、ローブに包まれた胸の触手からおびただしい数の淫鞭をビュバツと伸ばす。

その姿にエレアは肩を竦ませて顔を真っ赤にし、視線を逸らしながらあたふたと動揺し始めた。

「あッ、い、今!! え、えっち——」
「それじゃ、お休み」
だが伸ばした触手で己をぐるぐる巻きにし、直ぐ床にごろんと寝そべる。

「……アンタ何それ」
何を誤解したのか、不満そうな声と視線を背中浴びて振り返つた。

「ん？ ああこの森は夜冷えるからな……はい、お前にはこれ」
そして先程まで着ていたきつたない

らだ。それに己の意識がある中生きているのだから、何も咎める事は無い。

自分の一番の長所でもある前向きな部分は、こういう時に役に立つ。

「……ラル」
潤む瞳で見詰めていた少女も、垂れさせた目をキリッと戻す。

ロープを触手で吊り下げて渡す。

「アタシにそんな汚いの着て寝ろって言うの!? 不潔触手!」

「じゃあどうしろってんだ? オレの触手の中に入ってくるのか?」

妖しく触手を蠢かせて冗談を言い、汚れたロープで納得させようとする。

密室の空間に片思いの少女と二人つきり。正直牡と肉紐の二倍欲求でどうにかなりそう、肉鞭の中に入つてこられたら襲ってしまうだろう。

故に彼女が寝静まった頃を見計らい、外に出て朝まで見張りをしようと思つていた所だ。

頬を染めた剣士は少し黙り、悩む。

「ッ……べ、別に構わないわ」

(は? 今何て……)

予想と違う返答を耳にした瞬間、触手が勝手にピクッと反応した。

すると本当に触手の中に入ろうと、女剣士は四つん這いで近寄ってくる。

「お、おいマジで入つてくんない!」

「し、仕様が無いじゃない! アンタはアタシを凍えさせる気!!」

慌てて立ち上がろうとしたが、エレアに一部の淫鞭を触られてしまう。

「ううッ!!」

細くて柔らかい手で掴まれた瞬間、ペニスを撫でられるのと同じ疼きが体に走る。今は触手も体の一部以上。愛撫されれば感じてしまう。

「きゃッ! ……う、うわあ凄いい」

柔らかな触手が筋肉の様に強張り、男根の如く打ち震える姿を赤眼の少女

は生唾を飲んで凝視していた。

「ッ! こ、この変態触手! いやらしい動きして。まさか、今までに女人に手出ししてないでしょうね!」

だが直ぐに表情を引き締め、触手を強く握られながら問い詰められる。

「し、してねえよバカ! だ、だから手、放せてッ!」

少し刺激されただけに、気を抜くと果てそう、肉鞭を食い縛り答えた。

「そ、そう……誰ともしてないの」

彼女は聞くと、安堵しつつ顔を緩ませて、女に飢えた淫鞭を撫で続け触手性欲を刺激する。

「で、でも万が一、アンタが女の人を襲つたらその人も大迷惑だし、可哀そうだし……だ、だから……」

今まで見た事が無い程顔を赤くすると真剣な瞳を向けてきた。

「特別にアタシが、あ、アンタを……骨抜きにしてあげても良いわよッ!」

簡単な愛撫でも果てそう、相手が何を言ったのか理解出来なかつた。

強情娘の、体を許す様な発言に男の思考が固まってしまう。

「ほ、骨抜きっておまー!」

その時、心臓の触手が強く脈動するのを感じ、体に一気に熱が籠った。

四つん這いの彼女に目を這わせ、胸当ての隙間、首元から布服に包まれた豊乳の深い谷間を注視してしまふ。

反らした腰の曲線を辿ると、ミニスカートの裏から覗く柔らかい太股へと続き淫質なラインを描いていた。

「ま、まあ仕様が無くだけ……ちよちよと何か言いなさいよ!」

暴走しそうな欲望の中、エレアは痺れを切らした様に顔を近付ける。

今まで何度も顔を合わせた、真紅の瞳に心を奪われ、黄金髪の甘い香に昂り、桃色の唇を奪いたいと感じたのは初めて。

(エレアを犯したい、犯したいッ!)

決して女性に手を出さないと誓っていたのにもかかわらず、何処からか頭に卑猥な考えが流れ込んでくる。

「エレアッ!」

ラルは叫ぶと動いた。己の体を包む触手を解き、女剣士の背中に回す。

「え、え? きゃあッ!」

動揺する可愛らしい声の主を突き飛ばすと、背中に回した柔らかい触手壁のクッションで受け止めた。

そのまま床に倒し、両手を彼女の頭横に突いて覆い被さる。

胸が柔らかく弾み、髪が舞うと鼻先に香る甘い体臭がより濃度を増し、童貞の牡欲を更に興奮させられた。

「あ、アンタ何をッ……!」

「エレア、はあ。オレ、オレッ!」

触手のクッションの一部を解くと戸惑う少女の両手両足に絡め拘束する。

自分が何をしようとしているのか理解しているが、骨抜き発言をされた触手心は止めようが無かつた。

「ちよ、ちよとッ、放しなさい!」

慌てて振り解こうとされるが、幾ら鍛えていても女の力では硬度、形を自

在に操る肉紐には無力。

「オレを骨抜きにするんだろ? だつたら……いいだろ?」

拘束した手足を広げ、彼女を大の字にして無防備にする。

「オレが、先にオレがしてやるよ!」

他人を、特にエレアを大事にしてきた人間のラルは戸惑うが、触手のラルは私が道を行く。

胸から新たに複数の触手を伸ばし、先端を細かく裂かせて変形させ、肉枝触手を作った。

艶々とした表面から溢れ出した粘液を先端や触手竿にじゅるじゅると蓄えながら、入念に準備を始める。

「ッ! あ、アンタなんか、アタシを気持ち良く出来る訳が、ふあひ!」

露出した腕の肌。そしてスカートとニーソの間から覗く太股を粘液塗れでヌメる触手ブラシで一撫でする。

途端にエレアはビクリと震え、反射的に小さな口から甘い声を漏らした。

「ン、ふッ……ぬ、ヌルッして、ふああ、触手熱い、くううッ!」

人肌以上に熱くて粘着質な柔軟刺激に対し、強情娘は歯を食い縛り堪えるが、蕩ける肉枝愛撫という未知の快感に体の筋肉を小刻みに震わせていた。

(触手は嫌いだって言ってたのに、もう気持ち良さそうじゃないかッ)

時折身をよじるが、それを誤魔化す様に口答えをする姿に食い入る。

「んふうッ、な、何この臭い……んは

「あー、ツンツンする……」
「気に入った？ それはオレのちと臭いと同じ臭いさ」

肉枝から滴る粘液には、己の棒汁を濃厚にした物を混ぜている。強気な剣士の汗ばむ体に、自分の物だと言わんばかりに牡臭を上塗りしていく。

「ら、ラルの……すうー。ッ！ く、臭くて堪らないわよ、ド変態！」

一瞬うつとりした牝顔で吸い込んだ様に思えたが、直ぐに目を尖らせて股間の臭いをけなされた。

（女の子の肌って、凄く柔らかい！）

が、少年は別の事に夢中だった。触手からラルに伝わる感覚は、己の手と同じ物。細く枝分かれした指先で、弾力があり弾き返してくる女肌を楽しんで撫でる。

鍛えられているがしつかりと牝体。ヌメる粘液と一緒に揉み込めば肌がつるつと逃げ、ひたすら追い求めて淫鞭を這わせた。

「は、んうッ！ や、やっぱり大した事無いわねえ、は、んううッ」
「……それなら、これは？」

触手の欲求がそうさせているのか素直に気持ち良いと認めない姿に、屈服させようと少年の気持ちが変わる。

露出した女体だけに這わせていた触手を、服に潜り込ませた。

「きやう!! も、潜り込ませるなあんう、に、にちやにちやって、ああ」
むちつとした太股を締め付けるニーソの中や、軽鎧の隙間、服の裾から触

手を入れ込み、じゆるじゆると卑猥な音で這い進む。

「ふああッ来るなあ性欲魔!! あ、き、来ちゃひやあ、来ちゃうッ!!」

びつちりと肌に張り付く服を押し広げつつ腹の括れを伝い、胸に近付けた瞬間彼女はより慌て始める。

胸当ての下へと消えた肉枝で、目当ての豊乳を探り当てた。下着越しでも十分柔らかく、直接では一体どれ程なのだと、ブラジャーの隙間にゆつくりと侵入させていく。

「んひああうッ!! も、もにゅもにゅって揉まれアはあ! いやらしく絡み付くなあアッ!! ア!? あハァン!!」

少女は鎧の中で肉枝がどういいう動きをしているのかを肌で鮮明に感じているらしく、喘ぎはより艶を帯びる。

（こ、これがエレアのおっぱい! なんて柔らかくて、温かいんだ!）

触手の欲望に呑まれた童貞のラルは初々しく乳房の感触に感動していた。

腕や太股よりも肉厚で柔軟。その姿が見えていなくても触手が豊乳に沈み込むのが解り、温もりに触手の先が震えてしまう程心地良い。

「オレの動きは下手糞なんだろう? だつたらいいじゃないか」

尋ねると少女は蕩け始めた赤眼をハツとさせ、そっぽを向く。

「そ、そうよ! 下手糞過ぎて、気持ち悪いつたらありやしないわ!」
唇を震わせ、汗が浮かび始めた頬を真っ赤にして言い訳してくる。

「……………そうか、悪かったな!」
「あ、そ、そうじゃなくて、え!」

何か言おうとしたが、待機させていた肉枝触手全てを問答無用で強情な剣士に絡ませる。

胸や足に絡ませた触手だけでなく、スカートの下の陰部付近も触手ブラシで激しくじゆるじゆると擦った。

「ああああッ! あああああッ!!」
ショーツの中に触手を入れ、牝丘に

触れるか触れないかという股の窪みを弄ると、腰を高く突き上げながら体を仰け反らせ、顔を歪めるエレア。

強烈な甘い刺激で更に高い快感悲鳴を上げ、必死に押し留めようとしていた牝反応を見せ始める。

「ほらほら、下手糞な愛撫に気持ち良くなつて来てるんだろ?」

普段なら彼女に対しこんな振る舞いは絶対にしない。だが今まで我慢にがまんを重ねた牝、そして触手の多大な

性欲で心が捻じ曲がっていた。
「!! へ、変態触手人間ッ! アタシはあ、気持ち良くなつてえない!」

剣士という立場、更にその性格から少女は中々折れようとしなない様だ。

（絶対に、絶対に屈服させる!）
しかし欲求塗れの触手人間にとつて、屈しない姿は興奮剤以外に他ならない。

触手少年は上体を起こし、胸当てに手を掛け半ば無理やり取り外す。

強情娘の布服と触手に包まれた二つの豊乳が自由を得て跳ねた。
服は多大な粘液で濡れ染み、ツンと

した汗と、牡棒汁と同じ臭いの触手粘液が混ざり合い卑猥に香る。

「なんだ、乳首ピンピンじゃないか」
わざと先端は外して刺激していたのに、服と下着越しでも解る位に彼女の胸の先端は尖り揺れている。

「ッ! ち、違う! これはそういうデザインの服だもんッ!」
「……………なら確認させてもらおう」

服の中に潜り込ませた触手の先を尖らせ、外に向かって突き立てて服と下着を一気に切り裂く。

「あッ!!」
エレアが言葉を失う中、服の胸部分に大きく開いた穴から、抑圧を失った乳房がたぶんっと重そうに顔を出す。

重力に引つ張られつつも丸い形を保つ乳房は粘液でじつとりと濡れ光り、ピンクの先端が切なく尖っていた。

「やっぱり。乳首こんなに勃起させて……触手好きの淫乱剣士」

剥き出しになった乳首に肉枝触手を絡ませ、入念に弄る。

小指の爪程に膨らむ先端をシゴくと腰をピクピクッと震わせ、口の端に涎を垂れさせてスカートの中の股をもどかしそうに揺らしていた。

「ふああッ!! ひゃんうッ! あ、あッ、か、感じて、感じてなんかあ」

声に段々と張りが無くなり悩ましげに言い淀み始め、荒い牝の息遣いをしてるのにまだ快感を否定する。

触手のブライドから苛立ちを感じ、少年は強情娘の膝後ろを触手で掴むと



付け音を聞かせると、限界間近の少女は首を左右に激しく振って堪える。

「最初は絶対に感じないって言ってたじゃないか、オレにおんこべろべろされて、おんこイキしないって」

「そッ、そんな事までええ、言つてないいいいああああッ!!」

淫核を指先で弄り、牝穴をほじり舐め、唇で大陰唇ごと覆い吸う。

すると膣口が収縮して押し込むショーツごとキyunと窄まり、防具で包む足が強張って牝絶頂間近なのを予告し、止めようも無い快感を叫んでくる。

「ああだ、ダメッ! い、イッチャッ、あッ!! き、来ちゃうから! あ、あッ、アッ!! はああああッ!!」

「ぶしやああああッ!!」

羞恥剣士が叫びと共に達すると同時に絶頂潮が牝肉から飛び出して来た。

(もしかして、コレが潮吹きか?)

柔らかに熱い秘部を覆った唇に射潮され、口内が淫臭で溢れ返る。

口から垂れそうな濃厚潮を本能的に喉を鳴らして飲み込んだ。

「ひああ、の、飲んでるうう、ラルに、アタシのを飲まれるうう」

ガクガクと痙攣し、背中を反らして顔を濁させた少女が見詰めてくる。

吹き出る牝潮を最後までちゅうつと啜り終えて、抱えた膝を下ろした。

「あああ、い、イッチャつたああ。アソコべろべろおされてえ、あはああ」

強情に吊っていた目は閉じられ、口からは荒い息遣いと涎を垂らし、快感

の余韻が残った牝顔のエレア。

呼吸の度に胸が震え、下着だけでなく太股周辺全体を唾液や愛液、潮と汗でべつとりと滴らせる彼女の姿を見て、少年は止めようの無い疼きを感じた。

「エレア」

一旦立ち上がり、大の字で脱力する絶頂少女に対して己の股間を見せる。

「え? ふあッ! そ、反つてる!!」

重たそうな顔を上げ、まどろむ視線でこちらの一物を見た途端、果てた疲れを忘れた如く目を見開く。

硬く反り返って天井を指す男根に驚き、多大な好奇の視線を注いで来た。

その間に柔らかな太股を再び開かせ、突き出された腰布の中に鋭い淫鞭を忍ばせてびしょ濡れのショーツを強引に破り捨てる。

「ふああッ! ぱ、パンツが!」

彼女は赤い瞳に動揺を浮かべ、体を揺すって抵抗しようとするが絶頂後で動きが鈍く殆ど意味が無い。

「……いいだろ? エレア」

深く正座をしながらスカートに勃起と体を割り込ませて甘く尋ねた。盛り

の付いた牝欲と犯したい触手欲で体が熱く、早くしゅぶりが付きたい。

「ッ……あ、アタシが骨抜きにするつて言つたけど、ま、まあ良いわ!」

すると女剣士は抵抗を止め、少し戸惑い気味に見詰めてきて暫く黙る。

「とつととソレ入れて、勝手に出すも

の出せばいいじゃないッ!」

頬を真っ赤にし、少し期待を含んだ

様な横目で窺ってきた。

最初はかなり拒絶していたのに、一度の絶頂で吹っ切れ、快感を求め始めているのだろうか?

(な、何か妙に、可愛いぞ?)

一応触手の意識が牝を屈服させた

と認識したのか征服欲が薄れ、少年自身の意識が戻り始めていく。

「それじゃあ……うわあ」

スカートを捲ると、何一つ隔たりの無い赤みを帯びた陰唇が露になる。

「じ、ジロジロ見ないでよドエロ!」

舌愛撫で潤むぶつくらとした女丘がランタンで眩しい位に照り、割れ目から濃い愛液を滴らせる姿に食い入っていると叱り付けられた。

強気な性格の剣士といえども、やはり乙女。人目に晒す事の無い一番デリケートな場所を、男に見られる羞恥心を感じているのだろう。

焦り気味に肉棒の表面を割れ目に当てると、熱くねつとりと潤んだ粘膜刺激にお互いの体がビクンと跳ねる。

「んはあ、ソッ! ああ、硬いのが、あ、当たつてえ」

軽く竿で陰唇を擦るとそれだけで彼女は感じ、こちらも尻に力が入る程に反応してしまふ。

「うお、まだ入れてないのに、クッ、とろとろで……ッ」

未だ繋がった事の無い牝裂に我慢出来なくなり、両手の親指で多大に濡れたソコを左右に割り開いた。

にちゅると割れた肉と肉の間を初め

て目にし、思わず生唾を飲む。

(うわあ、エレアのごこ、エロい!)

ピンク色で綺麗な粘膜が濡れて液糸が引き、外に流れる淫汁は下の肛門に滝の如く流れ始める。

勃起した淫核が硬くそり立ち、その下の牝膣は食欲旺盛な口の如くぱくぱくと物欲しそうにしている。

一緒にギルドで活動していた彼女も、男と交わる為の器官をしつかりと有している事実に興奮した。

「い、入れるぞ……」

片手で割り開いた淫部に、もう片方の手で掴んだベニスの先端を宛てがう。

「んソッ! き、先つぽがクニッて」

膣口に亀頭の先端を食い込ませると粘着質な音がして女剣士が身震いし、収縮する入り口が肉先を擦る。

「く、お、おとおおッ」

腰を突き出すと、濡れているのに強く窄まった膣道に己の肉棒が飲み込まれていく。進入を拒む刺激に腰の筋肉がヒクヒクと痙攣する快感を覚えた。

「あッ、は、入つて来るうう、はあ、あ、アッ!! い、ツうう」

亀頭の出っ張りが入り口を擦る刺激に対して彼女はビクンと強張った。

「や、やばい……く、くう!!」

初めての性感に意識が飛びそうであり、両手でエレアの細い腰を掴み勢い良く奥まで貫いた。

「ああああ!! お、奥にきやうう!!」

膣奥を強引に突けば、胸と黄金髪

本誌初登場の実力派が描く
腹ボテ陵辱ストーリー!!



それでうちの生徒に化けたおつもり?

ちょっとお待ちなさい!



獣魔の悪臭が
ここまで臭ってきますわよ!!

白魔術教会の戦士!?



学園白魔術師

マリエル

胎受魔獣

いしのかのん
石野鐘音

漫画
COMIC

コミックス「戦うヒロインも負けるとこのザマです」好評発売中!!

おバカな黒魔族の皆さんは
ご存じなかったのかしら？

わたくし聖堂マリエルが
この学園の守護委員長だということを！

ぐわっ

がっ！



生徒たちの生体反応は
消えていない…
皆無事でどこかに監禁
されているはずですよ

相変わらず
雑魚な方たちですわね！

ろくに気配も
消せないなんて

ふん…

~~~~~  
こちらは数が  
多すぎるもんでな









なに!?

う…

…これは…?

キ  
カ  
キ

上  
千  
ヨ  
ー  
ー  
ー

っ!?

くっ  
ネバネバしてっ動けな…

よおマリエルちゃん  
我が牧場によろこそ！

獣魔将!?

男子はオークどものエサに  
女子は種付け用の  
苗床になってもらったぜ

くくく…  
白魔戦士のお前は  
特に上等の苗床に  
なりそうだ

くっ汚い手で  
触らないでっ

ついにグラマトン聖教会へ潜入する  
ミーシャとメイベルローゼ！  
新たな力でスレアらを圧倒するも、  
生まれた魔王の前に敗北を喫し、  
牝奴隷調教を受ける！

# イセリア 英雄戦記

the Legend of the Aesepa War

第28話 目覚める魔王

小説 **火村龍** 挿絵 **牡丹**  
NOVEL ほむらりゅう ILLUSTRATION ぼたん

グラマトン聖教会。アリオナを閉じ込め、魔王復活の儀式を行っている部屋の扉前。門を護っていた兵士は、目の前に突然現れた人影に構えた槍の穂先を向け、それがエバ、ドーラといった面々であることに驚愕した。淫祇邪教の巫女——エバの純白聖衣が、赤黒く染まっている。

現れた人影は五つ。そのうちのひとつ、モノクルが欠けた女錬金術師スレアの身体は、鮮やかな切断面を晒し真つ二つに斬り裂かれている。

エバ以外に意識を保っている者はいなかった。兵士たちは呆気にとられた風をすればいいのかわからないといった風に佇んでいたが、次の瞬間に、その瞳は恐怖に染まった。

どす黒い闇が、スレアの身体を包み込む。辺りに散った血肉が切断面に集まり、ふたつの肉塊が互いに引き寄せあつてくつついていく。

「はあ、はあ、はあ……！」

エバは肩で息をししながら、その光景に見入っていた。恐ろしくも、引き寄せられずにはいられない圧倒的な魔の気配。これこそが、淫祇邪教が望むもの。エバは全身に鳥肌が立った。寒気に背筋が凍りつき、歓喜に唇が歪む。

「ゲホッ！ ガハアアッ……う、ぐぐうううっ!!」

スレアが——死んでいるはずの女の口から、大量の血と絞り出したような声が漏れた。スレアは激しく咳き込み、石畳の床に血と涎をぶちまける。

「い、生きて……る……!?!」

しばらくそうしていたスレアだったが、理性が戻ってきたのか、自分の身体を畏怖の籠もった瞳で見下ろし、エバに視線を移した。

「エ、エバ様、ご無事で……ひっ!?!」

あの錬金術師が。スレアIIエタームの表情が、畏怖と恐怖で凍りついた。凄まじい気配が渦巻く。そして、低い男の声が響き渡った。

「スレアIIエターム……。貴様は使える女だ。今回は生かしてやる。だが……次はないぞ……!?!」

頭に直接響く声。スレアは思わず姿勢を正し跪き、深々と頭を垂れた。

「は、はいっ！ あ、ありがとうございます……!?!」

声だけで自分にここまでさせる。衝動的に屈服してしまう。こんなことができるのはひとりしかない。正体などわかりきっている。

「魔王様が復活されるんだわ……!?!」

エバは血のついた聖衣を着ていることも忘れ、扉の向こうに進もうとした。

「ご報告が上がりました」

だがその時、背後から聞こえた声に、巫女は足を止める。振り向けば、プロンドの髪を床近くまで伸ばした美女、シフォンが立っていた。

「どうしたの?」エバが訊いた。

「帝国軍の先鋒が防衛ラインを突破。このままだと、今日中に教会までたどり着く可能性があります。現在、残存兵と既存の兵を集結し、再迎撃の準備

をしています」

そこまで——と、エバは息を飲んだ。予想よりも早い。軍隊に組み込まれた魔物の数を見誤ったかと、唇を噛む。そんなエバの胸中を知ってか知らずか、シフォンは淡々と報告を続けた。

「次いで、メイベルローゼ姫が教会外壁部に到達。イセリアのミーシャとともに侵入しようとしています」

そこまで言った時、エバの周囲に闇の気配が満ちた。影が少女を取り巻きなにやら囁く。エバは領くと、頭を垂れたスレアと、佇むシフォンに命令を下した。

「スレア、シフォン。メイベルローゼたちを迎撃しなさい。捕縛できるなら捕縛すること。決して教会内に入れないで。捕縛できなければ、時間稼ぎだけしてくれればいい。お願いね?」

「承知いたしました」

エバの声であつてエバのものではない、邪悪な力を持った王の言葉。スレアとシフォンは瞳を伏せ領いた。踵を返し、去っていくふたりの美女を見送り、エバは扉へ振り向いた。

「あひいっ! オンコいいのほおおおっ! で、でてきてしまます! 産まれるううう」

淫悦へと堕ちた王女の嬌声がかすかに聞こえてくる。闇の気配がエバの周囲から薄れていく。

「もうすぐ……!」

エバは祈るようにつぶやいた。

豪華絢爛な椅子に深く腰掛け、パロンドベルグ現皇帝・ギユスターヴは、ワイングラスをゆるりと回していた。謁見の間は開かれており、戦況を知らせる兵が直接駆け込めるようにしてある。広間は薄暗く、壁の両側のガラスには幕が張られていた。ワインを口に含んだ皇帝は、扉が開いたのを見て、空になったグラスを指で弄んだ。

入ってきたのは、戦場の匂いを引きずった名もなき兵士だった。扉の外に控えている番兵に預けたのだろう、剣は携えていなかった。兵士は目を伏せ、跪くことなく簡潔に状況を報告した。

「グラマトン軍は、パロンドベルグ先鋒隊のみで撃破。本隊の到着を待つことなく、先鋒は進軍中。抵抗は少なく、このままだければ本日から明日中に聖教会に攻め込むことが可能である。兵士が出ていき、再び広間は静寂に満ちた。」

グラマトン軍を、先鋒の少数で撃破できたのは想定内の範囲内だった。パロンドベルグ軍は、恐るべき魔物を従えた屈強な軍隊なのだ。まともにぶつかりあつて、教会側に勝ち目などあるはずがない。

——先鋒は、本隊の到着を待たず進軍中。

ギユスターヴは、数分前には問題ないと聞き流した言葉が、ふと気になった。フィオナはすでに手に入れた。もうグラマトンに用はない。そう考え、グ

ラマトン制圧を命じた。送り込んだ軍隊は、屈強な兵士が十人集まっても勝てない魔物を主軸に据えた軍隊だ。先鋒隊だけでグラマトン軍を突破できるのも、当然と言えた。

ギユスターヴは、引つかかった言葉の意味を冷静に分析する。

魔物を主軸に据えた軍隊は、強力ではあるが脆いと考えていた。なにしろ、魔物を操る技術は、バードベルグで開発されたものではなくグラマトンから伝わったものなのだ。当然、魔物たちが裏切れることは想定に入れておかなければならない。

(グラマトンに向かった軍は、敗走するかもしれない)

ギユスターヴはその可能性を思ったが、それでも問題はないのだ。本国には、魔物ではなく兵士を主力とした軍隊が控えている。優れた將軍のもとで鍛え上げられた軍は、時に魔物を凌駕する力を発揮するものだ。

「この力もある」

ギユスターヴは、力を確かめるように声に出した。フィオナの処女を奪って手に入れた力。これがあれば、どんな予想外の事態が起こっても、対応することは容易だろう。

二重三重に張り巡らされた勝利の軍略。ギユスターヴは、ひとり嗤うのだった。

グラマトン聖教会近郊、森の出口。

「着いたっ!!」

メイベルローゼたちは森から飛び出し、眼前に広がる平地の向こう、巨大な聖教会の外壁を睨んだ。メイベルローゼの全身から、忌錐と魔眼の魔力が迸る。ミーシャもその隣に並び、「アリオナ……」とつぶやいた。

「おふたりとも、もつと慎重に行くべきでは……」

ふたりに遅れること数秒、メイベルローゼお付きの騎士であるイーバは、辺りの気配を窺いながら進言した。

森の中を進撃する間も、イーバは何度も、なるべく気配を気取られぬように進むべきだと忠告していた。しかし、ふたりとも聞く耳を持たず、風のような早さで進み、居並ぶオークなどの魔物を蹴散らして進んできていた。

「イーバ、大丈夫よ。今の私なら負けないわ」

メイベルローゼが笑えば、

「我は冷静にや。兵は神速を尊ぶ。早いにこしたことはないのにや」

と、ミーシャもメイベルに同意する。そしてふたりの美少女たちは、素早い動きで森の外縁部を駆けると、教会の外壁から侵入を試みようとした。その時だった。

「にやああっ!!」「メイベルローゼ様、下がって!」

ふたりの前衛戦士が魔眼姫の前に躍り出ると、宙を飛び迫り来る魔法を弾いた。そして、ふたりが着地しないうちに、忌錐エネカラの蜘蛛の脚が蠢き、同じく魔光弾を放つ。

激しいぶつかり合いに砂埃が舞う。そしてその中から、人影がふたつ現れた。

「フフ、ここから先は通しませんわ!」

「スレア……。シフォン……!」

メイベルローゼたちは構える。やはり、立ちふさがったのはこのふたりだった。魔眼を封じた憎き錬金術師に、なにを考えているかわからない糸目の美女。だが、今のメイベルローゼたちは、もう以前の彼女たちではなかった。

「メイベルローゼ、やれるかにや?」

不敵な笑みを浮かべたミーシャが、メイベルローゼを横目で見る。メイベルもその視線を受けて、ニヤリと笑ってみせた。

「とーぜんっ!!」

蜘蛛の瞳が妖しく光る。完全に忌錐をコントロール下に置いた魔眼姫に、スレアとシフォンの頬がひくりと引き撃つたのを、歴戦の戦士たちは見逃さなかった。

「さあ……始めましょうか」

メイベルの魔眼が力を解放する。スレアたちが動く。闘いが始まった――。

\* 教会内部、暗黒儀式の間前。

血みどろだった聖衣を着替えたエバは、自ら扉の番人となつて、扉の前に仁王立ちしていた。彼女の前に統々と兵士がやつてきては、戦況を報告していく。

すべてが、グラマトンにとつて最悪な方向へと進んでいた。

帝国軍との戦争は、先鋒すら破れず、後方の本陣を見ることも叶わぬまま蹴散らされている。メイベルローゼたちと戦闘を始めたスレア、シフォンの魔女組も、忌錐を操る魔眼姫、すべての武器を修めし最強の騎士ミーシャを前に防戦一方だという。

エバは、いつの間にか緊張で拳を固く握りしめていた。

自分の身を挺してでもこの扉だけは護らなければならない。早く、早く、早く、エバは祈った。そして、その祈りは通じる――暗黒への道に。

「ああああああっ!!」

アリオナの、熱の籠もった嬌声が、一層大きくなり、闇の気配とともに扉の向こうから漏れてきた。

「きた……!!」

エバの緊張が解け、歓喜へと変わった――。

魔王が、復活する。

\* 扉の向こう、暗黒儀式の間。

「あひいっ!! う、産まれるう!」

子宮の中から、臍を大きなものがぬるりと通り抜ける。出産には痛みが伴うはずだ。なのに、アリオナの顔に浮かんでいるのは凄まじい悦楽だった。陣痛すらなかった。

ぐじゅぶつ、にじゆるるうううっ! アリオナのジユクジユクと熟れた臍から聞こえてくるのは、とても出産しているとは思えない、卑猥な淫音であつ







ても、魔王の陵辱劇は終わることがない。絶頂する度に魔力を奪われ、ペニスの味を、魔の悦楽を刻まれていくアリオナの目に、もう理性の光はなかった。

「魔王様」

イキ狂い、気絶しかけている被害の女王の膺から己のイチモツを引き抜いた魔王の背に、グラマトンの巫女、エバの声がかげられた。魔王はゆっくりと立ち上がると、儀式台から降りて彼女のもとへ歩いていく。

「ひああああ……。ぬ、抜かないでええ……。私、もうそのオ●ンポがないと生きていけないのほお……」

台の上から、牝豚の情けない懇願が追ってくる。魔王は振り向くと、「おとなしく待ってれば、褒美をくれてやろう」と傲慢に囁い、少年とは思えない眼力でエバを見、「状況はどうなっている？」と問いかけた。

「はい。帝国軍が領内中程の防衛ラインを突破。教会前で、スレアとシフォンがメイベルローゼ、ミーシャと交戦中です」

「そうか、と魔王は頷く。」

「バンドベルグの姫たちは捕らえる。その後の処遇は任せよう。その後、帝国軍の迎撃に向かう。剣を持って。壊れてもいい、頑丈なものだ」

エバは御意、と頷き、すぐに控えの者に命じて持ってこさせる。魔王は儀式の間の床に敷いてあった汚れた布を

取ると、身体に巻きつけ外に出る。

「ちゃんとした着物を——」というエバを制し、差し出された剣を受け取る。そして、エバの腰に手を回すと、黒い塵とともに姿を消した。

——教会の門前。

「服従魔眼——!!」

「くっ!!」し、しまった……!!」

メイベルローゼの瞳が輝き、絶対服従の魔眼がスレアとシフォンをその支配下に置いた。

その瑞々しい肢体に傷ひとつないメイベルローゼ、ミーシャ、イーバとは反対に、スレアとシフォンは全身傷だらけで、服も裂け血が滲んでいた。復活した魔眼に加え、忌鏡を操るメイベルローゼ、そしてイセリアの大騎士団長のタッグは、斬り裂かれ復活したスレア、忌鏡に吸われた魔力が回復しきつていないシフォンには辛すぎた。

「メイベルローゼ、メイズの結界を解かせるにや」

息を整えたミーシャが言えば、サデイスティックな笑みを浮かべた魔眼姫も、

「そうね。それが終わったら、たつぷりいたぶってやるわ」と返す。

そして、メイベルローゼの唇が動き、

「メイズの結界を解きなさい」と命じようとした時だった。

「にやっ?!」「メイベルローゼ様ッ!!」

「きゃあっ?!」

突如、メイベルローゼ一行とスレア

たちの間に、魔力の爆発が起きた。倒れたスレアたちを庇うように、見知らぬ少年とエバが立っていた。

「なっ……!! 魔眼が!?!」

驚愕は終わらない。メイベルローゼが呆気にとられ瞳を見開く。絶対服従の魔眼の力が、正体不明の魔力によって断ち切られたのだ。

「何者だにや……?」「わからぬ……?」「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

「わからぬ……?」

時間差で攻撃を仕掛ける。

消耗していたとはいえず、スレアとシフォンを相手にして圧倒する三人の息の合った一斉攻撃。これ以上のタイミングはない。なのに、なぜ——?メイベルローゼたちは、イヤな予感を払拭することができなかった。

迫り来る魔法、剣線を見ても、少年は眉ひとつ動かさなかった。引きずっていた剣を片手で軽々と持ち上げ、身体の前に構える。

「……にや……?」

宙を舞うミーシャが、魔法を放つメイベルローゼが、走るイーバが目を見開いた。

少年の瞳が赤黒く輝く。全身から膨大な力が迸る。髪が逆立つ。剣が黒く燃える。

「——インベリアルダイブ」

おぞましい声が聞こえ、メイベルローゼたちは爆発に飲まれた。

「あうらう……。う、くはああ……。……」にや、ふにやああ……。……」

漆黒のボンデージを纏った若き肢体が、ピクピクと痙攣していた。クレーターの中央に、メイベルローゼたちが倒れていた。なにが起きたのか——。たった一撃、メイベルローゼたちは戦闘不能に追い込まれていた。そして、彼女たちを見下ろすのは、冷たい目をした少年だ。

「魔王様」

少年の隣に、頬をわずかに上気させ

たエバが寄り添う。その言葉に敗北の騎士たちは目を見張った。

「ま、魔王……!?!」

唾然とするメイベルローゼたちをよそに、魔王はポロポロになった剣を放り捨て、背後にかしづくスレアとシフオンに振り向く。

「スレア。この者たちは貴様に任せる。好きにするがいい。我はこれから、帝国軍を迎撃に向かう。今の力では、ここから迎撃できない」

「申し訳ありません。ワタシたちの力が及ばず……」

「よい。残りのメイズも、すぐに開放できよう。来い、エバ」

魔王は荒々しい笑みを浮かべると、恋に落ちた乙女のような表情を見せる巫女の腰を抱き、煙のように掻き消えた。

残されたのは、傷つきながらも動くことのできるスレア、シフオンと、敗北し剣も握れない騎士ミーシャ、イーバに、弱々しく喘ぐメイベルローゼのみだった。

「フフ。さて、よくもやってくれましたわね。今度は、こちらの番ですわ」立ち上がったスレアの指輪が輝き、魔法を放つ。それは敗北の乙女たちを包み込み、魔の牢獄に捕らえた――。

「ああつ！ は、放せええつ！ 放しなさいよつ!! あはあああ……!」  
教会内の一室、円形の調教器具に磔にされたメイベルローゼは、精いっぱい

いの虚勢を張って女錬金術師を睨みつけたが、それも虚しい抵抗に過ぎない。  
(ま、魔眼が発動しない……)

魔眼だけではなかった。今、メイベルの手脚を拘束器具に固着させているのは、忌鎖から放たれた粘糸であった。魔王の一撃に、忌鎖はコントロールを失い、女錬金術師の意のままに操られてしまっていた。

しなやかな脚がM字に開かれ、憎き女に大事なところを見せつける格好になっている恥辱に、魔眼姫の頬は赤く染まっていた。さらに、膣にはクスコのようなものが挿入され、膣奥まで見られてしまっている。

「くつ、こ、こんなことして、あとでひどいわよ！ ああつ！ ひいんつ!!」

しかし、メイベルの口から飛び出すのは、サディスティックな仮面を剥がされたマゾ牝の嬌声だ。トロトロと、開かされた膣に透明なローションが垂らされている。その度に、メイベルローゼは動かせない身体を震わせ、唇から涎を垂らして悶えてしまう。

ローションは強烈な媚毒でもあった。メイベルローゼは、かけられた直後に漏れ出した甘い吐息から、すぐにそれが牝を発情させるローションであることに気づいたが、その時にはもう、どろりとした粘液は膣粘膜に浸透してしまっていた。

「んくひいつ！ む、無駄よ！ こんな媚薬なんかで、わ、私は……!」

唇を噛みしめながら、スレアを睨みつける。おそろく、別の部屋に捕らえられたミーシャやイーバも、同じような責めを与えられているに違いない。快楽の虜にして、調教するつもりなのだ。絶対に負けないと、悲壮な決意を瞳に込める少女。しかし、手慣れた錬金術師は、そんな決意を恥辱と悦楽で踏みこむ。

「フフ。じゃあ、これはどうです？」  
スレアの指輪が光る。発動した魔法はメイベルローゼの膣口に収束し、弾けた。

「あ……!! ひ、あ……!! あひいいいいいつつ!! アソコがつ！ 私のアソコがあああつ!!」

囚われ、強力な媚薬ローションを受けながらも、必死に堪えていた絶叫が漏れ出した。じゅくじゅくと、一瞬で膣が熟れ、お漏らしのように愛液を噴く。悶えようにも手脚を動かせず、逃がせない快楽衝動が全身を駆け巡りメイベルローゼを狂わせる。  
「な、なんで……? なにもされてないのひ……!」

「すごいでしょう？ 今、あなたのオマンコは疼いたまま何日も放置されたのと同じ状態ですわ」そして、媚薬の効果も数十倍……。さあ、耐えられますか？

「あ、がつ！ こ、こんにゃのつ、た耐えられるに決まっへるれしよつ!! あひつ、はひいつつ!!」  
ピクンツ、ピクンツツ!! メイベル

ルの腰が激しく跳ねた。控えめな胸が張り詰め、乳首が勃起する。

(あああつ！ イ、イキたいいつ！ こ、こんな、どうしてつ!!) ほんとに焦らされまくったみひやいに……ああんつ！ 恥ずかしいお汁が漏れて……。い、今触られたら絶対イクうつ！ さ、触つてえつつ)

「もうこんなにオマンコ汁を垂らして……。身体は正直ですわね。でも、そんなに欲しがつても、あげませんわあ」  
徹底的に焦らして、牝奴隷にして差し上げます」

そう言うと、スレアはあろうことか開かれたピラピラのラビアに爪を立て、左右に引つ張ってきた。魔法によって一気に発情し焦らされた肉アワビがつままれる搔悦に、メイベルは白い喉を見せ絶叫する。

「あきやああああああつ！ やめつ！ あひいつつ!! あああああつ、おかひくなるうつつ!!」  
(しゅ、しゅごいいつ！ イクツ、イ、イけるつつ!!)

一瞬で、牝の悦び、最高のエクスタシーへ昇りつめていく姫。抵抗しなくちゃ、わかっている……。でも、でもイきたいつつ!! 術中に嵌まっていることはわかっていても、どうしようもない情欲にコントロールが効かない。理性と本能が分離し、身体と心が一致しない。悶え、喘ぎ、叫び、涙すら零しながら、絶頂できる悦びに震える。  
しかし――。

「残念でしたよ」

悪意がたつぷり詰まった笑い声とともに、スレアの指がラビアから離れた。

「ああっ!? い、いやあああつ!! どうしてっ!? ひやらあああつ!!」

いけなかった——。メイベルローゼは思わずおねだりするように叫んで、

「ああっ!」と恥辱に身を灼かれ唇を噛みしめた。そんな彼女に見せつけるように、スレアはチャイナドレスをはだけさせ、股間を露わにした。

「フフ、欲しいでしょう?」

そこにあるのは、前にも犯されたことのある立派な男根だった。

「い、いらないわよっ!! ふ、んんっ……!!」

メイベルローゼは首を振り、見たくもないと顔を背けるが、潤んだ瞳がチラチラと肉棒へ走っていた。

(こ、こんなのになら……)

考えずにはいられない。メイベルローゼの狭い牝穴に、めりめりと無理矢理侵入してくる肉棒。それは牝豚の掻き回して欲しいところを余すところなく掻き、ほじくり、膣壁がめくれるほどめちやくちやに突いてくれる——。

メイベルローゼの膣口から、ぷしゅぷしゅと愛液が噴き出し糸を引いた。

「本当にいらないますかあ?」

ちゅぷ、くちゅちゅ……。強情な魔眼姫の膣口を、スレアの細く長い指先がなぞる。

「くうううううううっ!! あつ、あつ……うひいっ!!」

途端、メイベルローゼの表情は被虐のマゾ豚に墮ち、唇がふにやりと濁り、ツユをお漏らしする。

「いい表情ですわ。そろそろ牝奴隷になりたくありませんか?」

「う、ううう。だ、誰が牝奴隷なんか……んへあああつ」

(だ、だめ! ぜんぜん抵抗できないっ!! 気持ちよすぎるわ!!)

もう、目の前で揺れるスレアの肉棒が欲しくてたまらない。掻き回して欲しい、発情マコをぐちゅぐちゅにしたい、発情マコをぐちゅぐちゅにしたい——!

スレアへの憎しみ、そして自分のプライドをかけて悶え苦しむメイベルローゼ。そんな健全な少女にだめ押しとばかりに、スレアはペニスをやつくりとシゴキ始めた。

ドブツ、ヌブツ。亀頭の先から、ドロリと濃厚な白濁精液が漏れ出した。敏感な鼻が漂う牡のニオイをたつぷりと吸い込み、「あああああ……」と情けない声を漏らさせる。

(イ、イッチやいそう……ッ!! こんなこと続けられたらおかしくなるうっ!!)

ピクッ、ピクピクッ!! もはや、乙女の肉体はニオイを嗅いだだけで達してしまいそうなほど発情していた。

——もう、限界……っ!!

メイベルローゼの精神が極限まで抉り墮とされ、ブルブルと震える瞳が半白目を剥いた。舌がだらりと垂れ、涎が首を伝って胸へと流れる。イきたいの、あと一歩でイけるのにイけな

い、そのあまりのもどかしさに気が狂いそうになる。

「どうですか、メイベルローゼ嬢。牝奴隷になると誓いますか? ワタシにアへ顔晒して許しを請えば、すぐにイかせてあげますよ?」

スレアは、白目を剥いてヒクヒク痙攣するメイベルローゼの頬の汗を指で掬い取り、耳元で囁いた。頬を触られたメイベルローゼは「ひぎいっ」と豚のような悲鳴をあげ、涙と愛液を垂らし腰をくねらせた。

メイベルローゼはだめ押しとばかりに、白濁液を塗り込んだ亀頭を魔眼姫の鼻先に突き出した。精液のニオイを吸い込んだメイベルローゼは、なにかの末期症状の如く激しく暴れ、絶頂を求めて涎を垂らした。しかし、それはイヤらしく淫靡で、サディストのスレアにとつてたまらない表情であった。

だが、そんなメイベルローゼにも一抹の理性が残っていたらしい。少女は、思考の欠片も残っていないようなヨがり顔を見せつつも首を横に振った。魔眼姫は屈しなかったが、スレアにとつて、この囚われの美姫が屈しても屈しなくてもどちらでもよかった。違いは、じわじわ壊していくか、今この場で壊すかではない。

「フフフ。では、容赦なく壊してあげます!!」

そう言うなり、スレアはメイベルローゼが心の準備をする間も与えず、彼女の子宮口まで一気に肉棒を突き刺し

た。

ズボオオツツツ! ぐじゅっ、じゅっつぷうううううっ!!

「あきやあああああつ!! イグッ、いっつぎゅうううううううっ!!」

全身がバラバラになりそんな快楽が総身を襲う。耐えられるはずがない。メイベルは一瞬で快楽に墮ち、絶叫し絶頂した。

ぷしゅあああああつ!! 小水混じりの絶頂汁が噴き出し、スレアの衣服を濡らす。硬直し、わななき、息が詰まる。拘束された身体は、縮こめることも、思いきり伸ばすことも許されない。

「あひいひいひいっ!! アアアアッ!! アアアアアアアアアアッ!!」

すでに、少しでも触られただけで絶頂してしまうほどに溜め込み、焦らされていたのだ。スレアの肉棒がもたらす破滅的な快楽の前に、魔眼姫の決意も、矜持も、なにかもが砕け散り淫獄に引きずり込まれる。汗が噴き出し涙が零れる。ありとあらゆる思考が魔悦にぬりつぶされ、イグことしか考えられない。こんな凄まじい快楽を得られるのなら、どうなつたつていい!!

「イグウウウウウウッ!! イグイグイグウウウウッ!!」

情けなきすぎる敗北アクメ顔を晒し、スレアのペニスを牝唇で啜え込むボンデー少女。その無様な顔に、スレア



は満足げに哄笑した。

「アハハハッ！ 情けないイキ顔です  
ね！！ でも、まだです。ワタシを痛め  
つけたこと、この程度で済むなんて思  
ったら大間違いですよ。もつともつと  
この子宮に快樂を刻み込んで、奴隷の  
立場をわからせてあげます！！」

「そんなあぁっ!? ゆ、許してっ！  
これ以上されたら私死んじやうっ！  
ひいっ!! 壊れちゃうからあぁあつ  
っ!!」

（い、息できないっ！ ほんとにダメ  
だわ!! オ、オ、ンコがこんなにも：  
…!!）

ズボツ、ぐじゆるっ、にちゅ、ずぼ  
おとおおっ!! 真っ赤に充血し膨れ  
あがつたラピアと、血管が浮き上がつ  
た、立派すぎるスレアのペニスが擦れ  
て卑猥な音色を奏でる。メイベルロー  
ゼは、自分が今どんなにエロティック  
で、淫らな顔をしているのかもわかっ  
ていなかった。快樂に任せ美しいツイ  
ンテールの髪を振り乱し、スレアの一  
突きで脳天まで貫かれる。

白目を剥き、唇の端で涎を泡立たせ  
たらだらと垂らす。極寒の大地に裸で  
放り出されたかのようにガチガチと歯  
を打ち鳴らし、「おとおつ、おとおお  
っ!!」と嗚咽めいた嬌声を漏らした。

スレアの責めは、そんなメイベルロ  
ーゼの情けないアへ顔を見てさらに  
荒々しくなる。小手先のテクニクで  
感じさせる必要などない。焦らされ発  
情した秘部は、乱暴に突かれれば突か

れるほど感じるのだ。

「はへっ、はへええええっ!! もつ  
とづいてええっ!! メイベルローゼの  
バカマコ、もつと乱暴にしへえええ  
っ!!」

突かれる度、メイベルローゼは壊れ  
ていった。精神の崩壊、墮落に比例す  
るように、膣内の漿液を搾り取るう  
と柔軟になり、愛液も粘度を増してペ  
ニスに絡みついていく。スレアのペニ  
スが膨れあがる。快樂神経が剥き出し  
になったような牝園でビクビクと牡莖  
が跳ね、メイベルローゼは喉を反らせ  
声も出せず絶頂した。

（ま、こイクウツ!! 墮ちりゅつ、壊  
れ……っ!! わらし、らめっ!!）

「クク、あなたの膣に、性奴隷の証を  
刻みつけてあげますよ!! ……フフ、  
もう聞こえていませんか?」

止まらない。スレアの抽挿も、圧倒  
的な魔悦も、エクスタシーに癡癡する  
膣も、なにもかも！ 聞こえない。ス  
レアの声も、自分がなにを叫んでいる  
のかも。終わりの見えない魔悦に、メ  
イベルローゼの脳がショートする。神  
経が灼かれ、全身が硬直する。

（も、もう……だ、だめえええ……!!）  
「イクううううっ!! イクツ、イツ  
ツクううううううっ!!」

獣のように喘ぎ、ただ叫ぶ。部屋の  
外に漏れるほどの、部屋が揺れるほど  
の大声で、メイベルローゼは叫び続け  
た――。

「あが……はへえええ……」

「ふん、もう気を失ったのですか」  
どぶつ、とペニスを引き抜き、スレ  
アは額に浮かんだ汗をぬぐった。開き  
つばなしの膣から白濁液が流れ出す。  
まだ、メイベルローゼの膣内に注ぎ込  
んだスペルマは魔導具へ変じてはいな  
かった。スレアは、この生意気な姫に  
次はどのような快樂を与えてやろうか  
と考える。いつそのこと壊してしまお  
うか。もう、この快樂に心は崩壊寸前  
だろう。あと少し責めれば、ポロポロ  
になつてペニスだけを求める牝豚にな  
るに違いない。

その時を想像してニヤニヤと嗤う錬  
金術師だったが、ふと背後に気配を感  
じ振り返った。  
「あら、シフォン。いつからいたの？」  
「少し前です。様子を見に」  
部屋の入り口に立っていたのは、糸  
目の女性、シフォンだった。

「ひううう……」  
わずかに意識がある魔眼姫が、無垢  
な少女のような声を出す。ぴくりとシ  
フォンの眉が動いたことに、スレアは  
気づかなかった。

――見なければよかった。  
シフォンは後悔した。すべては、意  
識を失いかけているメイベルローゼを  
サトリの魔眼で見たせいだった。

気持ちいい、もつと、もつと、もつ  
と!! イきたい、イかせて!! メイベ  
ルローゼの心にあつたのはその思いだ

けだった。しかし、それは表面だけの  
ことだ。しばらく見詰めていると、固  
く閉ざされた心の扉の奥にある思いが  
水泡のように浮かび上がってきた。

（フィオナ……。フィオナ……。ごめん  
ね。ごめんね……）

最初に浮かんだのは、イセリアの姫  
に対する想いだ。憎きイセリア公  
国。シフォンは静かに激した。だが、  
次に浮かんだ彼女の想いが、シフォン  
に言葉に表せない感情をもたらした。  
（父も母も、誰もわたしを見てくれな  
い。誰か、わたしを見て……。誰でも  
いいから……。わたしに、愛を……）

――ああ……。  
シフォンは嘆息した。  
この子は、愛を求めているのだ。憎  
しみの仮面を被って、その実、心の中  
は無垢な子供。愛を求め、父を、母を  
求めている……。

「スレア様」  
なぜこんなことをしているのかわか  
らない。シフォンは前に進み出ていた。  
「メイベルローゼ姫は壊れかけていま  
す。これ以上責めれば、性奴になる前  
に狂ってしまいます。このまま壊すよ  
り、もつと面白いことがありますわ」

「へえ、どんなこと？」  
シフォンに言われ、嗜虐心に飲まれ  
ていたスレアは理性を取り戻したらし  
い。昂奮し上気していた類の赤身が引  
いていく。シフォンはニヤリと笑うと、  
「メイベルローゼ様」  
美髪を靡かせメイベルローゼの前に

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**